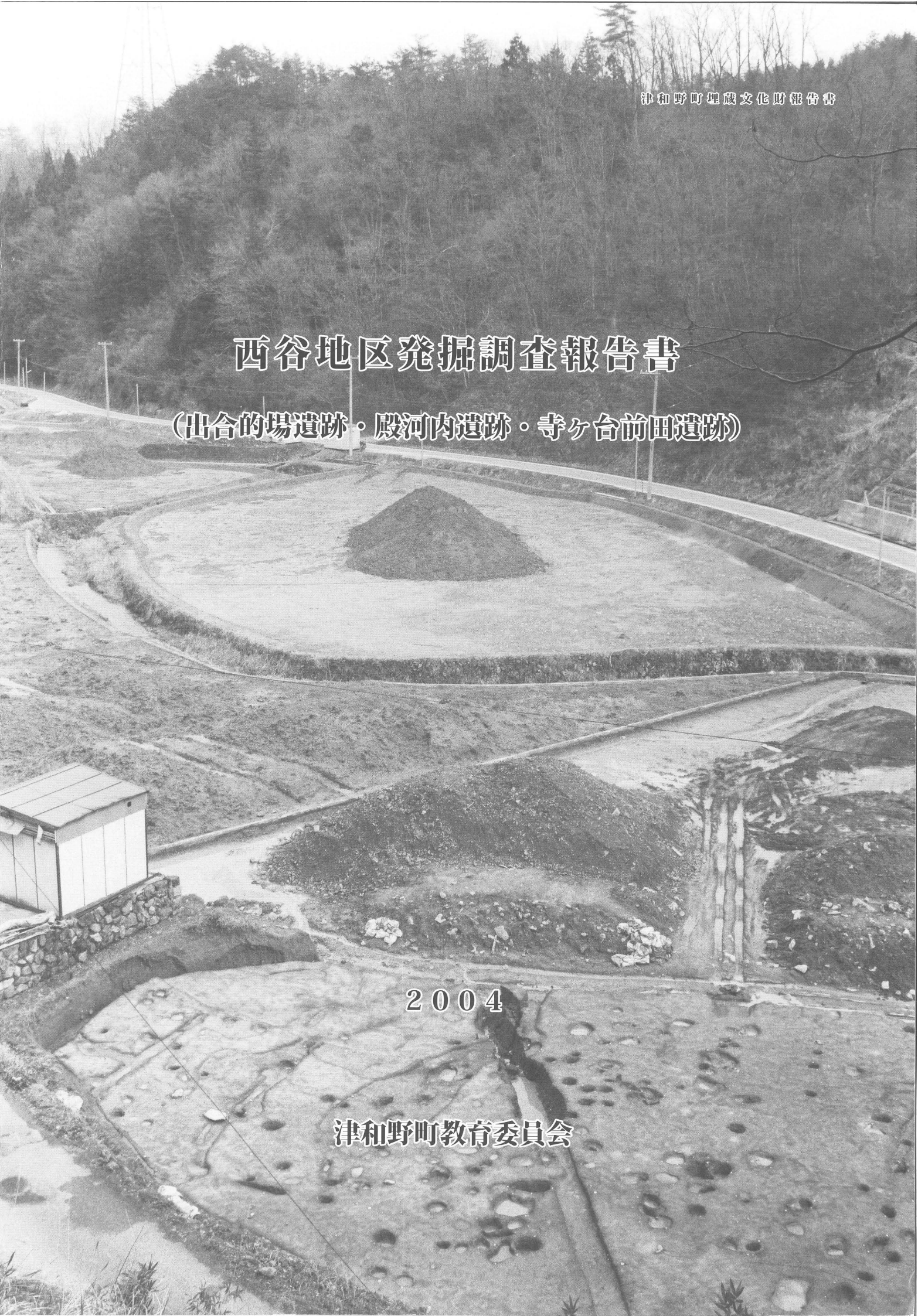
津和野町埋蔵文化財報告書

西谷地区発掘調査報告書

（出合的場遺跡・殿河内遺跡・寺ヶ台前田遺跡）



2004

津和野町教育委員会

西谷地区発掘調査報告書

(出合的場遺跡・殿河内遺跡・寺ヶ台前田遺跡)

２００４

津和野町教育委員会

寺ヶ台前田遺跡出土の板状鉱滓

序

山陰の小京都として知られる津和野町には、恵まれた自然環境の中で先人たちが生活していた証である貴重な文化財が数多く残されています。今回、西谷地区で県営中山間地総合整備事業に先だって発掘調査をおこないました。発掘調査の結果、中世から近世にかけての金属生産関係遺物などが出土し、中世集落変遷の一端が次第に明らかになってきました。
本書が埋蔵文化財の理解・普及に寄与し、学校教育・社会教育・学術研究の一資料として活用いただければ幸いです。最後になりましたが、発掘調査に際して多大なご理解・ご協力をいただきました島根県益田農林振興センター及び関係各位に対し、心より厚く御礼申し上げます。

平成16年3月25日

津和野町教育委員会
教育長　斎藤　数弘

例　　言

1．本書は、津和野町教育委員会が2002（平成14）年度に島根県益田農林振興センターから委託を受けて実施した、島根県鹿足郡津和野町大字邑輝、通称西谷・出合地区に所在する出合的場遺跡・殿河内遺跡・寺ヶ台前田遺跡の発掘調査報告書である。調査費の一部については、文化庁国庫補助費を使用している。
2．調査にあたっては、下記の方々に遺跡・遺物についてご指導いただいた。記して謝意を表します。（敬称略）
　伊藤徳広（島根県教育庁文化財課）、松島　弘（津和野町文化財保護審議会会長）、
　渡辺一雄（梅光学院大学）
3．調査にあたっては、下記の方々にご協力いただいた。記して謝意を表します。（敬称略）
　岩本匠、斎藤勲、前田貢（土地所有者）
　水津満男、西尾克巳、守岡正司、渡辺聡、有原八郎、近藤英隆、宮本正保、澤田正明、椿真治、角田徳幸、東森晋、池田善文、森田孝一、遠藤浩巳、大野芳典
4．金属遺物分析については村上隆氏（奈良文化財研究所）に依頼し玉稿を賜った。記して謝意を表します。また、一部の分析については、㈱コベルコ科研に委託しており、附編1はこの分析内容に基づく。
5．出土陶磁器については、村上勇氏（広島県立美術館）に鑑定いただいた。記して謝意を表します。
6．出土石製品については、松里英男氏（山口地学会）に表面観察による石材同定をいただいた。記して謝意を表します。
7．自然科学分析業務については文化財調査コンサルタント株式会社に委託した。
8．本書に用いた方位は、第1～3図は真北、その他の図は国土調査法第Ⅲ座標系に基づく座標北（日本測地系）である。
9．本書に用いた土色は下記に準拠した。
　農林水産省農林水産技術会議事務局（監修）『新版標準土色帖』1998年版
10．遺物注記等に用いた調査番号は下記のとおりである。
　出合的場遺跡　　第1次調査　DMB－1
　殿河内遺跡　　第1次調査　TNG－1
　寺ヶ台前田遺跡　第1次調査　TDM－1
11．遺構番号は遺構種別ごとの番号とし、下記略号をもちいた。連続して調査することとなった3遺跡での遺構番号の混乱を避けるため、遺構番号は下記のとおりとした。（一部欠番あり）
　SB：掘立柱建物跡、SD：溝、SK：土坑、SX：その他の遺構、SP：ピット・柱穴

遺跡名	SB	SD	SK	SX	SP
出合的場遺跡	-	-	-	-	-
殿河内遺跡	1～5	-	1～5	1～8	1～44
寺ヶ台前田遺跡	11～19	1～9	11～52	11～38	101～750

12．調査に伴う記録類及び出土遺物は、津和野町教育委員会で保管している。
13．本書は永田・椋木の協力のもと、宮田が編集にあたった。

目　　次

第１章　西谷地区発掘調査の経緯・・・

第１章　西谷地区発掘調査の経緯

第１節　発掘調査に至る経緯

西谷地区において県営中山間地総合整備事業（ほ場整備）が計画され、事業主体である島根県益田農林振興センターと津和野町教育委員会は、埋蔵文化財の取り扱いについて協議を重ねてきた。遺跡の詳細な範囲を事前に把握するために、2000（平成12）年度には西谷出合地区全域について国庫補助事業として試掘調査を実施した。その後、事業主体者と再協議の結果、遺跡の確認された範囲のうち掘削される部分について本発掘調査をおこなうこととなった。2002（平成14）年度に本発掘調査をおこない、2003（平成15）年度に発掘調査報告書を作成することとなった。

第２節　調査体制

今回の調査体制は、下記のとおりである。

調査主体	津和野町教育委員会	教育長	斎藤　数弘
事務局	〃	教育次長	斎藤　誠、廣石　修
		文化係	米本　潔
調査担当者	〃	文化係	宮田　健一
調査補助員	〃	嘱託	永田　茂美
調査補助員	〃	臨時職員	椋木　牧子

発掘作業員

青木正充、青木正子、岩本昭子、岩本和子、岩本トヨ子、前田貢、村上茂子、岩本二郎、波田香保里、耕野保、徳本静夫、出本孝人、三浦久男、河野実、倉増信男、石井忠、陶山晃

第３節　調査の経過と方法

発掘現地調査は2002年9月11日～10月10日に出合的場遺跡、10月16日～11月29日に殿河内遺跡、12月2日～2003年3月10日に寺ヶ台前田遺跡の順に実施した。発掘調査後には町広報誌上に発掘速報を掲載した。

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

現在の行政区は、津和野町大字邑輝、西谷・出合地区である。津和野市街地からは、直線距離にして約５km 北西方向の位置にある。遺跡は標高約 210 mに位置し、津和野川の支流である白石川・西谷川に隣接する。白石川と西谷川の合流する出合地区には出合的場遺跡があり、出合地区から西南西方向に延びた長さ約２km の細長い谷盆地である西谷地区には、殿河内遺跡と寺ヶ台前田遺跡がある。なお、西谷地区は地元では通称「にしだん」と呼ばれる。

第２節　歴史的環境

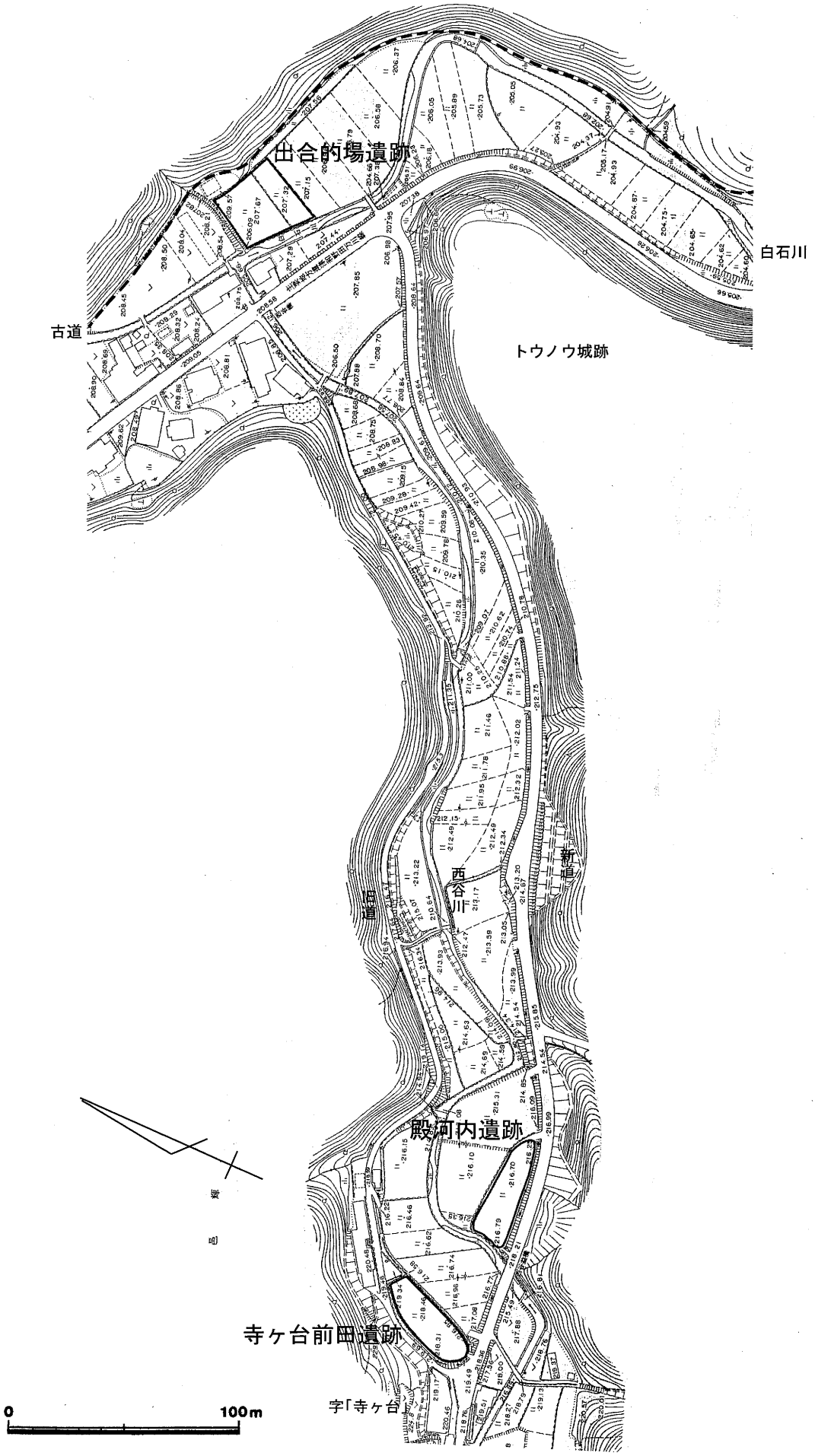
津和野の歴史は、これまでのところ縄文時代早期にまで遡り、高田遺跡、山崎遺跡からは押型文土器が出土している。また、高田遺跡からは中期の阿高式、後期中頃の鐘崎式土器がまとまって発見され、対岸の大蔭遺跡からは後期後半の西平式土器が採集されるなど、当時この地域が九州地方の情報の及ぶ範囲であったことが窺える。弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての集落が高田遺跡で確認され、在地の土器群に混じって吉備地方から運ばれてきた外来の土器が発見されている。町内の古墳は、津和野川最上流の木部地区において鍛冶原古墳群が確認されているのみである。高田遺跡からは奈良・平安時代の緑釉陶器、皇朝十二銭の一つ承和昌寶（836 年初鋳）、大量の土師器、須恵器が発見されており、当時石見国鹿足郡能濃郷（元美濃郡鹿足郷）と呼ばれていたこの地域の重要な拠点が高田地区にあったものと思われる。

中世津和野の領主吉見氏は、弘安５（1282）年に元寇再防備のため能登国から津和野北部の木部地区に入り、その後 14C 代に津和野城を構えたと伝えられている。文献では吉見氏入部以前の記録はほとんど残されていないが、これまでの高田遺跡の発掘調査では 12・13C 代の白磁が大量に出土しており、吉見氏入部以前に津和野地方に有力者が存在していたことが考古学的証拠によって明らかになりつつある。中世の津和野城の大手口は近世以降の大手口とは反対側の喜時雨にあったと伝えられ、吉見氏の居館も同地に存在していたとするのが通説である。西谷地区には「的場」・「殿河内」・「寺ヶ台」・「前田」などの中世村落の様子を示唆する字名が残り、寺ヶ台五輪塔など中世以降の石造物も見受けられる。

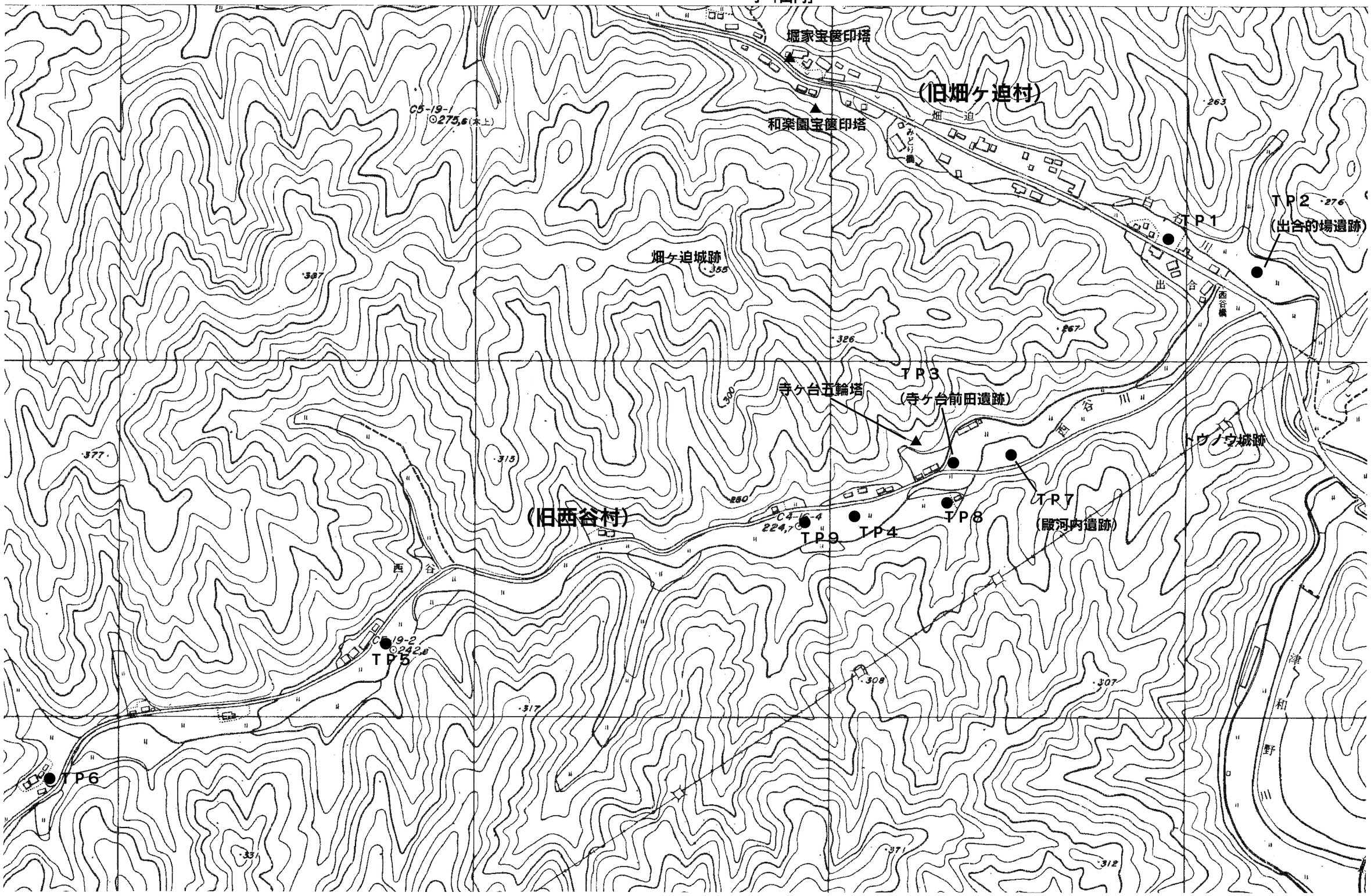
関ヶ原の役後、吉見氏は毛利氏に伴い萩に移るが、その後坂崎出羽守の 16 年間の治領となり、津和野城の大改築・城下町整備など、現在の町並みの基礎となる大事業が行われた。その後、亀井氏 11代２25 年間の治世を経て明治維新を迎えることとなる。

第１図　関連遺跡位置図（1/50,000）

1 出合的場遺跡　2 殿河内遺跡　3 寺ヶ台前田遺跡　4 トウノウ城跡　5 畑ヶ迫城跡
6 畑ヶ迫遺跡　7 堀家宝篋印塔　8 伝山大将の墓　9 笹ヶ谷銅山跡
10 津和野城跡　11 木薗遺跡（吉見氏居館跡）　12 高田遺跡　13 喜時雨遺跡
14 横瀬遺跡　15 大原遺跡　16 土井原遺跡



第２図　発掘調査対象範囲の現況図（1/2,500）



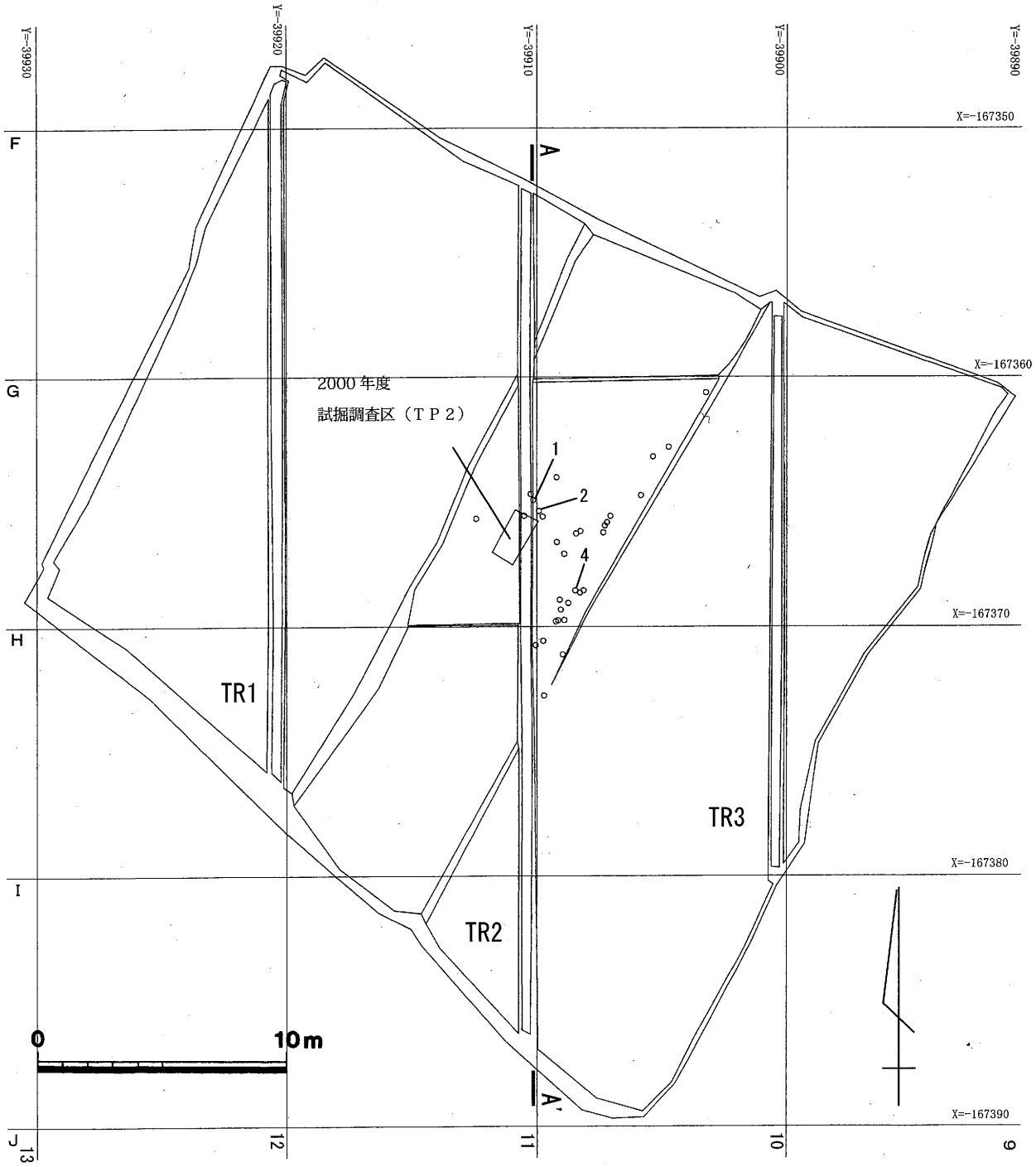
第３図　西谷出合地区試掘調査区配置図（1/5,000）

第３章　発掘調査の結果

第１節　出合的場遺跡の調査

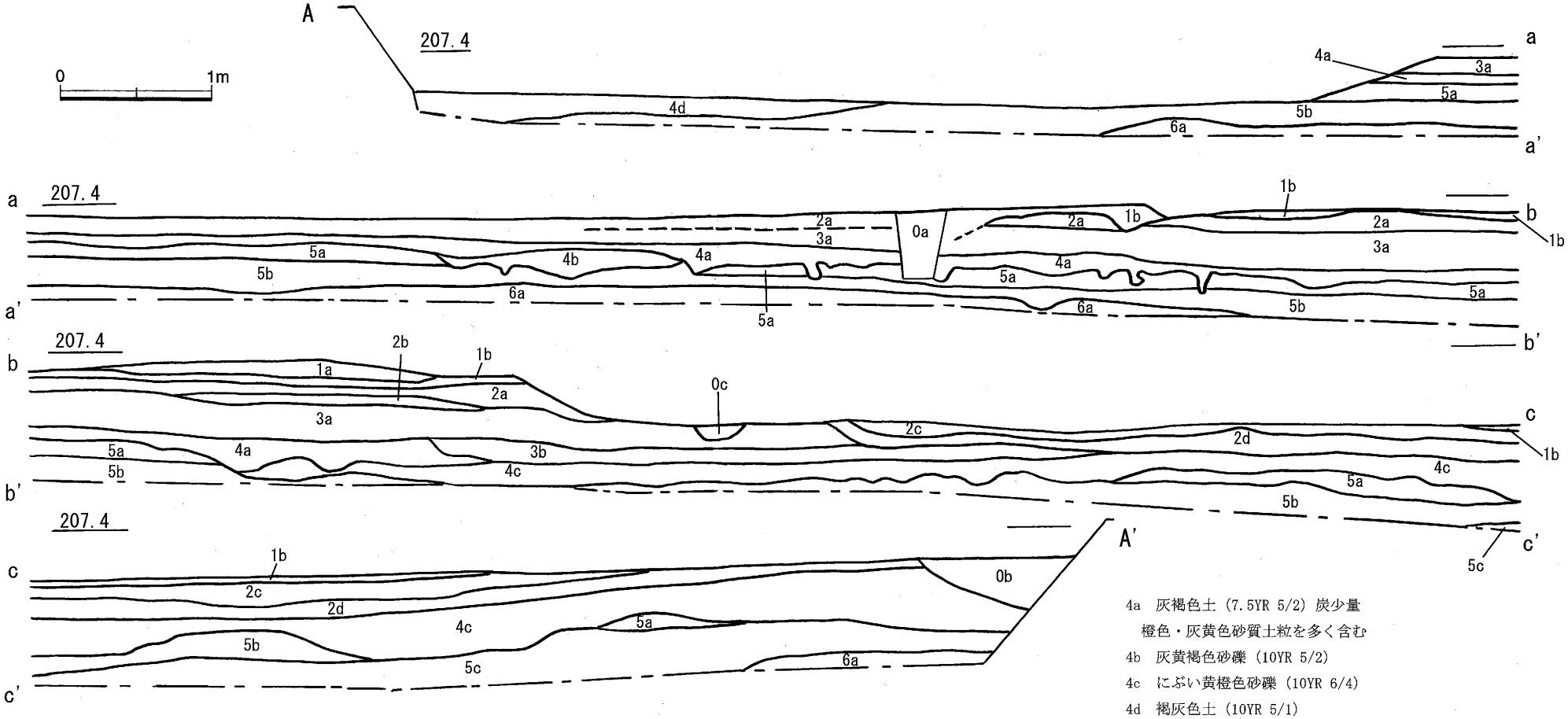
１．概要

古道（地籍図中のいわゆる赤線）の南側に設定した調査区である。この道は津和野藩主が領内を巡検する際に使用したと伝えられており、津和野城下と北方の木部地区を結ぶ主要な道であった。発掘調査の結果、遺構は確認できなかった。トレンチを３本発掘したところ、埋土は砂利層で、かつては水が流れ、洪水により一時に埋没したと考えられる。包含層からは、土師器底部、貿易陶磁器などが出土しており、中世以降に埋まったと推定される。



第４図　出合的場遺跡調査区全図（1/250）

○印は遺物出土地点。番号は第６図の遺物番号。



0a　灰褐色粘土（2000年度試掘調査TP2埋土）
0b　暗褐色土（河川護岸工事撹乱土）
0c　灰色粘土（石垣構築撹乱土）

1a　灰黄褐色土（10YR 5/2）
1b　灰色粘質土（N 6/0）旧耕作土

2a　灰褐色土（7.5YR 5/2）
鉄・マンガン分を多く含む。旧床土
2b　灰褐色土（7.5YR 4/2）
2c　暗褐色砂質土（7.5YR 3/3）
2d　灰褐色砂質土（7.5YR 5/2）

3a　灰褐色土（7.5YR 5/2）炭少量
3b　褐灰色土（7.5YR 5/1）炭少量

4a　灰褐色土（7.5YR 5/2）炭少量
橙色・灰黄色砂質土粒を多く含む
4b　灰黄褐色砂礫（10YR 5/2）
4c　にぶい黄橙色砂礫（10YR 6/4）
4d　褐灰色土（10YR 5/1）
1～5cmの石を非常に多く含む

5a　灰褐色粘質土（7.5YR 5/2）炭少量
5b　褐灰色粘質土（7.5YR 5/1）炭少量
5c　褐灰色砂質土（7.5YR 5/1）

6a　灰オリーブ色砂質土（5Y 6/2）炭少量

第５図　出合的場遺跡トレンチ２　土層断面図（1/40）

トレンチ調査の結果、トレンチ２中間の試掘調査区ＴＰ２周辺で中世かと推定される遺物がまとまっていたことから、平面発掘ではこの範囲を中心に調査することとした。

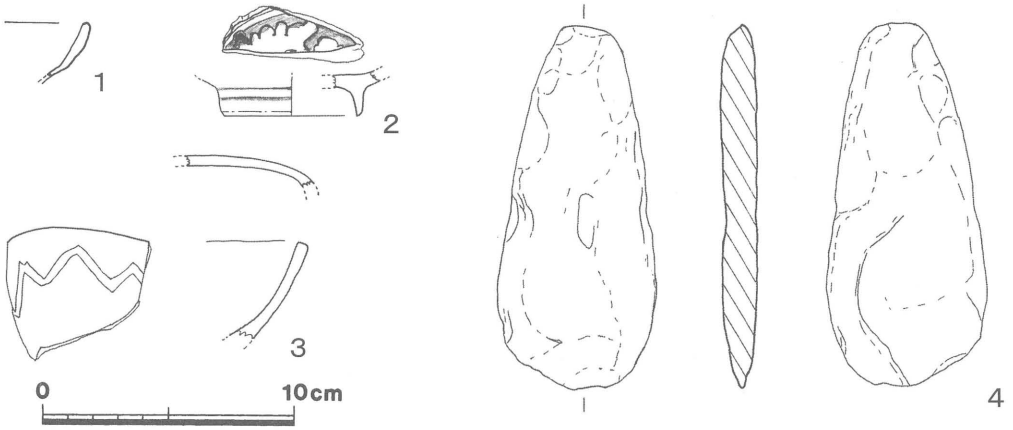
平面発掘の結果は、水田造成土中に遺物が出土する状況であり、造成土の厚い南東側を中心に遺物が出土した。平面調査の結果、遺構は確認されず、遺物も原位置を保った状況ではないと考えられたため、調査範囲中央部のみの平面調査とした。

２．基本層序

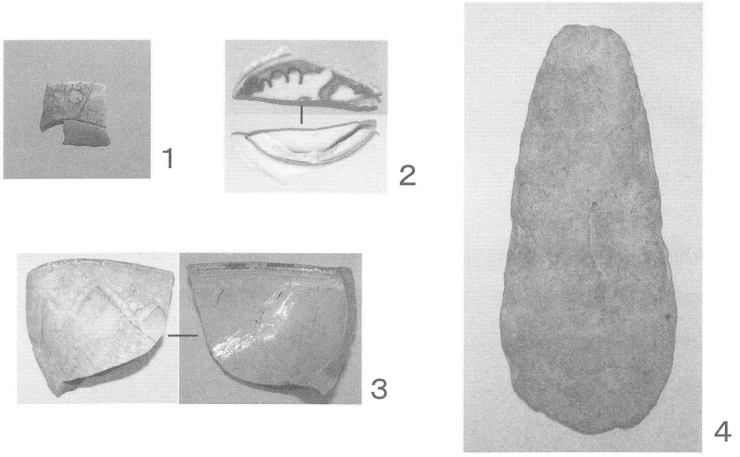
発掘前の表土および床土等は、重機によりあらかじめ除去した後のトレンチ土層断面である。基本層序は、撹乱土である第０層、旧水田の旧耕作土までの第１層、旧水田の造成土と考えられる第２層、灰褐色～褐灰色系の土である第３層、砂礫混じり土である第４層、灰褐色～褐灰色系の粘質土である第５層、灰オリーブ色系の砂質土である第６層に大別される。第３～６層には炭を少量含む土があるが、すべてが人為的なものであるかどうかは断定できなかった。出土遺物の多くは、旧水田の造成土と考えられる第２層に含まれていた。

３．遺構に伴わない遺物

１は土師器皿の口縁部で、中世以降のものである。２は貿易陶磁器の青花碗で、16Ｃ後半のものである。３は内外面に藁灰釉のかかった陶器の向付で、外面には山形の沈線文が施される。茶道具の一つで、萩焼と考えられる。４は縄文期と考えられる打製石斧であり、砂岩製かと考えられる。



第６図　出合的場遺跡出土遺物（1/3）



出合的場遺跡出土遺物

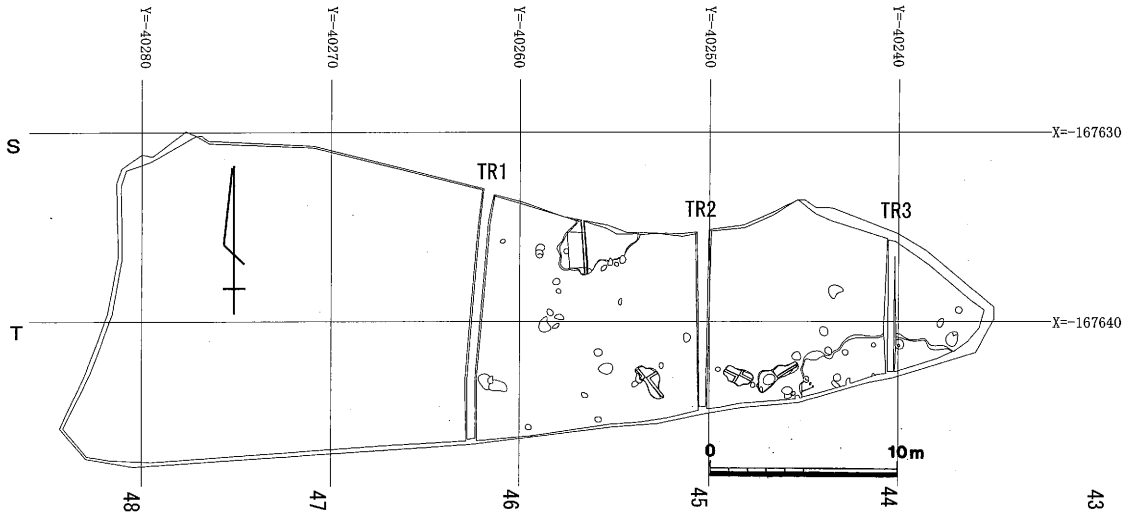
第２節　殿河内遺跡の調査

１．概要

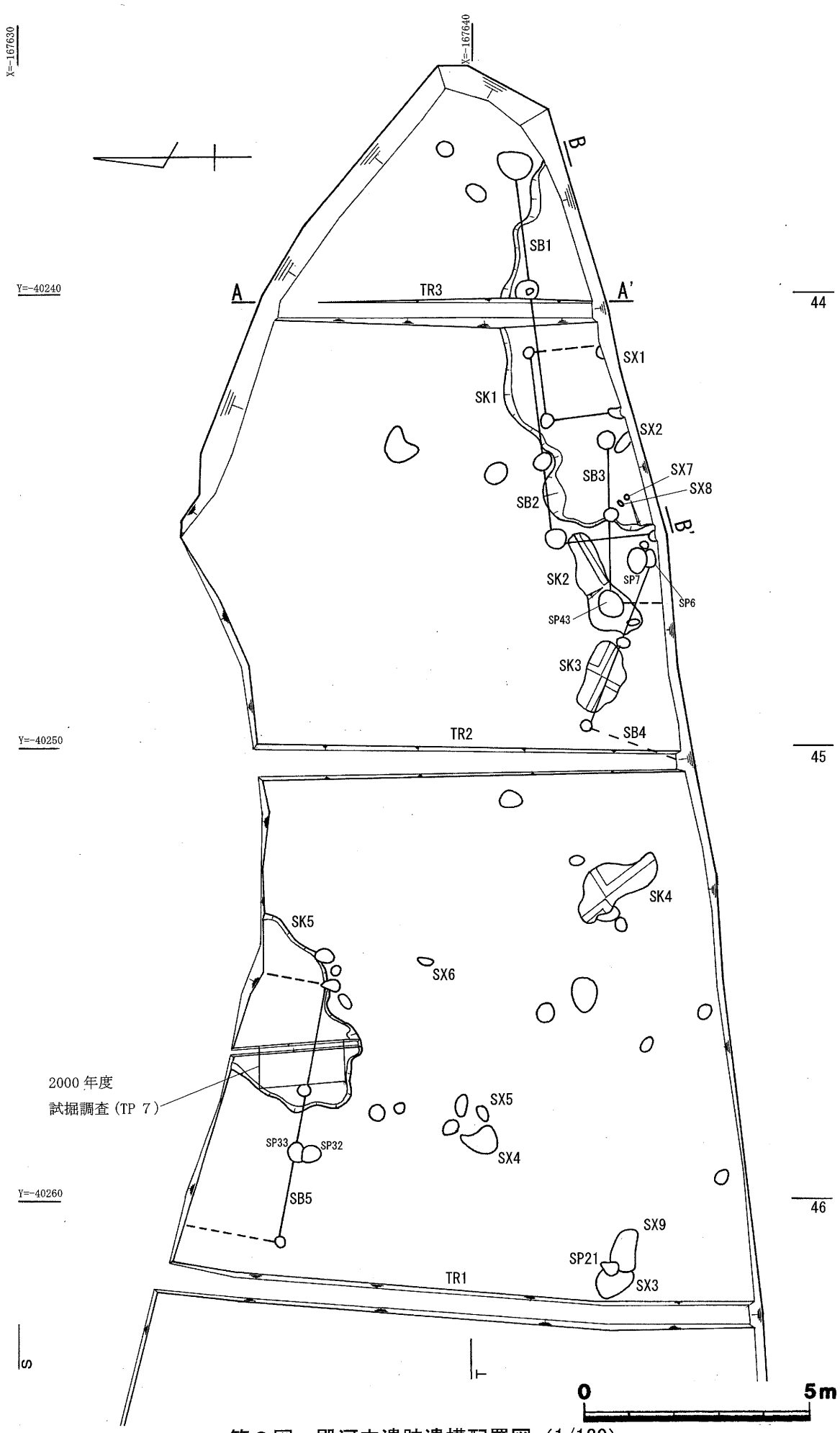
西谷川と背後の山に挟まれた100 × 50 m四方以内の狭い範囲にある遺跡であることが、これまでの試掘調査の結果から推定されていた。今回の本調査の結果、遺跡西半は西谷川の氾濫原であり、遺跡東半で中世前期の集落跡の一部が発見された。遺跡西辺付近は後世の水田造成によって削平を受けており、遺構は発見できなかった。遺構には掘立柱建物跡２棟、土坑６基がある。遺跡の主体は、調査区外北側にあるものと考えられる。

２．基本層序

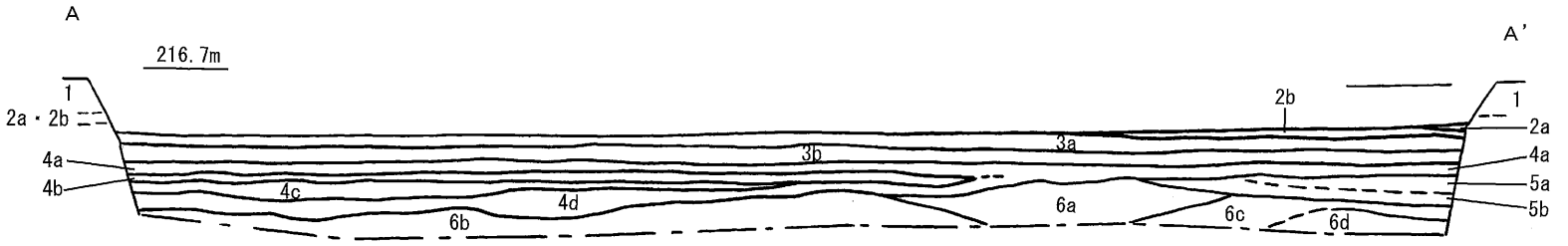
先行しておこなった試掘調査の結果から、発掘前の表土・床土、および近世以降の造成と考えられる土層は、重機によりあらかじめ除去した後のトレンチ土層断面である。基本層序は、撹乱土である第０層、現代の水田耕作土の第１層、現代の水田床土の第２層、近代以前の造成土あるいは旧耕作土と考えられる第３層、近代以前の水田の旧床土と考えられる第４層、中世包含層である第５層、無遺物包含層である基盤土の第６層に大別される。特に第４層の旧床土には、多量の硬化した鉄・マンガン分が沈着しており、遺構検出を困難にした。



第７図　殿河内遺跡調査区全図（1/400）



第８図　殿河内遺跡遺構配置図（1/120）



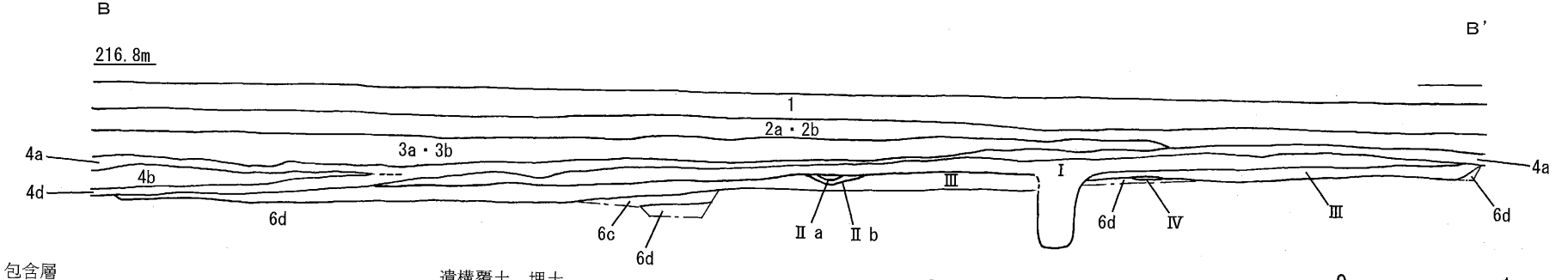
1　褐灰色粘土（10YR 5/1）
2a 明赤褐色土（2.5YR 5/6）
2b 黒褐色土（5YR 2/1）
3a 褐灰色土（10YR 5/1）
3b 灰黄色土（2.5Y 6/2）

4a 橙色土（7.5YR 6/6）
下面にマンガン分沈着
4b 黄灰色土（2.5Y 6/1）
4c 明黄褐色土（10YR 6/6）
4d 黒色土（10YR 2/1）
マンガン分沈着

5a 灰黄褐色土（10YR 5/2）
炭を多く含む
5b 褐灰色土（10YR 4/1）
炭を多く含む

6a 褐色土（7.5YR 4/3）
3～5cmの石を多く含む
6b 褐灰色砂礫（10YR 4/1）
1～30cmの石を非常に多く含む
6c オリーブ灰色土（2.5GY 6/1）
6d にぶい褐色砂質土（7.5YR 5/4）

第９図　殿河内遺跡トレンチ３北壁　土層断面図（1/40）



包含層
1～6d　（トレンチ３の土色番号に対応）

遺構覆土、埋土
ＳＫ１覆土・ＳＰ38埋土
Ⅰ　灰黄褐色土（10YR5/2）炭を多く含む
ＳＫ１埋土
Ⅲ　褐灰色土（10YR4/1）　炭を多く含む

ＳＸ１
Ⅱa　赤褐色土（10R4/4）　焼土
Ⅱb　暗赤灰色土（10R3/1）焼土
ＳＸ２
Ⅳ　炭

第10図　殿河内遺跡調査区東壁　土層断面図（1/40）

３．遺構

発掘された遺構には、土坑、炭・焼土関連遺構、掘立柱建物跡、柱穴・ピットがあるが、紙面の関係から主要な遺構についてのみ図示した。

（１）土坑

検出された土坑はいずれも約 10cm 以下と浅いものが多い。

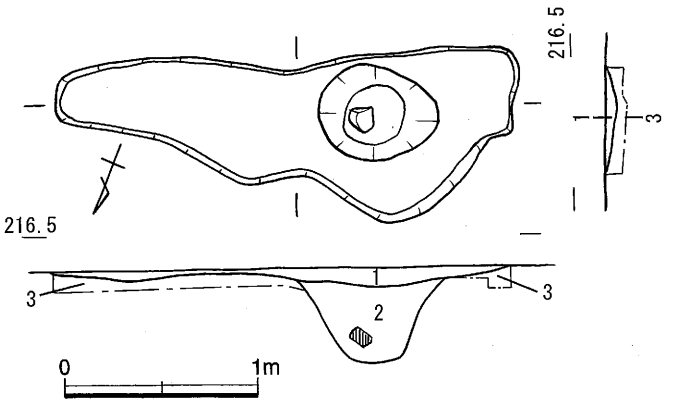
ＳＫ１　約８．４×２．４ｍ以上、深さ約６～２cm の浅い不整形土坑。土坑南半は、調査区外に続いている。調査区南壁の土層断面の検討により、ＳＢ１の柱穴であるＳＰ 38 がＳＫ１の埋土であるⅢ層を切って掘り込まれていることが確認できる。調査時にはⅠ・Ⅲ層をＳＫ１埋土としていたが、再検討の結果、Ⅰ層はＳＫ１の覆土であり、Ⅲ層のみがＳＫ１の埋土であると考えられる。ＳＫ１の検出はⅠ層上面と認識しておこなったことから、土坑底で検出したＳＢ１～３の柱穴ＳＰ 36 ～ 41 については、本来ＳＫ１の埋土であるⅢ層上面にて検出されるピットを見落とした恐れがある。また、ＳＢ１～３が土坑と重なるため、掘立柱建物ＳＢ１～３のいずれかを建てる際の整地の痕跡が、土坑として残った可能性がある。なお、ＳＫ１の埋土であるⅢ層上面より焼土層ＳＸ１が検出された。ＳＫ１の底面であるⅢ層下面で炭層ＳＸ２・７・８が検出されている。中世以降の土師質土器小片および炭が出土。

ＳＫ２　約２．５×０．９５ｍ、深さ約 10cm の浅い不整形土坑。土坑底より、ＳＢ３を構成するＳＰ４３が、検出された。土層断面からＳＰ４３はＳＫ２に先行すると考えられる。また、ＳＫ２南西隅底よりＳＰ８が検出されたが、ＳＫ２と同時期か先行すると考えられる。炭が出土。

ＳＫ３　約１．５ｍ× 0.85 ｍ、深さ約６～４cm の浅い不整形土坑。中世以降の土師質土器小片および炭が出土。

ＳＫ４　約２．１× 0.85 ｍ、深さ約５cm の浅い不整形土坑。切り合いから、西側にあるＳＰ１５に後出すると考えられる。出土遺物なし。

ＳＫ５　約 3.5 × 2.8 ｍ、深さ約４cm の浅い不整形土坑。土坑北半は調査区外に続いているが、後世の水田造成によって失われている。土坑南東部では、切り合いからＳＫ５に後出する SP27・29 が検出されており、ＳＰ２７はＳＢ５を構成するピットと考えられる。同じＳＢ５を構成すると考えられるＳＰ 42 が土坑西半の底から検出されているが、鉄・マンガン分の沈着が著しく土坑上面で検出されるピットを見落とした恐れがある。ＳＢ５がＳＫ５と重なるため、ＳＫ１と同様に掘立柱建物ＳＢ５を建てる際の整地の痕跡が、土坑として残った可能性がある。なお、2000 年度試掘調査区ＴＰ７はＳＫ５の西半の一部を調査していたことが今回の調査で分かった。中世以降の土師質土器小片および炭が出土。



1　灰黄褐色粘質土（10YR5/2）→ SK2 埋土
　　炭を少量含む
　　黄褐色～褐色土粒を多く含む
2　褐灰色粘質土（10YR5/1）→ SP43 埋土
　　炭を少量含む
3　灰色砂質粘土（5Y6/1）→基盤層

第 11図　SK2・SP43（1/40）

（２）焼土・炭に関連した遺構

ＳＸ１　ＳＫ１上面で検出された焼土層で、焼成の強いⅡａ層と焼成の弱いⅡｂ層に分かれる。Ⅱａ・Ⅱｂ層を合わせた規模は約 33 × 14cm 以上、厚さ約５cm で南半は調査区外に続いている。その検出位置から、ＳＢ１あるいはＳＢ２の床面に伴う炉跡等の痕跡である可能性が考えられる。

ＳＸ２　ＳＫ１下面で検出された炭層である。約 22cm × 52cm 以上で南東隅は調査区外に続く。

ＳＸ３　焼土・炭を伴った土坑である。切り合いからＳＸ９およびＳＰ２１に先行する。残存する規模は約 80 × 60cm、深さ 33cm である。北西側の壁面付近で、被熱した焼土層である４・５層が検出された。焼土直上には、木目が残る板状の炭層である３層が薄く検出され、焼土が顕著でなかった遺構南東半の壁面にも３・３’層が検出されている。ＳＸ３の底面からは焼石が検出されている。これらの状況からＳＸ３内において火が焚かれたと考えられる。

ＳＸ４　埋土に炭を多く含んだピットである。約 65 × 55cm 深さ７cm。

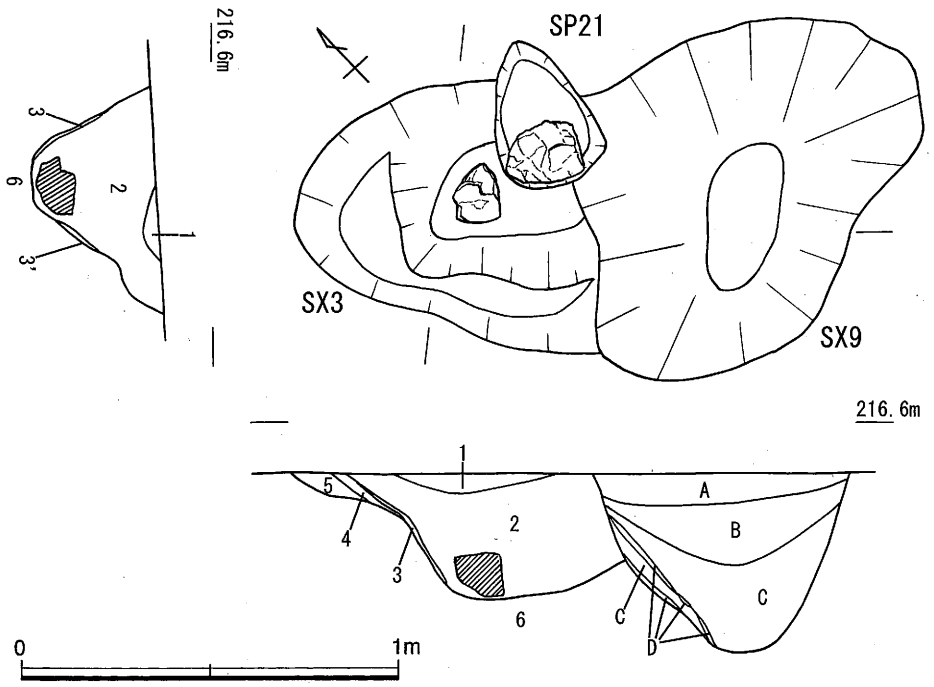
ＳＸ５　埋土に炭を多く含んだピットである。約 40 × 20cm 深さ５cm。

ＳＸ６　埋土に炭を多く含んだピットである。約 30 × 15cm 深さ４cm。

ＳＸ７　ＳＫ１下面で検出された炭層である。約 10 × ８cm。

ＳＸ８　ＳＫ１下面で検出された炭層である。約 16 × ８cm。

ＳＸ９　現地調査時にはＳＰ 44 として発掘。後にＳＸ９に改める。切り合いからＳＸ３より後出し、ＳＰ２１に先行する。残存する規模は約 95 × 80cm、深さ 47cm である。北西側の壁面付近で、木目が残る板状の炭層であるＤ層が２枚重なって検出された。



第 12 図　SX3・SX9・SP21（1/20）

ＳＸ３

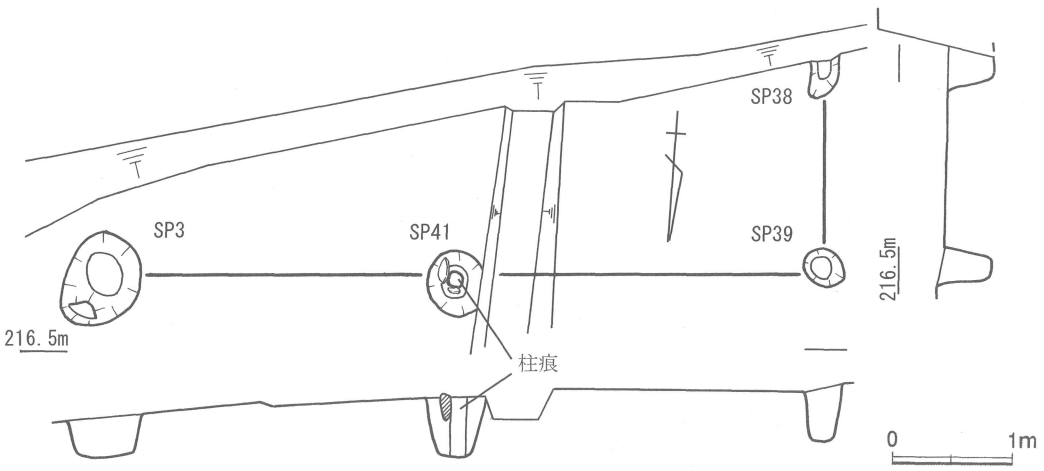
1　灰黄色土（2.5Y6/2）
　下面に鉄・マンガン分沈着
2　灰褐色土（7.5YR4/2）
　炭を少量含む
3　炭
3’炭（焼土を少量含む）
4　赤色土（10R4/6）
　焼土
5　極暗赤褐色土（2.5YR2/2）
　炭を少量含む

ＳＸ９

A　灰黄色土（2.5Y6/2）
　鉄・マンガン分沈着
B　灰黄色土（2.5Y6/2）
C　灰褐色土（7.5YR4/2）
　炭を少量含む
D　炭（板状）

基盤土

6　暗灰黄色土（2.5Y5/2）



第13図　ＳＢ１（1/60）

（３）掘立柱建物跡

推定した建物が重なり合うため、少なくとも２時期以上にわたって建て替えがおこなわれたと考えられる。

ＳＢ１　２×１間（約5.7×1.7ｍ）以上と考えられる。主軸はN83°Ｅである。建物の北西隅と推定され、建物南東側は調査区外に続いているものと推定される。SP41では、掘方埋土より暗い埋土で炭を多く含む径約13cmの円形の柱痕が確認され、柱痕の東側の掘方埋土上部には焼石が埋まっていた。

ＳＢ２　２×１間（約4.3×2.2ｍ）以上と考えられる。主軸はN83°Ｅである。建物の北辺と推定され、建物南側は調査区外に続いているものと推定される。

ＳＢ３　２間の柱穴列（約3.7ｍ）として検出されたが、建物の北辺と推定され、建物南側は調査区外に続いているものと推定される。主軸はN89°Ｅである。ＳＢ３南端のSP43はSK２に先行することが、SK2の埋土から明らかである。なお、SP43には、ほぼ全面が焼けた川原石が１個埋められていた。

ＳＢ４　２間の柱穴列（約4.0ｍ）として検出されたが、建物の北東辺と推定され、建物南西側は調査区外に続いているものと推定される。主軸はN69°Ｗである。北端のＳＰ６はＳＰ７に切られている。

ＳＢ５　やや柱間が不揃いな３間の柱穴列（約3.8ｍ）として検出されたが、建物の南辺と推定され、建物北側は調査区外に続いているものと推定される。主軸はN79°Ｗである。ＳＰ３３はＳＰ３２に切られる。

３．遺物

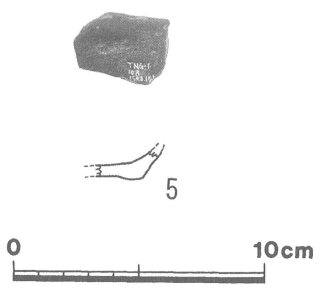
（１）遺構内遺物

遺構内から出土した遺物のうち、図化できたものは１点のみである。５はＳＫ３の１層から出土した中世土師器の底部である。

（２）遺構外遺物

中世の遺物（６～19）と縄文時代の遺物（20～22）が出土している。

６～13は中世土師器で、６～８は口縁端部の残る皿、９は口縁端部の残る坏、10～13は底部の一部と考えられる。14～17は中世雑器類で、14～16は土師質焼成、17は瓦質焼成。14は鍋口縁、15は足鍋の体部で脚部が剥落した跡が残るもの、16は鉢口縁、17

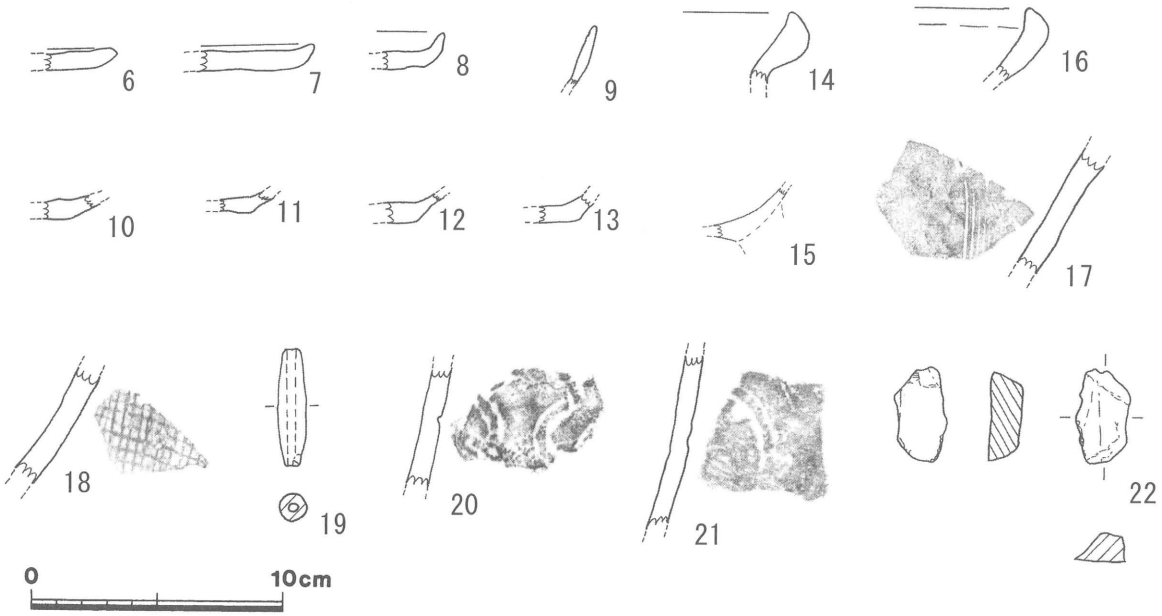


第14図　ＳＫ３出土遺物

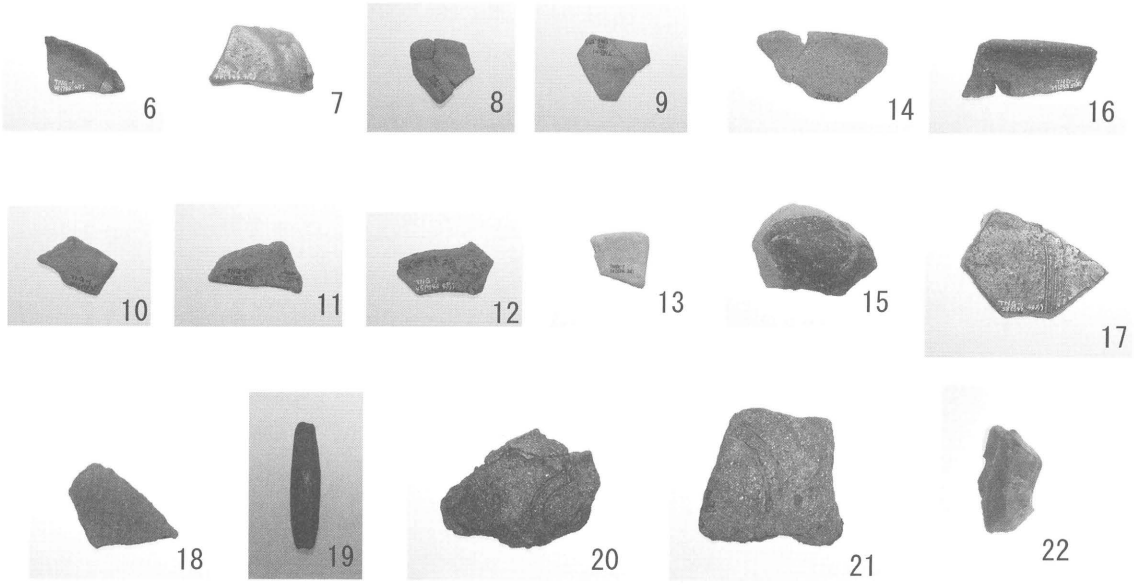
は擂鉢体部と考えられる。18は中世須恵器の体部で、外面には格子目タタキがある。19は土錘で、中世土器に伴うものと推定される。

20・21は縄文時代中期の並木式と考えられる縄文土器である（注1）。胎土に滑石を含んでいることから、外部からの搬入品である可能性が高い。外面には弧状の沈線文が施文されている。22はノッチの見られるチャート製の剥片である。人為的な遺物であるとすれば、縄文土器に伴うものと推定される。

（注1）渡辺聡氏のご教示による。



第15図　殿河内遺跡の遺構外出土遺物



殿河内遺跡の遺構外出土遺物

第３節　寺ヶ台前田遺跡の調査

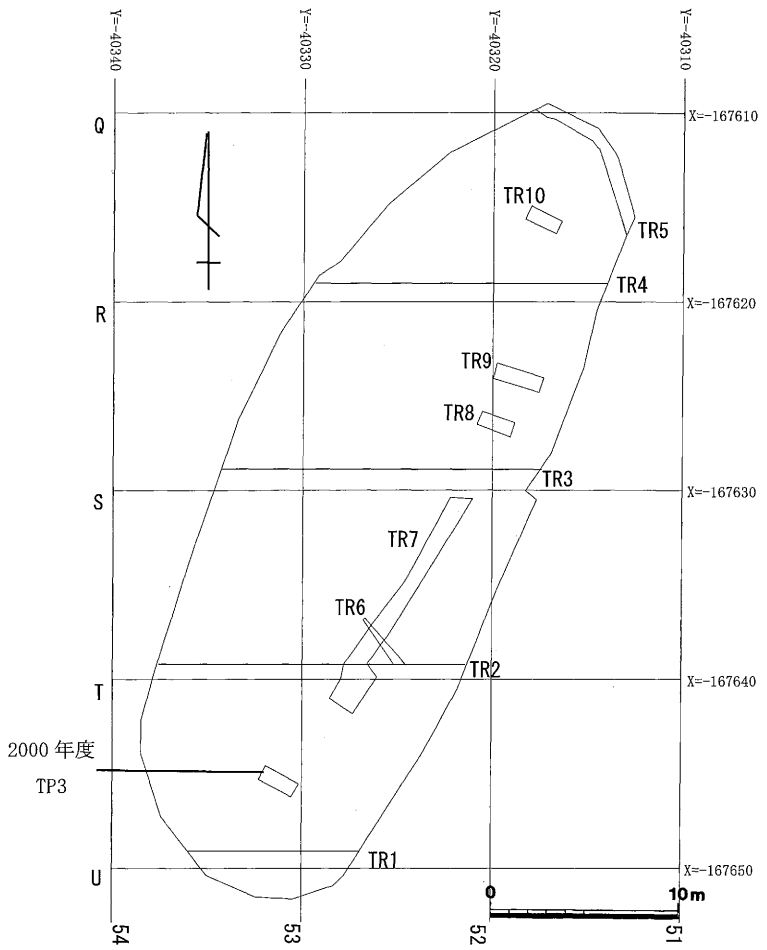
１．概要

前記２遺跡と比較して、中世の遺構・遺物が多く検出された遺跡である。

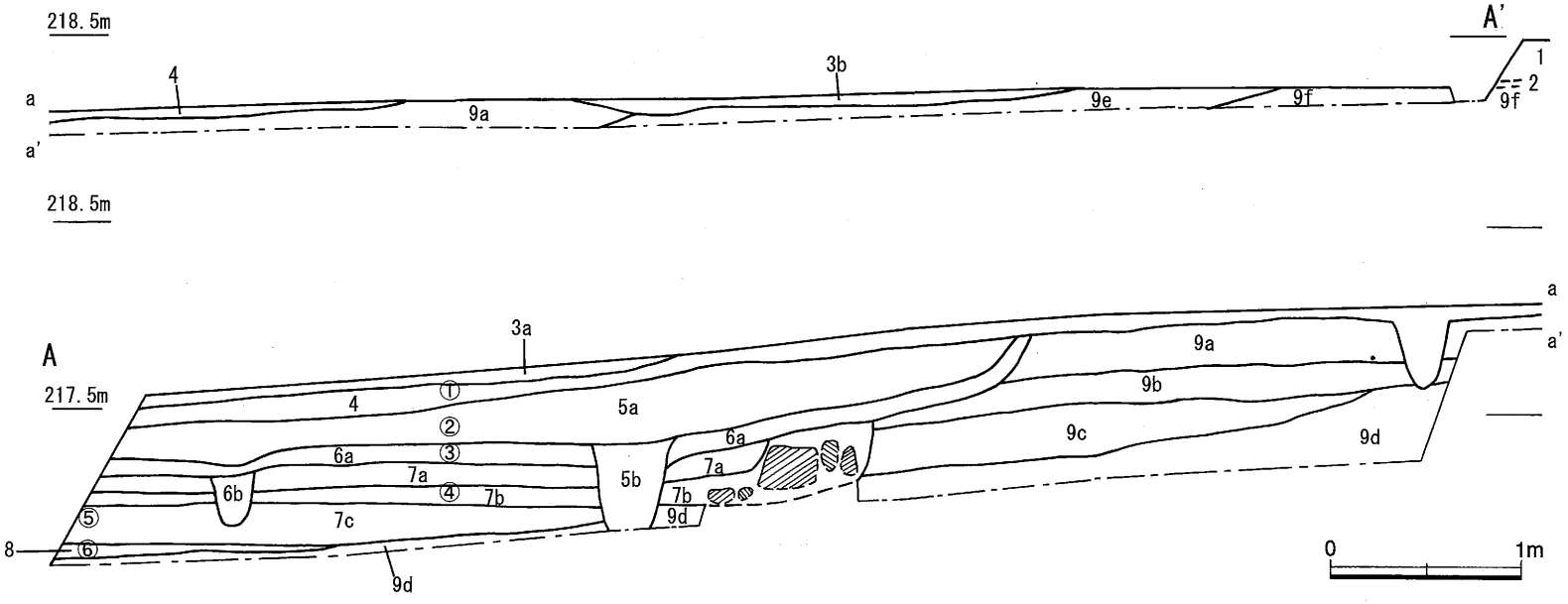
調査期間が限られていることから、ほ場整備で掘削される第１遺構面を主対象に平面発掘調査をおこない、第２・３遺構面については一部トレンチ調査によって確認調査を実施するに留めた。

２．基本層序

先行しておこなった試掘調査の結果から、発掘前の表土・床土、および近世以降の造成であることが確実と考えられる土層は、重機によりあらかじめ除去した後のトレンチ土層断面である。基本層序は、現代の水田耕作土の第１層、現代の水田床土の第２層、近世以降の水田造成土と考えられる第３層、第１黒色帯である第４層、第１～２黒色帯の間層である第５層、第２黒色帯である第６層、第２～３黒色帯の間層である第７層、第３黒色帯である第８層、第３黒色帯より下層である第９層に大別される。このうち、第４層以下が、近世前半期以前の遺物包含層および遺構面であり、第４層下面が第１遺構面、第６層下面が第２遺構面、第８層下面が第３遺構面である。いずれの層も水分を多く含んだ粘性土であり、柱材等の有機質遺物の残存状況が良好であったが、調査は冬季であることも加え難渋した。



第16図　寺ヶ台前田遺跡グリッド・トレンチ配置図（1/400）



1　耕作土
2　床土
3a 褐灰色土（10YR 4/1）
3b 緑灰色粘土（10GY 6/1）
4　黒褐色土（10YR 3/1）
　炭を少量含む
5a にぶい黄褐色土（10YR 5/3）
5b 灰黄色粘土（2.5Y 6/1）
6a 暗灰色粘質土（N 3/0）
　炭を少量含む
6b 褐灰色粘質土（10YR 5/1）
7a にぶい黄褐色粘質土（10YR 5/3）
　炭を少量含む
7b 褐灰色粘質土（10YR 5/1）
7c 灰黄褐色粘質土（10YR 5/2）
　黄褐色粒子を多く含む
8　黒褐色粘質土（7.5YR 3/2）
9a にぶい黄褐色土（10YR 4/3）
　炭を少量含む
9b 灰黄褐色土（10YR 4/2）
9c 褐灰色砂質土（10YR 5/1）
　炭をわずかに含む
9d 青灰色粘土（10BG 5/1）
9e 黒褐色砂礫（5YR 3/1）
9f にぶい褐色砂質土（7.5YR 5/3）

①～⑥は自然科学分析用試料No.１～６の採取層位を示す。
（ただし、⑤⑥については図示した位置より約１m北東側の調査区法面より採取）

第17図　寺ヶ台前田遺跡トレンチ４南壁土層断面図（1/40）

第 18 図　寺ヶ台前田遺跡遺構配置図（1/120）

３．遺構

寺ヶ台前田遺跡では、SK11 ～ 52、SD1 ～ 9、SX11 ～ 38、SB11 ～ 19、SP101 ～ 750（いずれも途中欠番あり）を確認した。紙面の関係から、一部の特徴的な遺構についてのみの図示説明となったことをお断りしておく。

（１）土坑

ＳＫ17　Ｑ51Ｇで検出。長軸約3.3ｍ、短軸1.3ｍ以上。土坑の東半は、後世の水田造成によって掘削されたと見られる段があるため、不明である。ＳＫ17のほぼ中央を直交して、ＳＤ１が切られている。底面の一部で、弱い焼土および炭を検出した。

ＳＫ19　Ｒ51Ｇ（ＴＲ３の東端）の調査区法面において検出。土坑東側は後世の水田造成によって失われており、西半のみが遺存していた。残存する規模は約1.7ｍ×1.3ｍで、深さは約70cmであった。埋土は４層に分けられ、下半のＣ・Ｄ層には大量の石が埋まっていた。その石の大半は焼石であるという特徴を持つ。出土遺物は、小片のため図示はしていないが、焼けた壁土状の土製品９片が焼石検出までのところで出土している。

ＳＫ38　Ｓ52Ｇで検出。長軸約0.8ｍ、短軸約0.65ｍ。埋土より、瓦質土器鍋口縁部(23)が出土。

ＳＫ42　Ｔ52・53Ｇで検出。長軸約1.3ｍ、短軸約0.6ｍ。埋土より、土師器坏かと見られる底部（24）が出土。

ＳＫ47　Ｔ52Ｇで検出。長軸約1.6ｍ、短軸1.2ｍ以上、石の上面より底面までの深さ約17cm。北辺の状況は、トレンチ２の先行発掘により不明となったが、トレンチ内で終わっていたと推定される。土坑北西半からは、約５～35cmの自然石が検出された。石のうち一部には、被熱痕が見られた。石の上下の埋土からは、青磁盤の小片（25）、白磁の口縁部小片（26）が出土している。

ＳＫ48　Ｓ52Ｇで検出し、一部がＳ53Ｇにかかる。長軸約4.4ｍ、短軸約1.4ｍ。中央をＳＫ35が切っており、長い土坑が西半と東半に分断されていると理解した。埋土より、萩焼の陶器皿(27・28)、白磁口縁部（29）、土師器皿（30・31）、砥石（32)が出土。

ＳＫ51　Ｓ53Ｇで検出。長軸約1.3ｍ、短軸約1.2ｍ。主な切り合いは、ＳＫ50を切り、ＳＫ52・ＳＸ35に切られていると判断した。埋土より、瓦質土器足鍋の脚部（33）が出土。

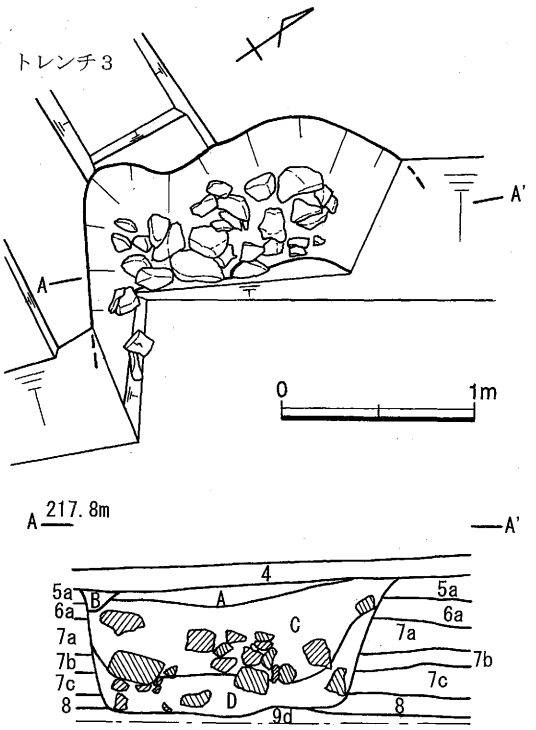
ＳＫ52　Ｓ52・53Ｇで検出。長軸約1.3ｍ、短軸約0.6ｍ。ＳＫ51を切っていると判断した。埋土より、土師器口縁部（34）が出土。

（２）溝

ＳＤ１　Ｑ51Ｇで検出。長さ4.4ｍ以上、幅約0.4ｍ。検出時の遺構切り合いでは、ＳＤ１はＳＫ17に切られていると判断した。ＳＫ17の東側断面ＡＡ’ラインにおいても、ＳＤ１の断面が確認できなかったことも、切り合いを判断する材料とした。ＳＤ１は途中で、北東方向に分岐しており、分岐した溝は両側に浅い段を持ち、やや幅広となる。

ＳＤ２　Ｑ51･52Ｇで検出。長さ6.0ｍ以上、最大幅約1.8ｍ。埋土より、土師器皿底部小片(35)、土錘（36）が出土。

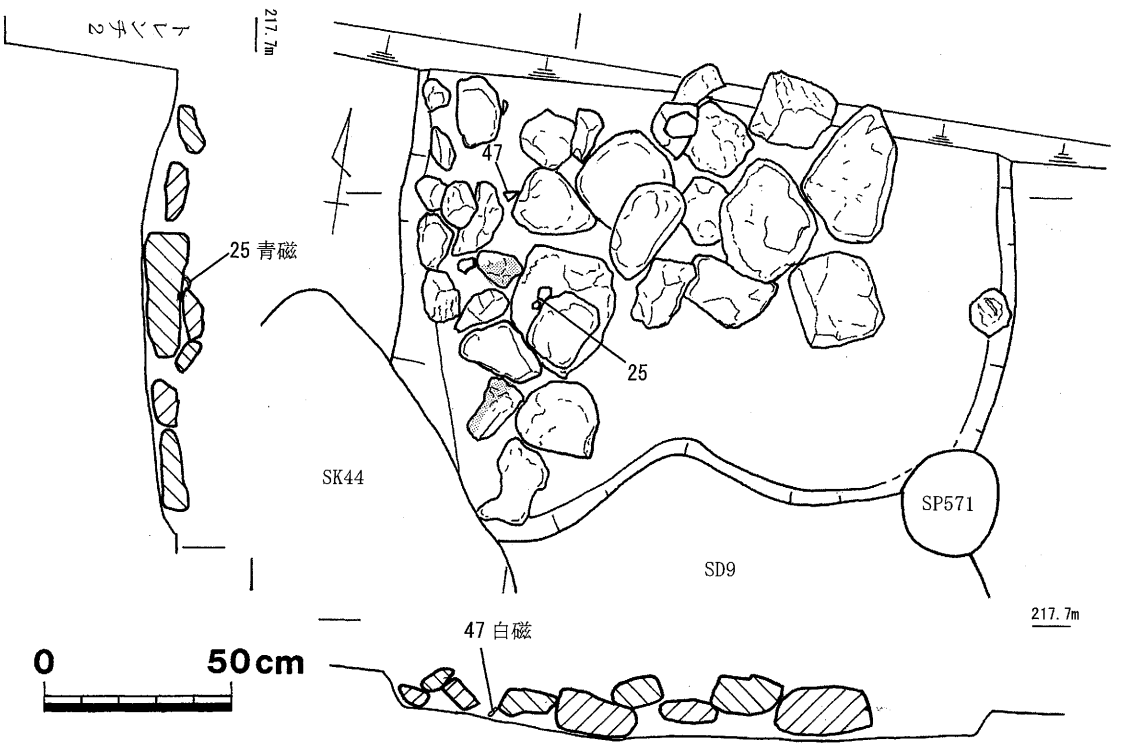
ＳＤ３　調査区北部のＱ・Ｒグリッド境で検出された溝で、長さ約９ｍ、最大幅約１．８ｍ、深さは上流側で約０．１ｍと浅く、下流側で約０．８ｍと深くなる。トレンチ４がＳＤ３を横断しており、トレンチ調査時には土坑（ＳＫ13）として調査した。トレンチ４の東端土層断面は、このＳＤ３の土層断面を一部を図化している。調査区法面で溝の横断面を検討したところ、埋土は



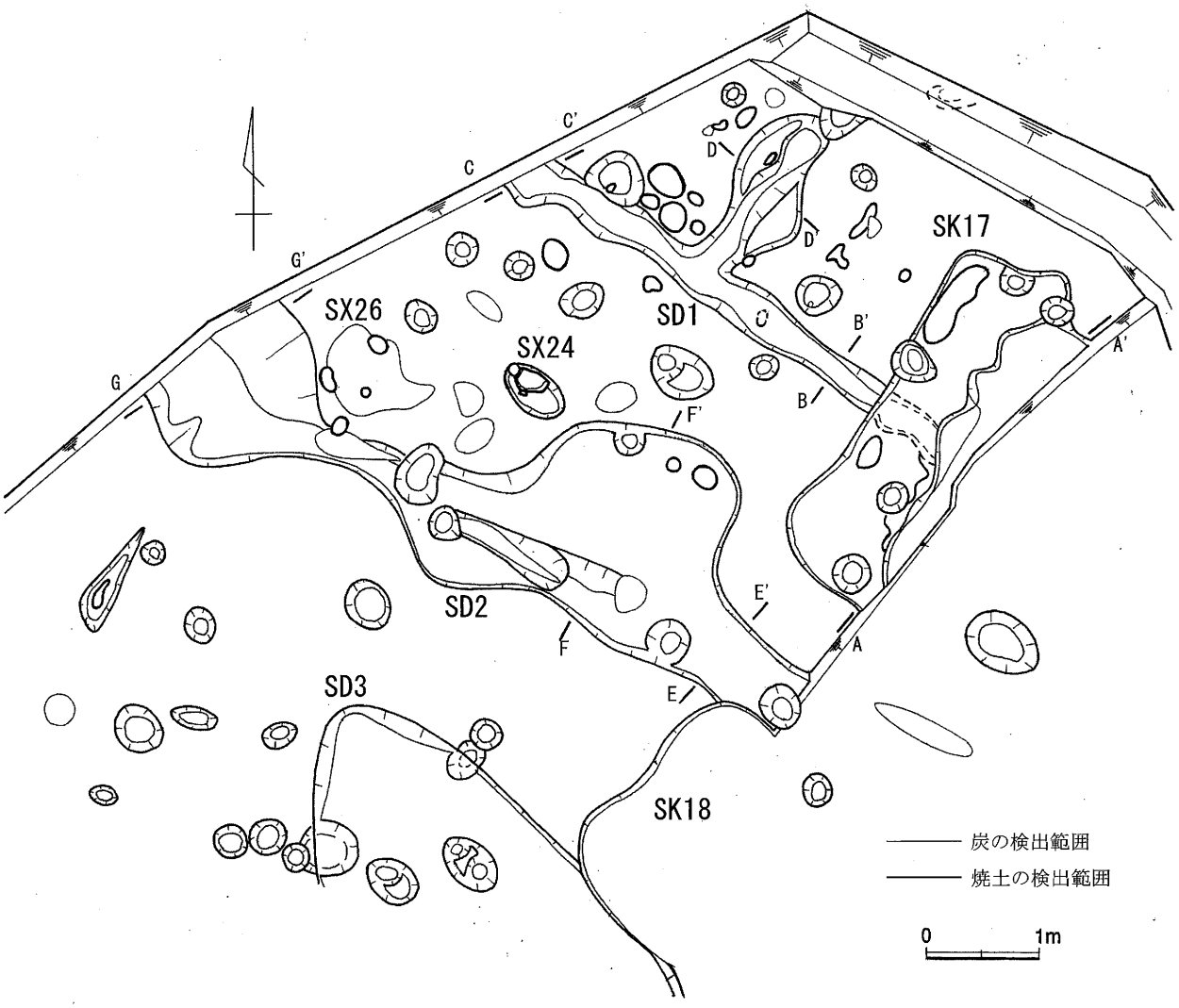
A 褐灰色土 (10YR 4/1)
4層よりやや暗い。炭を少し含む。
B 黄灰色土 (2.5Y 4/2)
C 灰赤色土 (2.5YR 4/2)
焼土を多く含む。炭を少し含む。
D 褐灰色土 (10YR 4/1)
炭を多く含む。

4～9d　トレンチ4の土色番号に対応

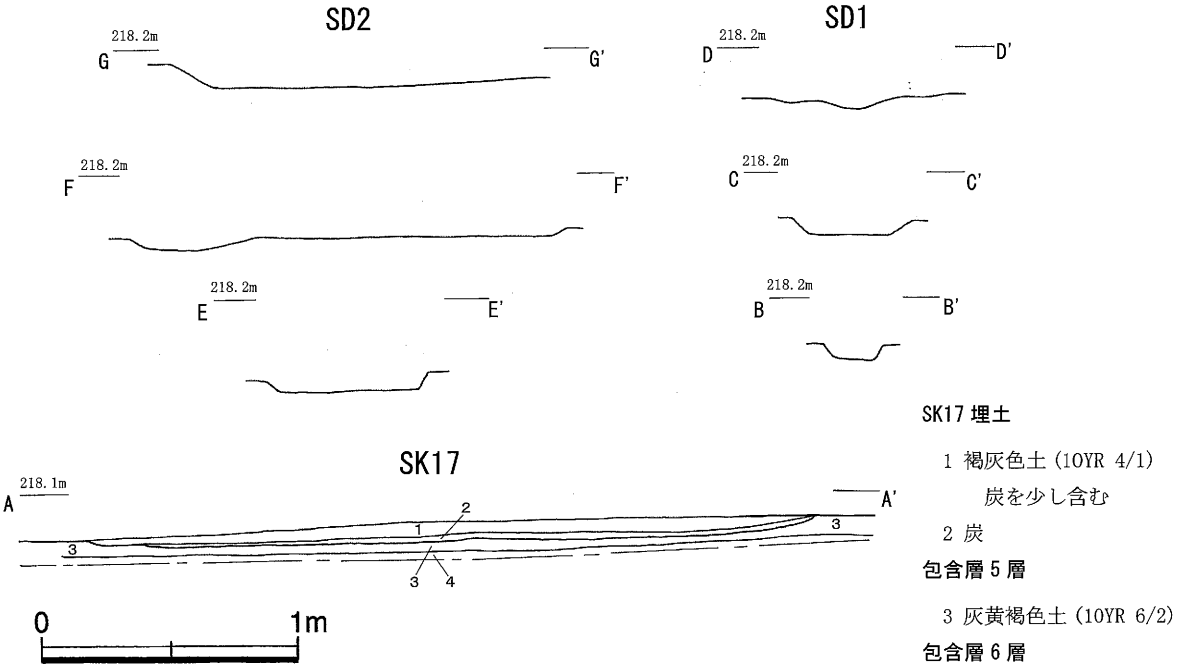
第19図　ＳＫ19 (1/40)



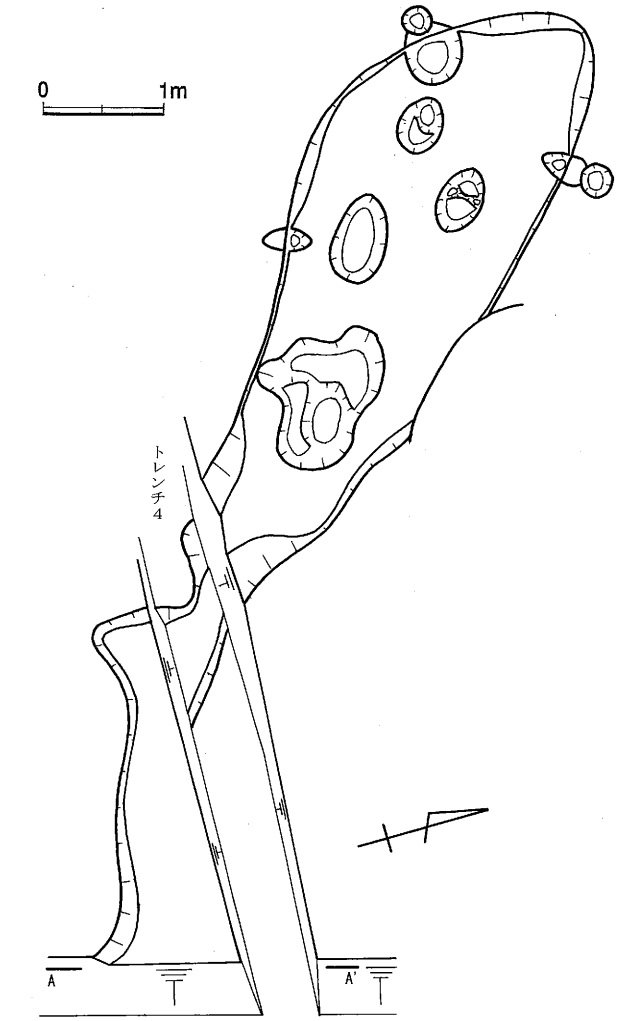
第20図　ＳＫ47 (1/20)



第21図　ＳＤ１・２、ＳＫ17周辺平面図（1/60）



第22図　ＳＤ１・２、ＳＫ17断面図（1/30）



第23図　ＳＤ３（1/60）

４層に分けられ、６ａ層から３ａ層まで長期にわたって次第に埋まっていった様子が確認できた。埋土中からは、15Ｃ代を中心とする遺物が多く出土しており、この頃に埋まっていったことが推定される。埋土より、青磁碗（37）、焼締陶器（38）、土師器皿底部小片（39）、中世雑器土器小片（40・41）が出土。

ＳＤ４（欠番）

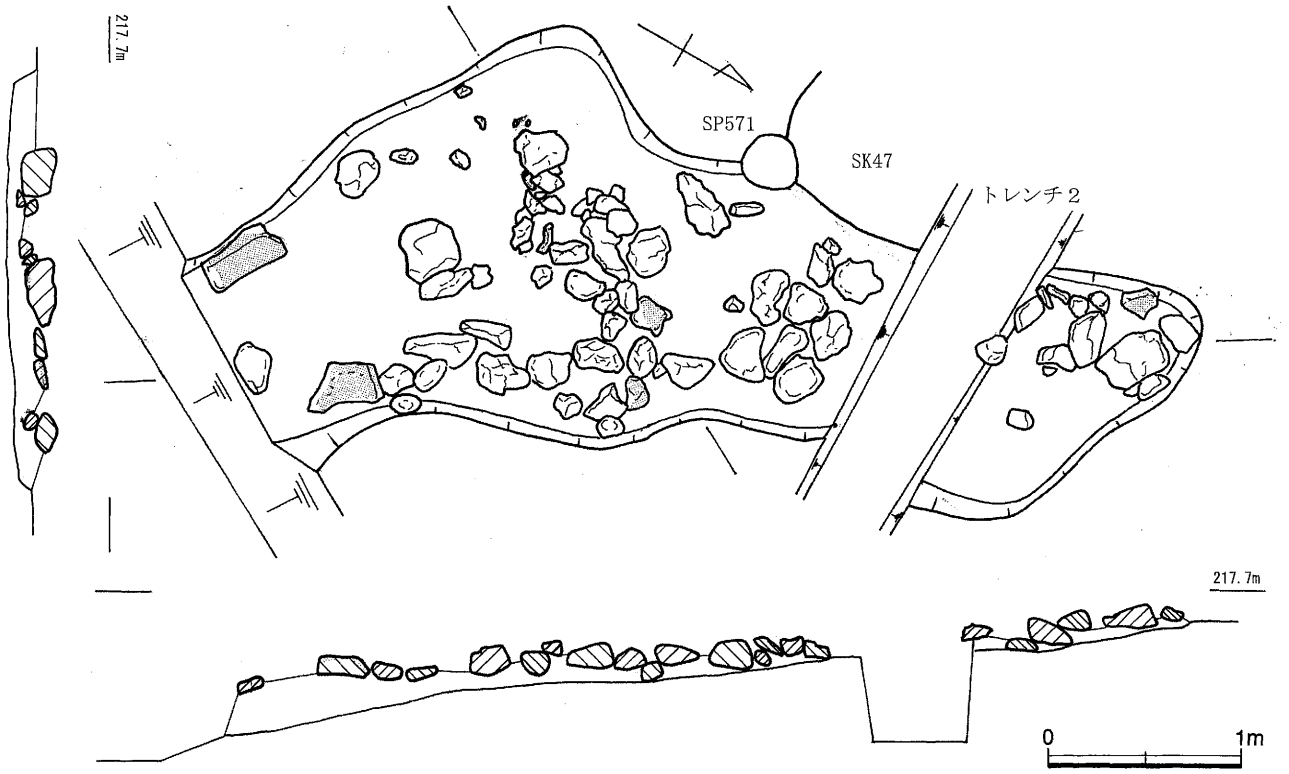
ＳＤ５　Ｒ52Ｇで検出。長さ約2.5ｍ、幅20cm。

ＳＤ６　Ｒ52Ｇで検出。長さ3.3ｍ、幅15cm

ＳＤ７　Ｒ52Ｇで検出。長さ3.1ｍ、幅50cm

ＳＤ８（欠番）

ＳＤ９　Ｓ52・Ｔ52Ｇで検出。長さ5.3ｍ以上、最大幅約2.2ｍ。溝の埋土中には、集石が含まれている。集石は、一部列状となっているようにも見られるが、石上面のレベルが水平ではなく、ゆるやかに傾斜して続いていることから、建物跡に直接伴う石ではないと考えられる。



第24図　ＳＤ９（1/40）

（３）炭・焼土関連遺構

調査区北端を中心に炭・焼土の広がりが確認された。焼土の大半は、強い焼けしまりではなく、比較的弱い被熱状態であった。調査時に水洗選別用のサンプル土壌を採取していないため、鍛冶遺構であるかどうかの断定は出来ないものの、ＳＸ24は形状から金床石であった可能性が高いと推定される。以下、特徴的な遺構の概要である。

ＳＸ24　Ｑ51Ｇで検出した。長軸約59cm、短軸約29cm、深さ約8cmの土坑である。土坑の北半には、上面がほぼ平らでわずかに皿状に湾曲し、強く被熱した金床石状の石が据えられている。石の被熱面は、南東端を除く上面のほぼ全面と、北西辺、南西辺である。石に接した土坑北西端の上部には、焼土層が存在していた。

ＳＸ26　Ｑ51Ｇで検出した。長軸約80cm、短軸約60cmの範囲で、炭の広がりと部分的な焼土層が確認された。

ＳＸ38

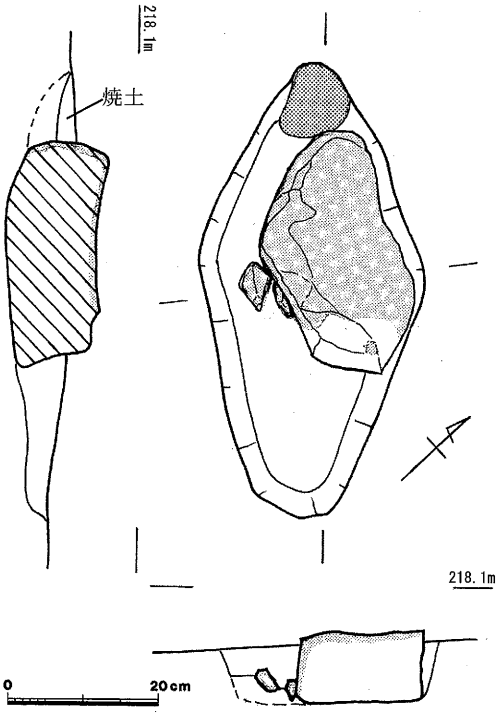
Ｓ53Ｇで検出した。当初はSP404として検出した遺構である。調査の過程で埋土に炭を多く含み、ピット下半で土師質土器の集積が確認されたことから、調査後にＳＸ38に改めた。規模は34×28cm、深さは8cmである。遺構の南東半の底面に土師質土器が5枚重なって出土した。上から43、44～45、46、47が出土しているが、現地調査時には4枚のみ（取り上げNo.A・B・C・D）と認識して取り上げたため、44と45を一括して取り上げてしまっている。出土状況は43～46が底面を上にして裏返した状況で、47のみが底面を下にして正位置で出土している。

（4）段状遺構

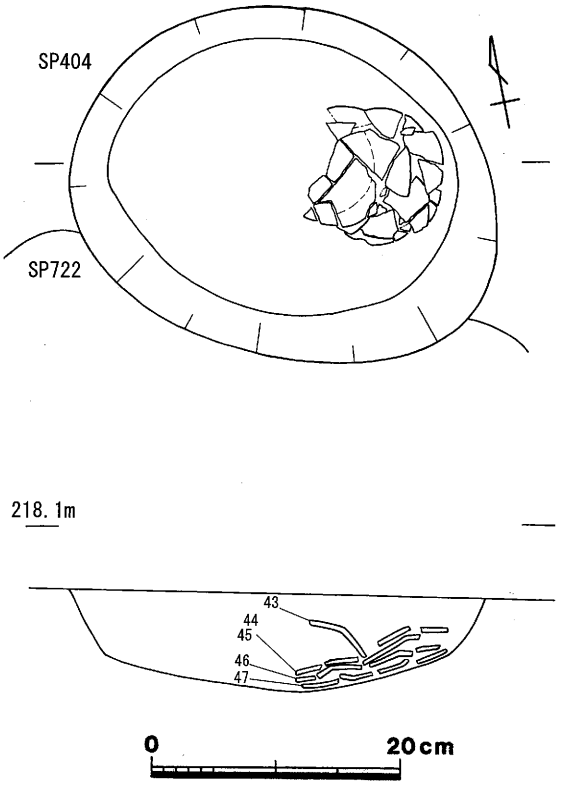
トレンチ２～４の土層断面において、７層の下に段状遺構の存在が確認されていたことから、これらの段状遺構が連続する一連の遺構であるかどうか確認するため、トレンチ７を設定した。また、トレンチ３～５の間においても、この段状遺構が続くかどうか確認するため、トレンチ８～10を設定してトレンチ調査をした。これらのトレンチ調査は、既に４層下面の遺構面の調査が終了しており、ほ場整備による掘削はない予定のレベルであったが、当遺跡の変遷過程を知る重要な遺構であると考えられたため実施したものである。

調査の結果、トレンチ７においては連続して段状遺構が検出され、トレンチ８においても段状遺構を示す土層が確認された。トレンチ９･10については、段状遺構がトレンチ内に入っているかどうか断定できなかった。

トレンチ７・８においては、段状遺構の下側（南東側）に集石列が確認されたことから、段状遺構を埋めて盛土造成する際に石を埋め込んだか、あるいは段状遺構にあった石積が埋められる際に破壊された跡である可能性もある。今回調査をおこなった第１遺構面のうち南東辺の下層には、段状遺構を伴ったさらに古い中世遺構面が埋蔵されているものと推定される。

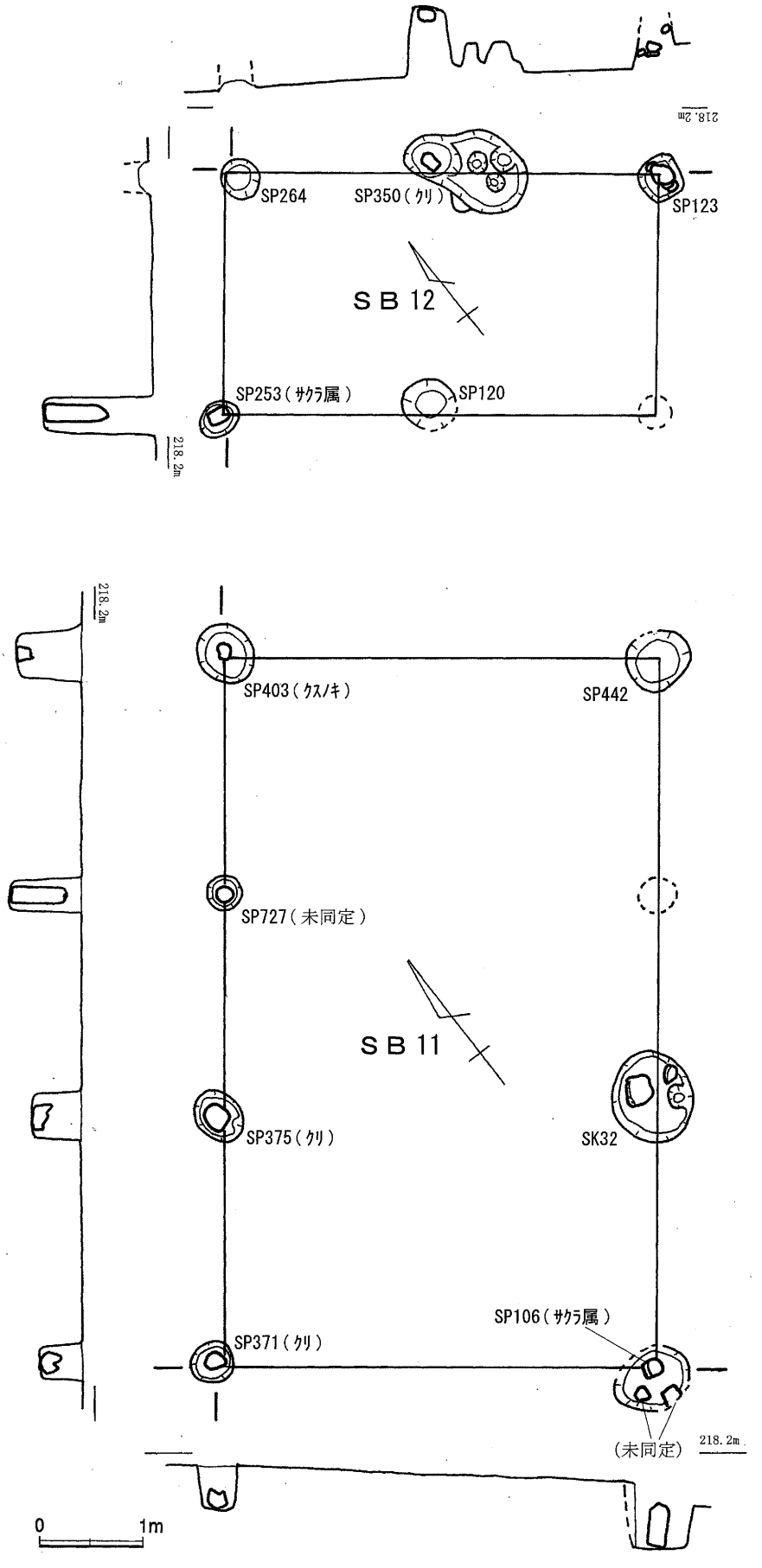


第25図　ＳＸ24（1/10）

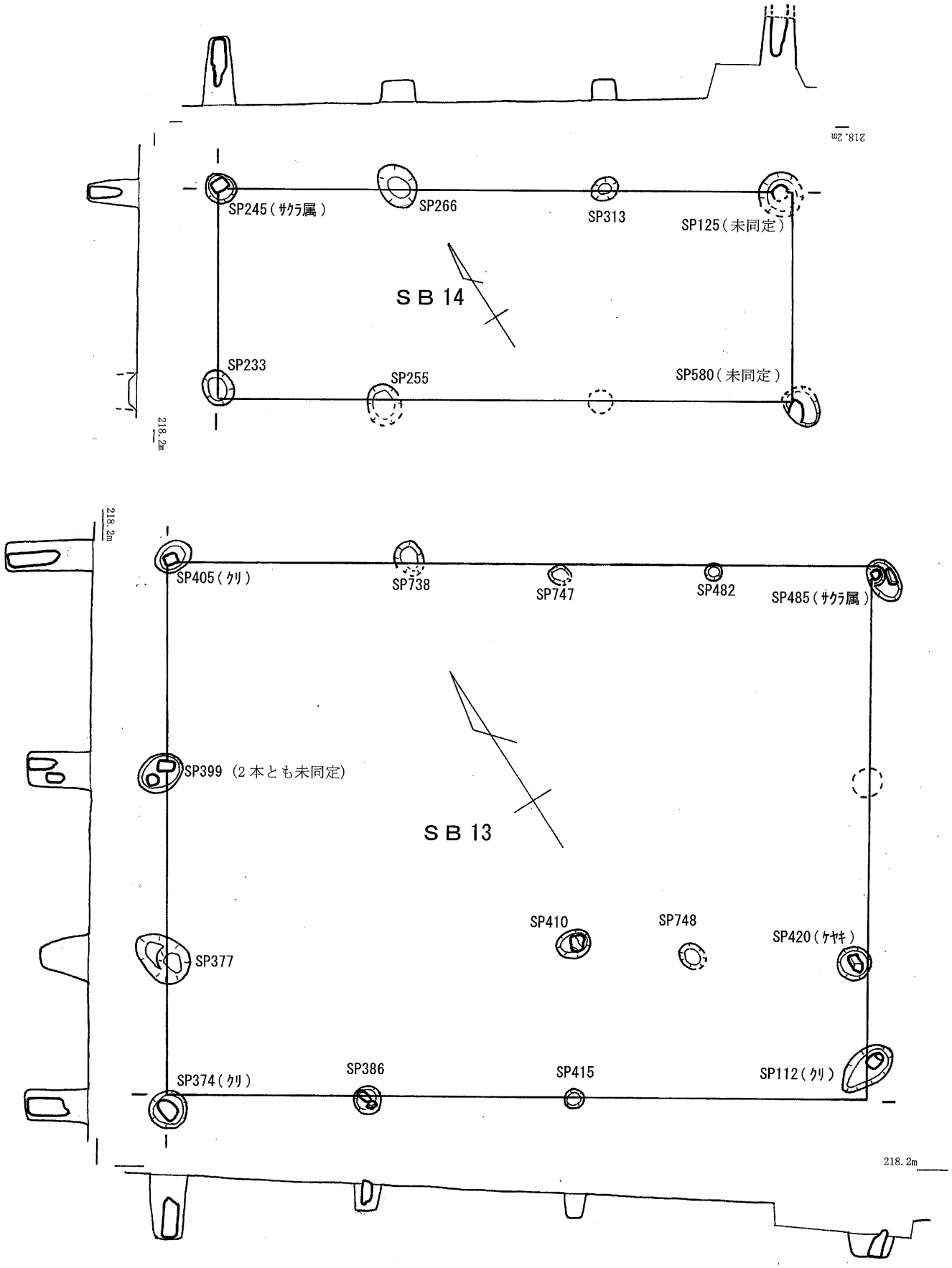


第26図　ＳＸ３８（1/6）

（数字は遺物番号）



第27図　SB 11・12（1/60）



第28図　ＳＢ 13・14（1/60）

（５）掘立柱建物跡

少なくとも３時期以上の建物跡が重複しているが、主軸からSB11と12、SB13と14がそれぞれ同時併存していたと推定される。なお、下記に推定した掘立柱建物跡を構成する柱穴から出土した柱根を主として、樹種同定をおこなっている。同定結果は、附編２のとおりである。

ＳＢ11　３間（6.6ｍ）×１間（4.1ｍ）の掘立柱建物を推定した。

ＳＢ12　２間（4.0ｍ）×１間（2.3ｍ）の掘立柱建物を推定した。

ＳＢ13　３間（7.8ｍ）×３間（5.9ｍ）の掘立柱建物を推定した。

ＳＢ14　３間（6.4ｍ）×１間（2.2ｍ）の掘立柱建物を推定した。

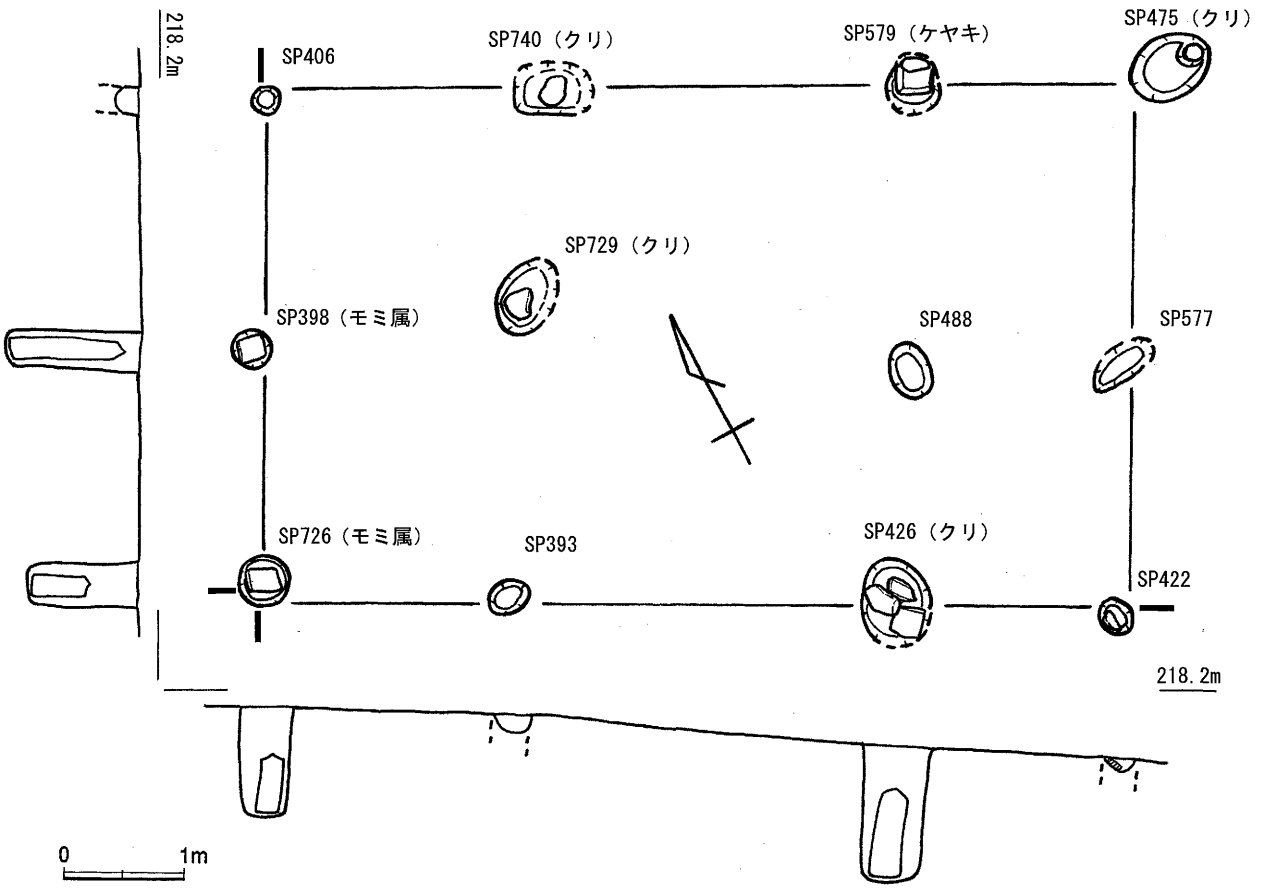
ＳＢ15　３間（6.9ｍ）×２間（4.2ｍ）の掘立柱建物を推定した。このうち、およそ半数のピット内に柱根が残されていた。SP398・726のみ針葉樹材であるモミ属の木が用いられており、他の柱穴の柱材が広葉樹材を多用している状況と比べて、明らかに特殊な状況である。SP398・726ともに隣接しており、この柱間が約１間となる1.9ｍであることから、この２柱穴が一連の建物を構成していたことはほぼ確実と考えられる。。

ＳＢ16　２間（4.2ｍ）以上×２間（3.0ｍ）の掘立柱建物を推定した。

ＳＢ17　２間（6.3ｍ）×２間（6.0ｍ）の掘立柱建物を推定した。

ＳＢ18　２間（4.8ｍ）以上×２間（4.0ｍ）以上の掘立柱建物を推定した。

ＳＢ19　３間(7.0ｍ)以上の柱穴列で構成される掘立柱建物を推定した。ただし、この建物跡のみ、他の建物跡と主軸が大きく異なっているため、復元に問題がある可能性もある。



第29図　SB15(1/60)

（6）柱穴・ピット

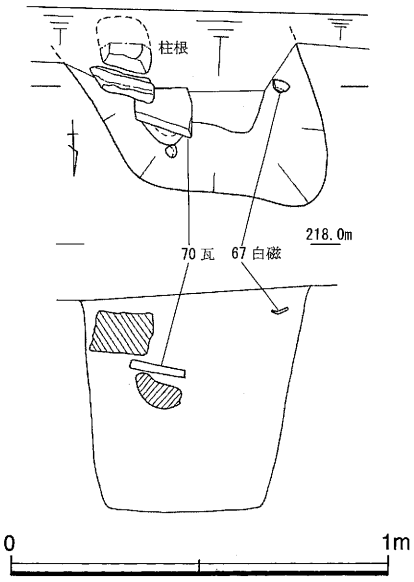
遺跡内からは、数百の柱穴・ピットが検出されたが、特記すべきは柱根の出土が多いことである。これは、遺跡の土質が水分を多く含んだ粘性土であることが、良好な保存に結びついた要因であったと考えられる。柱根の発見状況は、遺構面直上を発掘時または遺構面検出時に、地面にぽっかりと穴が空き、穴の下から柱根の上部が見えて発見されるということが多かった。このことから、柱材が建物建て替え時に当時の生活面（発掘の遺構面）で切られ、後に水田造成により埋められ、年月を経て乾湿を繰り返した柱の上部のみが腐朽し、周囲の土が粘性土であるために埋まることがなく空洞化したものと推定される。また、柱根は柱の上部が南東側（下側）に傾いた状況で発見されることが多かった。このことも遺跡の土質が粘性土であるため、当時生活をする段階において次第に建物が南東側（下側）に傾き、後に建物が廃絶された（柱が切断された）状況を示すと推定される。

以下は、一部の特徴的なピットである。

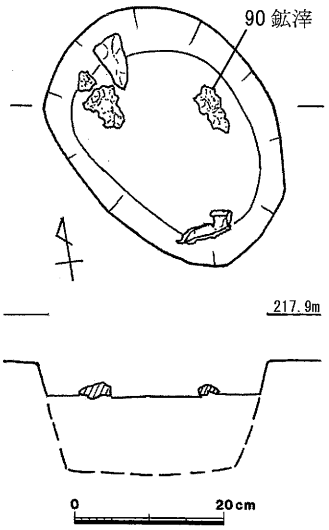
ＳＰ 116　柱穴の南東部からは柱根が検出され、掘方埋土中から無釉灰色の平瓦（70）と、白磁（67）等が出土した。

ＳＰ 468　埋土中から鉱滓が出土した。このピット中からの鉱滓の出土は、他のピットと比較して多い。

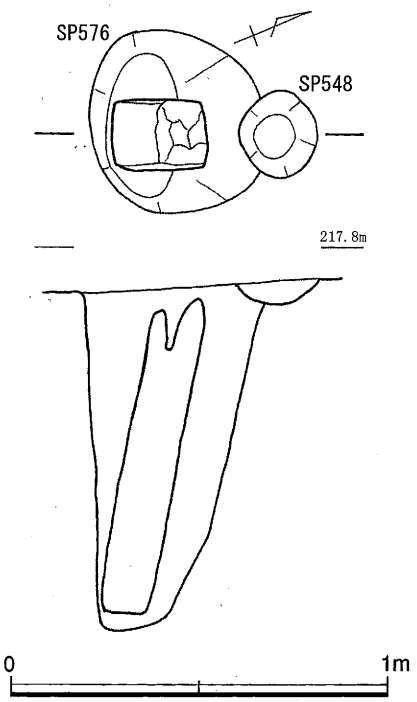
ＳＰ 576　柱根が良好に保存されていた柱穴の一つである。図面のとおり、柱根は柱穴内で大きく斜めに傾いた状態で検出された。



第 30 図　SP116（1/20）



第 31 図　SP468(1/10)



第 32 図　SP576（1/20）

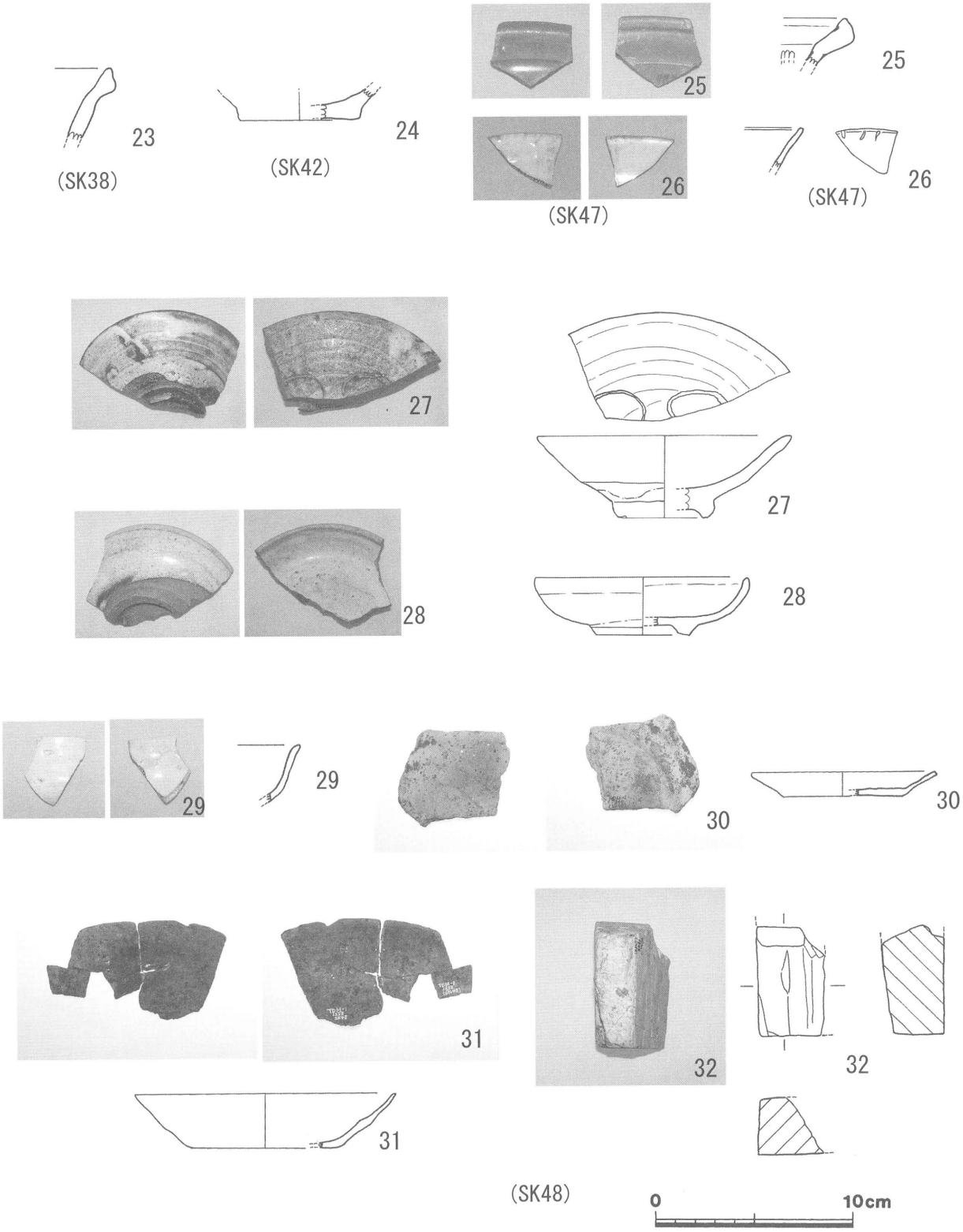
４．遺物

（１）遺構内遺物

ＳＫ出土遺物

SK38　23 は瓦質土器の鍋口縁部であり、端部がやや肥厚する。

SK42　24 は中世の土師質土器底部で、やや厚く擬似高台風に外面に段を有することから、中世前



第 33図　ＳＫ出土遺物（1/3）

半期のものと考えられる。

SK47　25は青磁の盤口縁部で15C代頃かと考えられる。26は白磁で、口唇部は釉薬が剥げており、外面端部には凹凸が見られる。このほかに近世陶磁器も出土している。

SK48　27・28は萩焼の皿。27の内面見込には2枚貝状の目跡が残る。29は白磁で15C代頃かと考えられる。30・31は土師質土器皿。いずれもロクロ成形の薄手のつくりであり、砂粒を多く含み胎土不良。30の底部外面には板目状の圧痕が残る。32は砥石で、石材は流紋岩。端部を含め4面が残る。

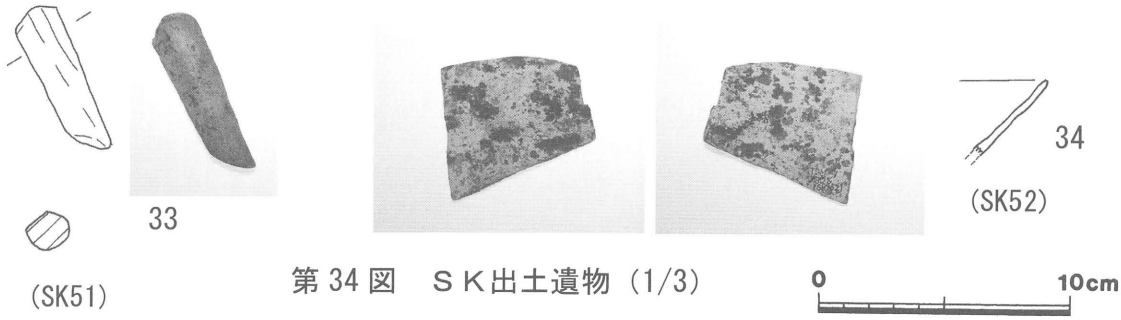
SK51　33はいわゆる足鍋の脚部で、端部が獣足状にやや曲がる。土師質焼成。

SK52　34は土師質土器皿の口縁部。ロクロ成形の薄手のつくりであり、砂粒を多く含み胎土不良。

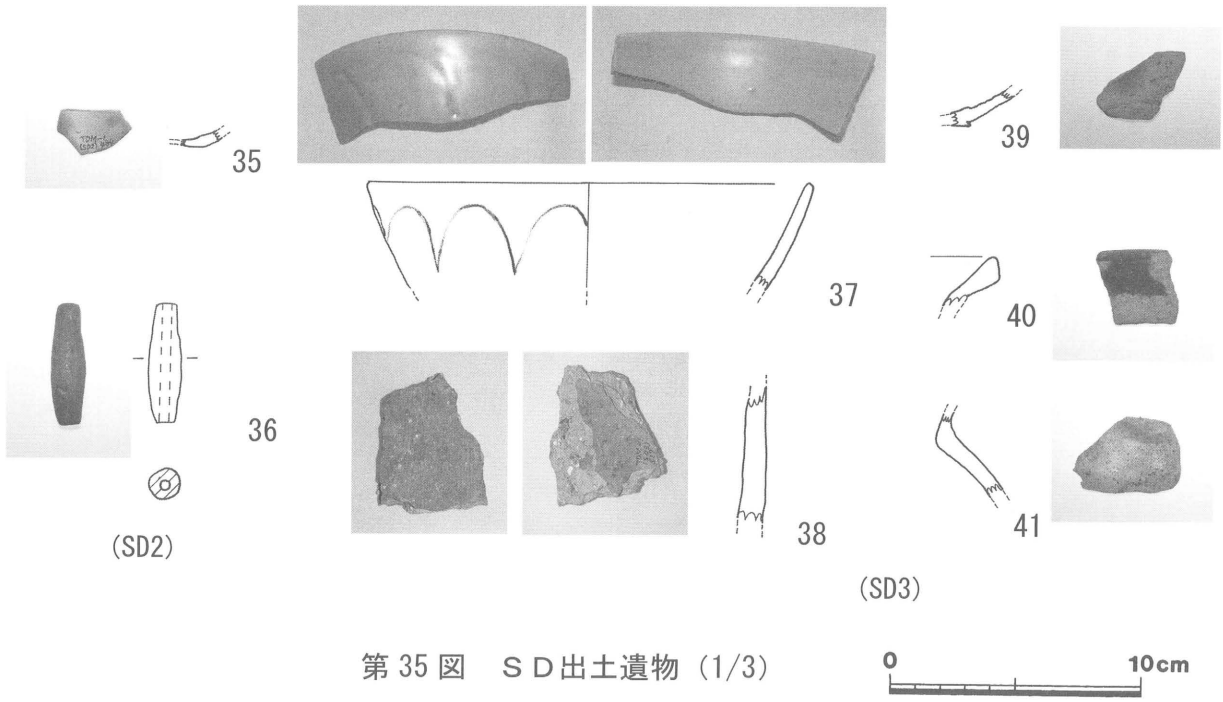
ＳＤ出土遺物

SD2　35は土師質土器皿の底部小片。ロクロ成形の薄手のつくりであり、砂粒をあまり含まず胎土は良好。中世後半期以降と考えられる。36は土錘。

SD3　37は龍泉窯系の青磁碗Ｂ２類。外面に片切りの大きな蓮弁文がある。38は焼締陶器の体部で、外面は暗赤褐色でハケ目があり、内面は明赤褐色でナデ調整である。中世の在地系製品と考えられる。39は土師質土器皿の底部小片。ロクロ成形の薄手のつくりであり、砂粒をあまり含ま



第34図　ＳＫ出土遺物（1/3）



第35図　ＳＤ出土遺物（1/3）

ず胎土は良好。外面はわずかに擬似高台風に段を有しており、段部は沈線が入る。40 は鍋の口縁で、端部はやや肥厚する。表面は黒く燻し焼きされているが、焼成は弱く土師質である。41 は肩部または頸部と見られる中世雑器の破片である。内外面ともナデ調整で、土師質焼成。

ＳＸ出土遺物

SX27　42 は土師質土器皿の破片。ロクロ成形の薄手のつくりであり、砂粒をほとんど含まず胎土・焼成とも精良。

SX38　43 ～ 47 は土師質土器皿。いすれもロクロ成形のやや薄手のつくりであり、砂粒をあまり含まず胎土・焼成とも普通。いずれにも底部外面には、板目状の圧痕が残る。色調は、43 のみがにぶい浅黄褐色を呈しているが、44 ～ 47 は明赤褐色を呈する。

ＳＢ出土遺物

ピットに残されていた柱根の大部分は広葉樹材であるが、一部に針葉樹材のものが含まれる。柱根は断面円形のものと、方形のものの 2 種がある。

SB11

残存していた柱材を見ると、断面円柱形の柱で構成されていた建物であったと考えられる。

SP106　48 は円柱形の柱材である。

SP371　49 は円柱形の柱材で、底部付近のみが残っていた。

SP375　50 は円柱形の柱材で、底部付近のみが残っていた。

SP403　51 は円柱形の柱材で、底部付近のみが残っていた。

SB12

残存していた柱材を見ると、断面角柱形の柱で構成されていた建物であったと考えられる。

SP253　52 は角柱形の柱材である。

SP350　53 は角柱形の柱材の底部付近のみが遺存していたと考えられる。

SB13

SP374　54 は円柱形の柱材の底部である。

SP485　55 は瓦質土器の鉢口縁部である。口縁端部が内側にやや肥厚する。

SB14

SP245　56 は断面角柱形の柱である。

SP580　57 は断面円柱形の柱である。

SB15

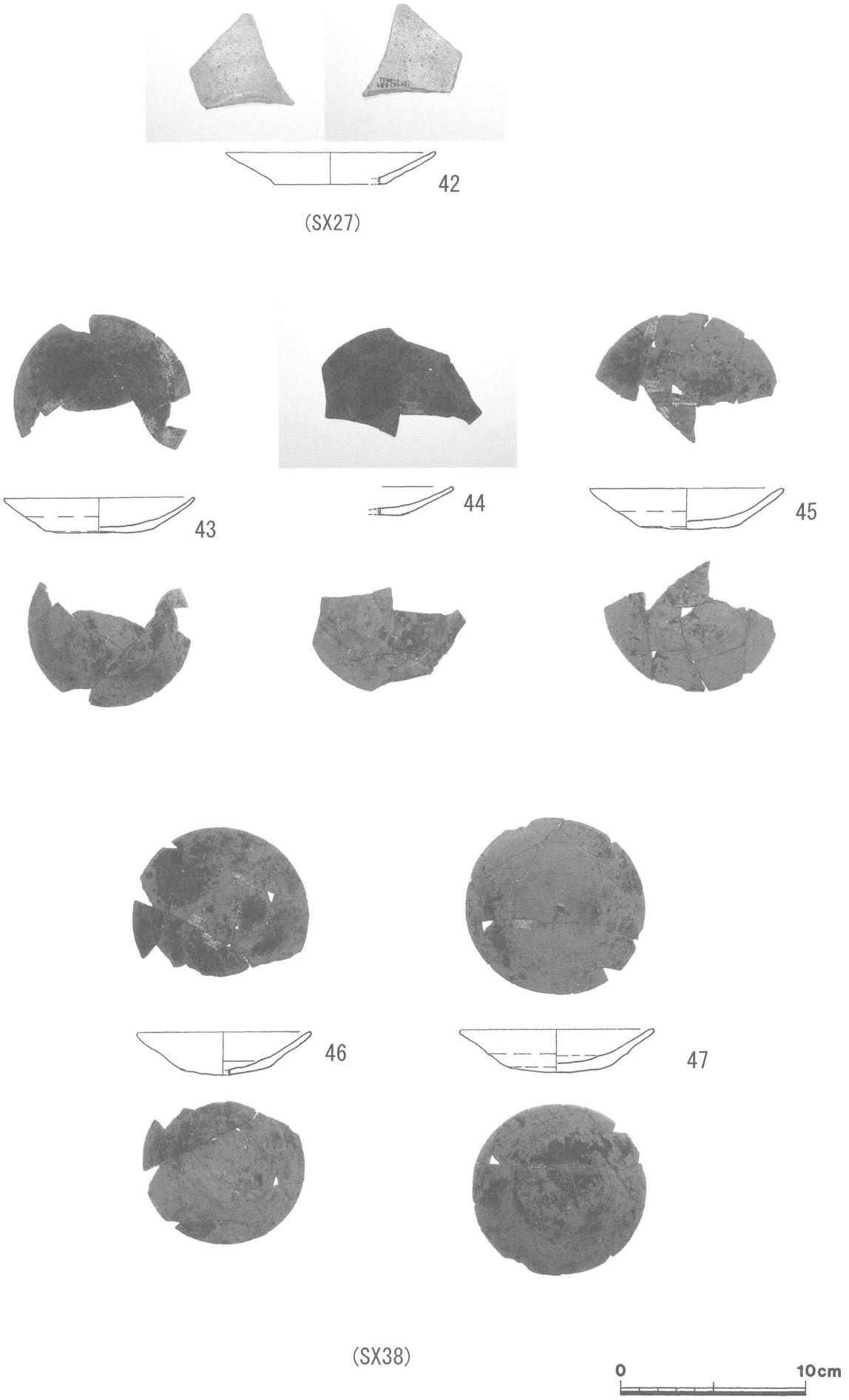
SP398　58 は柱材で、断面形は角柱である。表面にはハツリ跡が顕著に残り、保存状況が良好である。樹種同定の結果は、針葉樹材のモミ属であった。59 は中世雑器の鍋口縁部である。端部がやや肥厚する。表面がやや黒く燻されているが、焼成は弱く土師質焼成気味である。

SP426　60 は柱材で、断面形は円柱である。表面には一部にハツリ跡が残り、保存状況が比較的良好である。61 は、さし銭状で出土した銭貨である。保存状態が悪く分離していないため、銭種の確認は未了である。

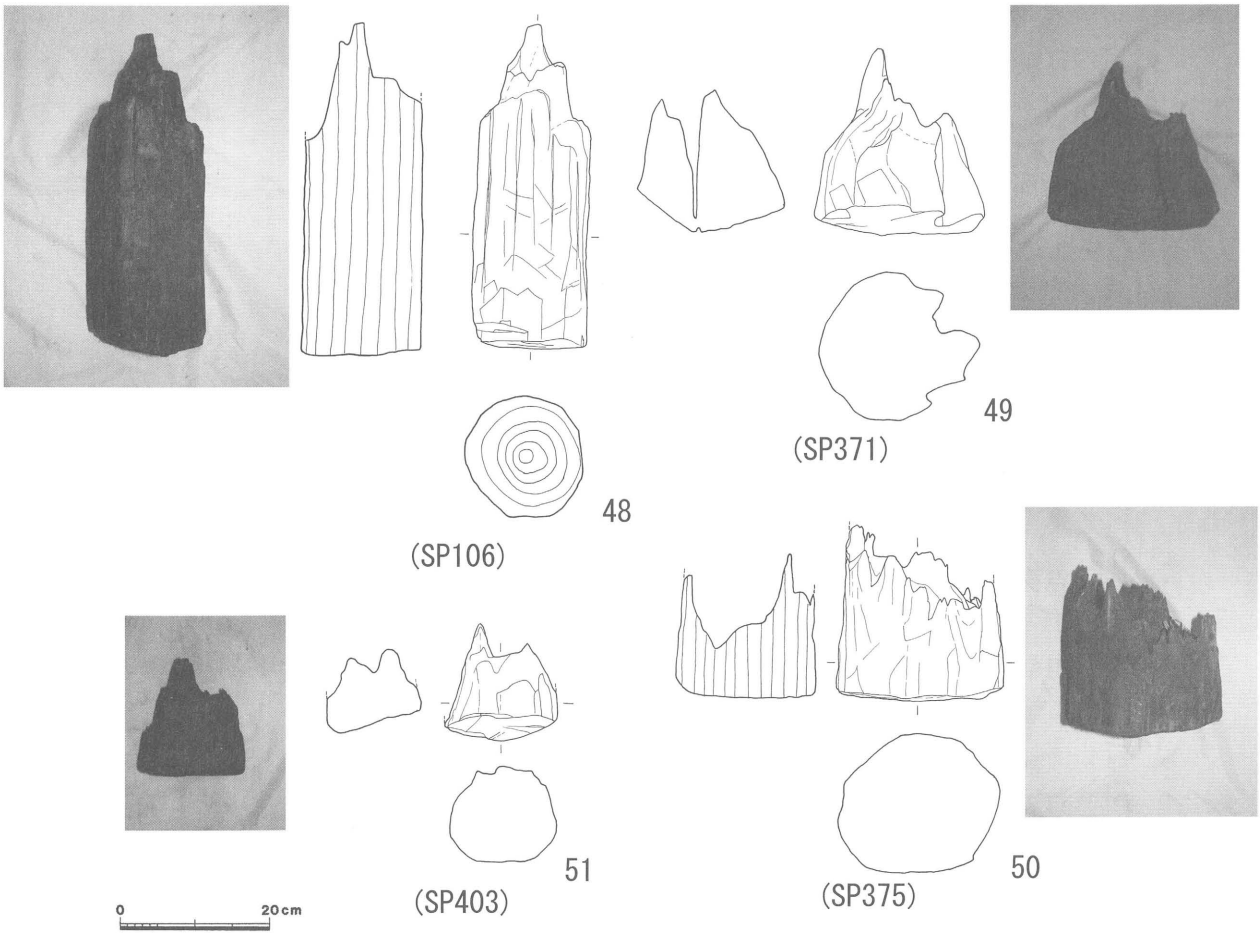
SP579　62 は柱材で、断面形は角柱である。底部付近のみが残存していた。

SB16

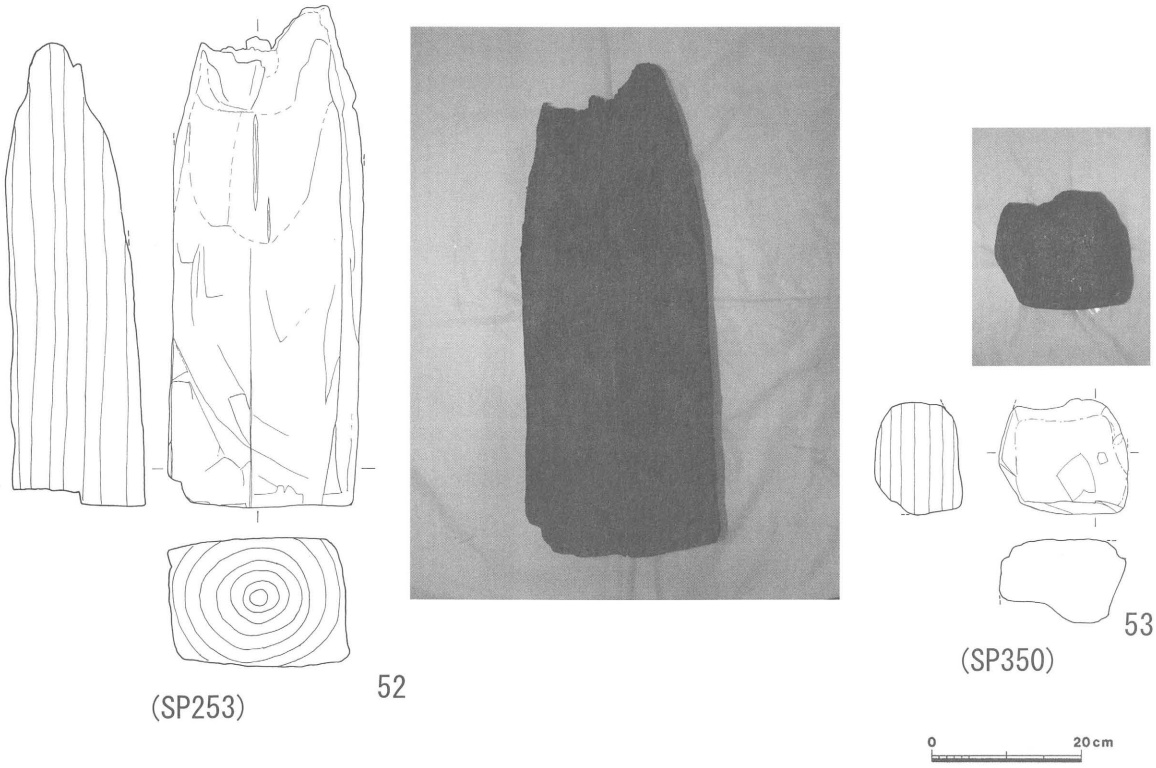
SP341　63 は青磁の小皿口縁部である。



第36図　ＳＸ出土遺物（1/3）



第 31 図　ＳＢ 11 出土遺物（48 ～ 51：1/10）



第 38 図　ＳＢ 12 出土遺物（1/10）

SB17

SP222　64 は足鍋の脚部である。端部は獣足状にやや曲がる。瓦質焼成である。

SB18

SP507　65 は柱材で、断面形は角柱である。一部が欠けた状況で遺存していた。

SB19

SP725　66 は柱材で、断面形は円柱であると考えられる。底部付近のみが残存していた。

ＳＰ（その他の柱穴・ピット）出土遺物

SP116　67 は白磁のＤ群の坏口縁部である。68 は褐釉陶器の瓶で、中国産の 16C 代のものと考えられる。69 は土師質土器皿で、ロクロ成形による凹凸が顕著に残り、胎土・焼成とも非常に良好である。70 はいぶし瓦の平瓦である。

SP117　71 は銅銭で、錆が進んでおらず保存良好である。銭種は「咸平元宝」かと考えられる。

SP220　72 は陶器皿の口縁部で萩焼と考えられる。73 は表裏面に菱形の印刻の見られる青磁であるが、近世の日本産の可能性が高いと考えられる。

SP221　74 は土師質土器皿の底部、75 は土錘である。

SP232　76 は被熱痕のある土製品で、一部に湾曲した面が確認できる。

SP234　77 は断面形が円柱の柱材である。

SP249　78 は錆で覆われた不明遺物である。非常に軽く、一部に面がある。

SP260　79 は初期伊万里系の染付碗で 17C 代と考えられる。

SP279　80 はスサ入りの土壁状の土製品であり、被熱痕がある。

SP307　81 もスサ入りの土壁状の土製品であり、被熱痕がある。

SP376　82 は擂鉢で瓦質の焼成良好なものである。口縁端部が内側に肥厚する。

SP395　83 は擦痕のある石が焼けて割れたものである。側面が砥石として用いられたと考えられる。石材は石英斑岩あるいは流紋岩と推定される。

SP400　84 は白磁のＥ１群の皿である。

SP428　85 は擂鉢で瓦質の焼成良好なものである。口縁端部が内側に肥厚する。86 は断面形が円柱の柱材である。

SP444　87 は備前焼の小壷の口縁部と考えられる。

SP457　88 は青花碗Ｆ群の類で、16C 末～ 17C 初頭頃と考えられる。

SP468　89 ～ 91 は金属滓である。89 は発泡質状のもの、90 は流動状のもの、91 は炉底滓の可能性のあるものである。

SP473　92 は鉱石の可能性のある鉱滓状の破片である。他の鉱滓と比較して重量感がある。93 は黒碁石の可能性のある扁平な玉石である。暗灰色を呈し、石材は泥岩である。

SP486　94 は鍋口縁部である。端部は肥厚する、瓦質焼成である。

SP498　95 は青磁碗Ｅ群の底部である。

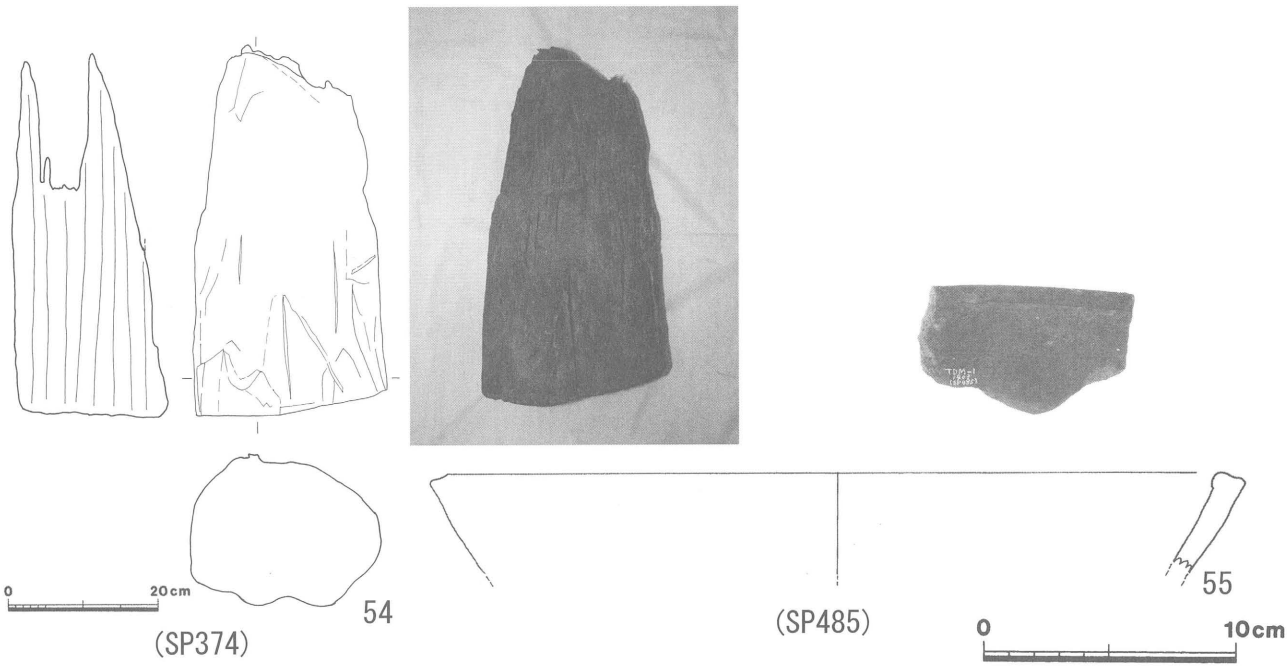
SP522　96 は藁灰釉のかかった陶器皿で、近世以降と考えられる。

SP544　97 は断面円柱形の柱である。

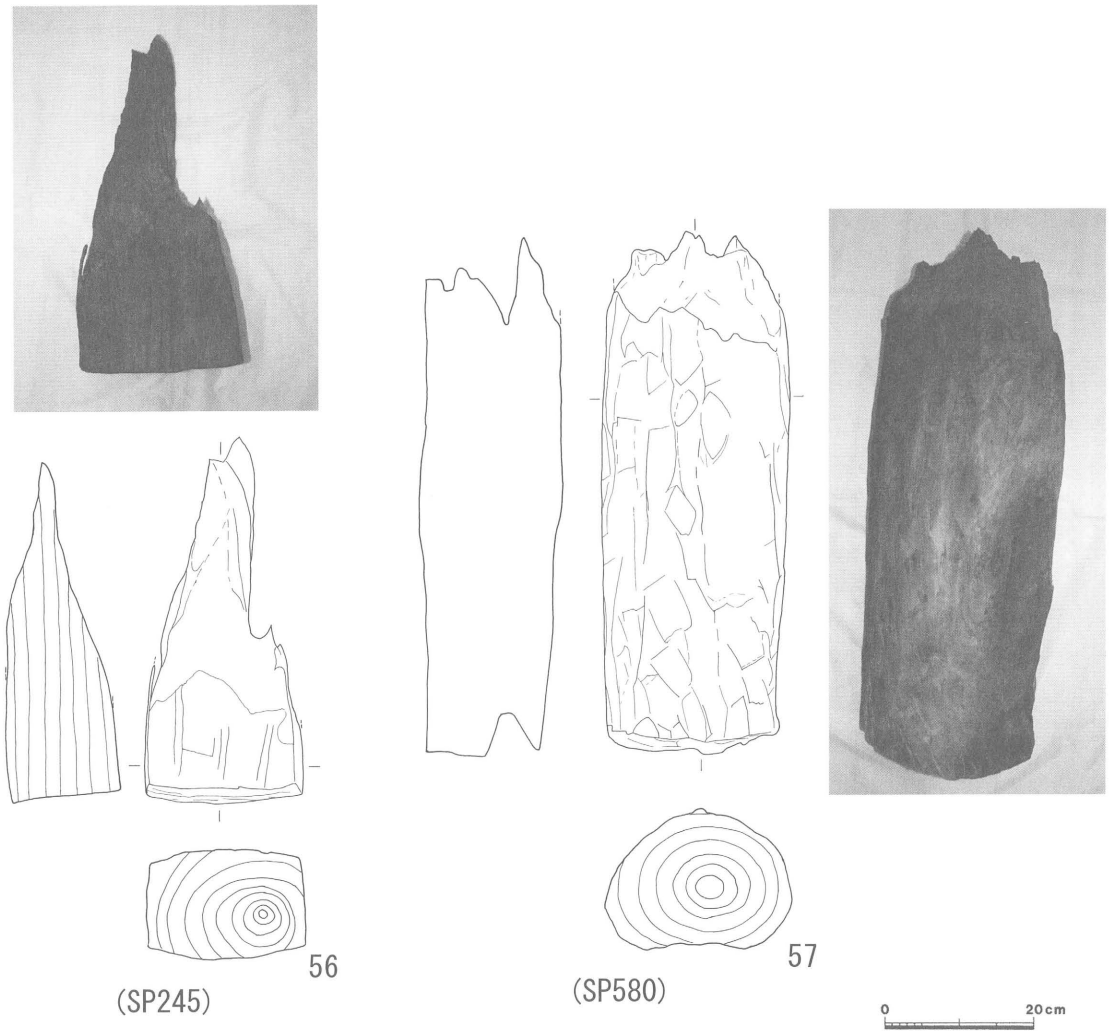
SP546　98 は断面角柱形の柱である。

SP576　99 は断面角柱形の柱である。

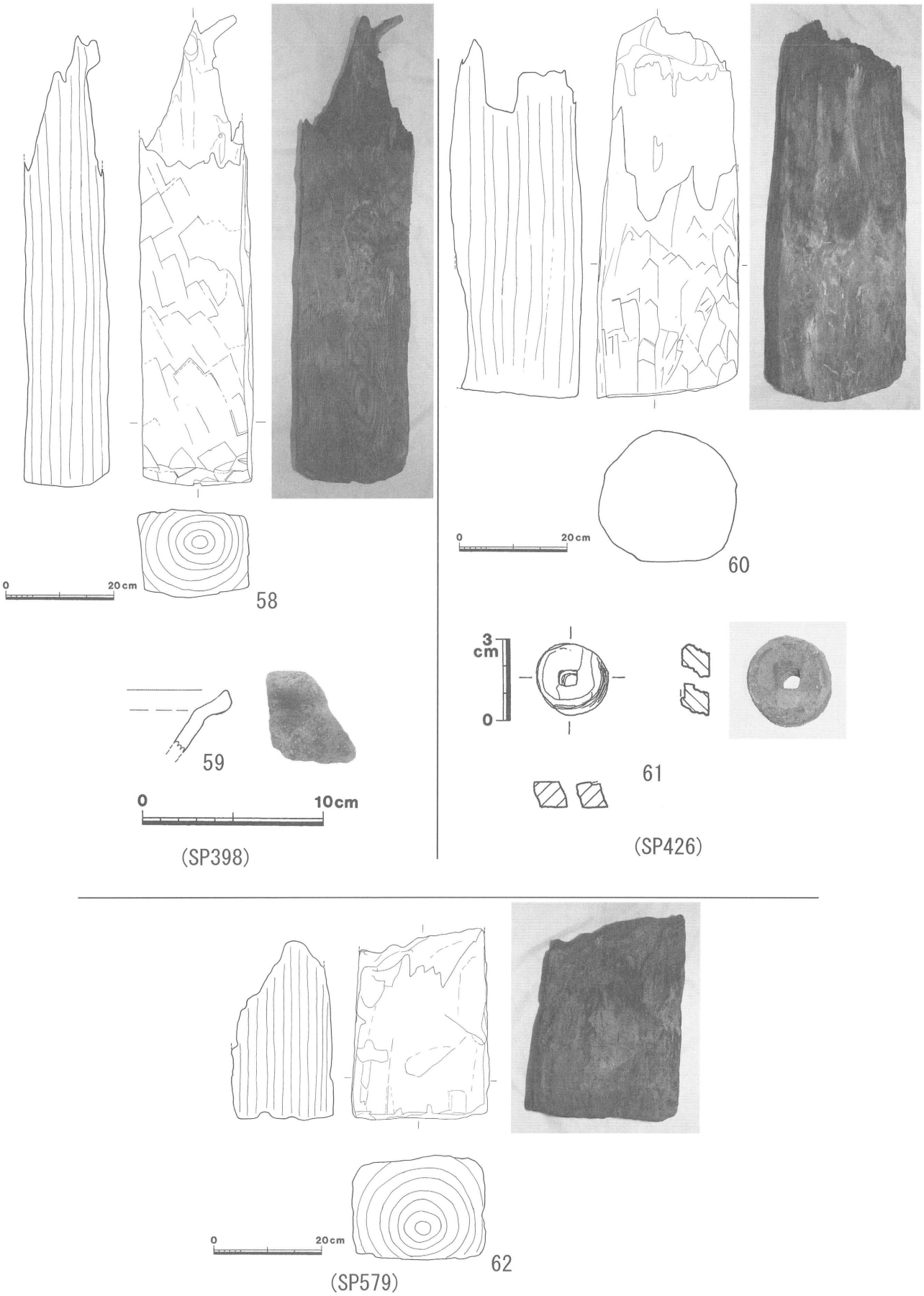
SP570　100 は土師質土器の底部破片である。外面には擬似高台状に段があり、中世前半期の可能性が高い。



第39図　ＳＢ13出土遺物（54：1/10、55:1/3）



第40図　ＳＢ14出土遺物（1/10）



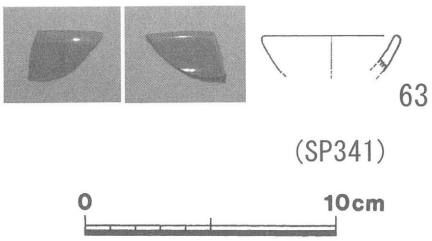
第41図　ＳＢ15出土遺物（58・60・62：1/10、59:1/3、61:1/2）

SP704　101は中世須恵器の甕肩部で、外面には格子目タタキの痕跡が残る。102は土師質土器底部で、外面には擬似高台状の段がある。

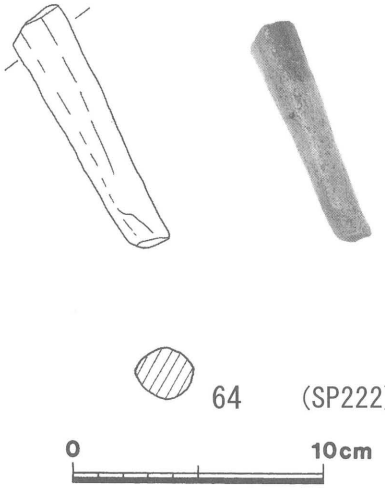
SP708　103は砥石で、焼けて割れたと考えられる。両端部以外の全面を使用している。石材は流紋岩質凝灰岩である。

SP714　104は土師質土器体部である。

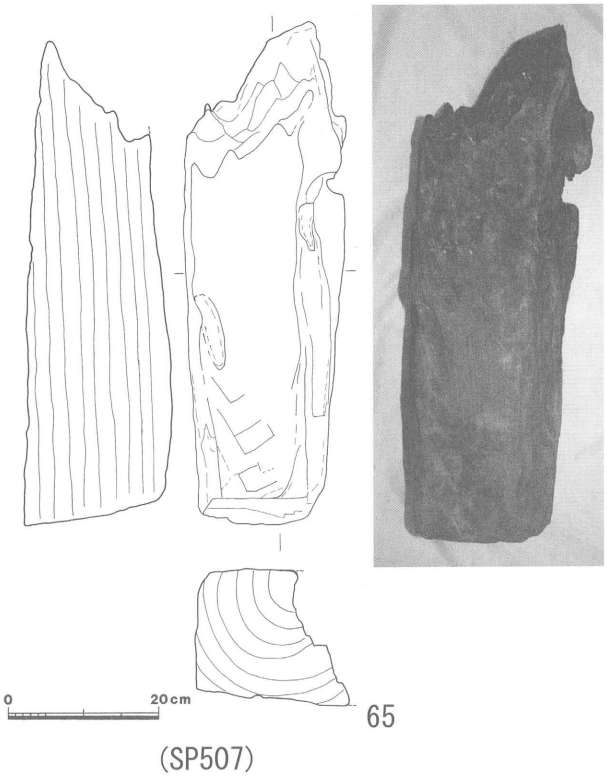
SP730　105は青花碗C群で、16C半ばと考えられる。



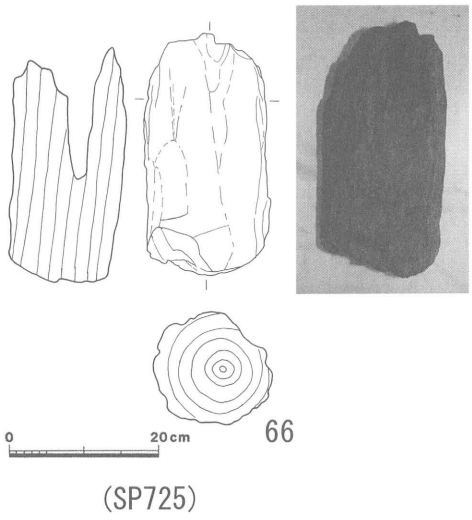
第42図　ＳＢ16出土遺物(1/3)



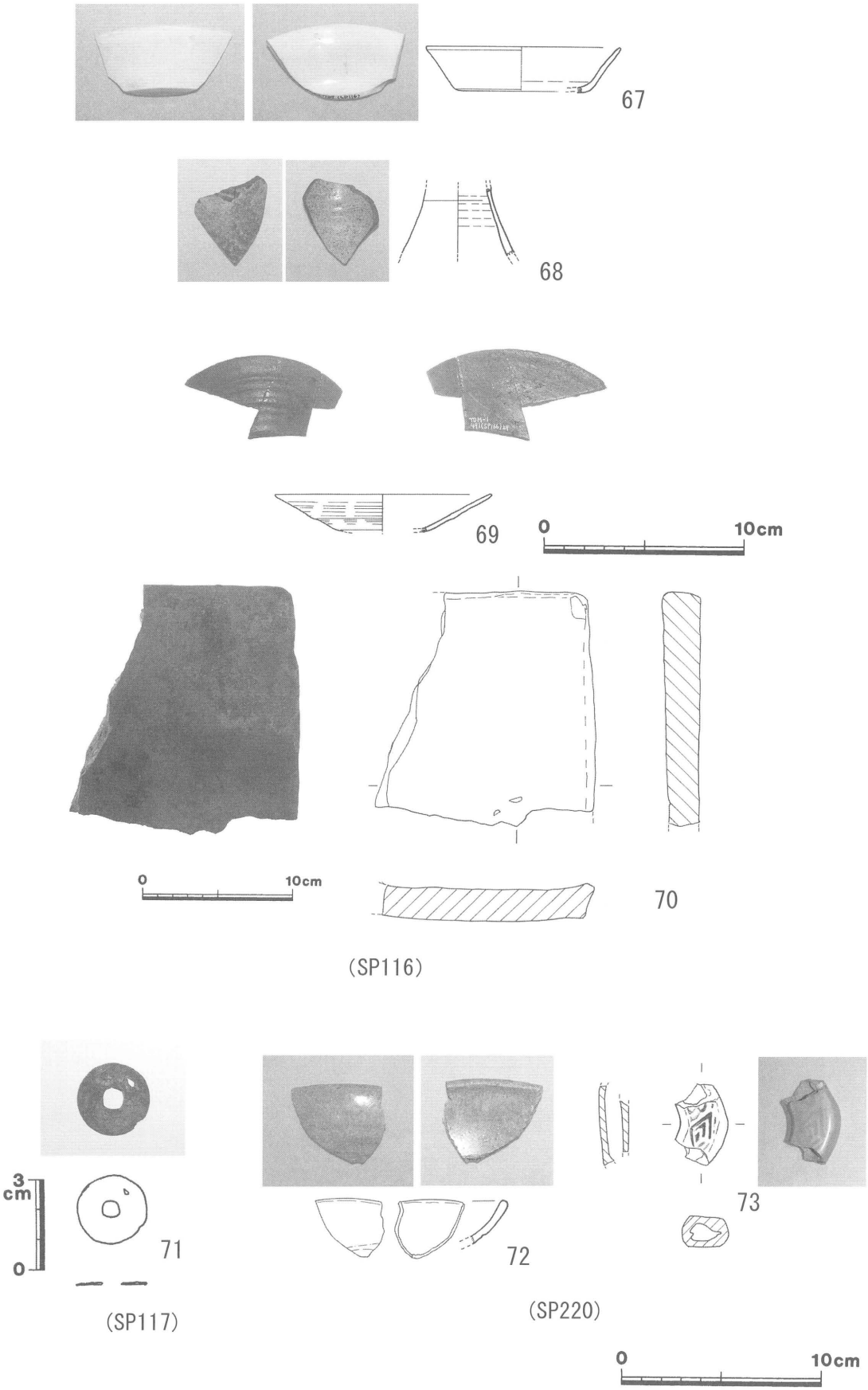
第43図　ＳＢ17出土遺物(1/3)



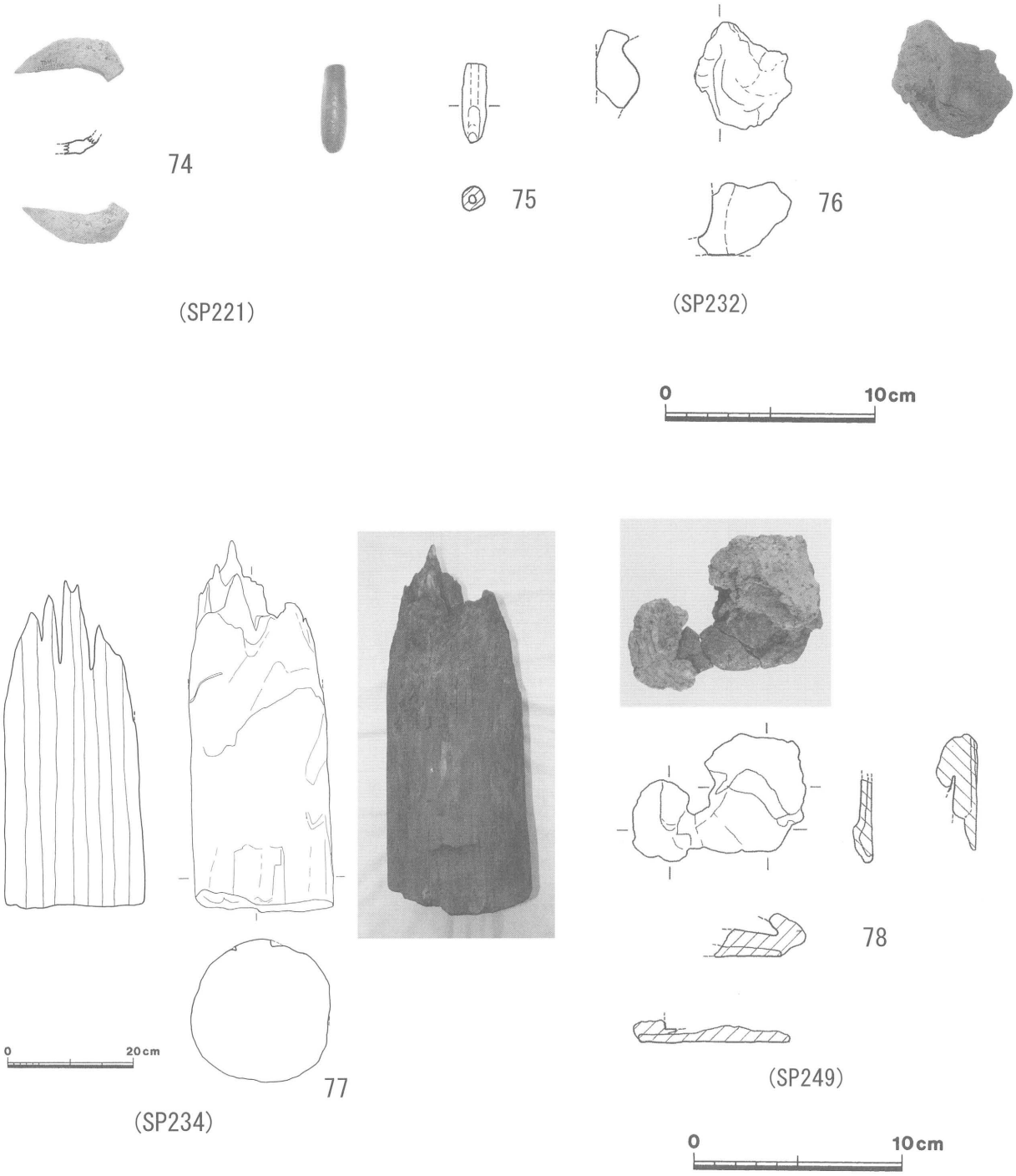
第44図　ＳＢ18出土遺物(1/10)



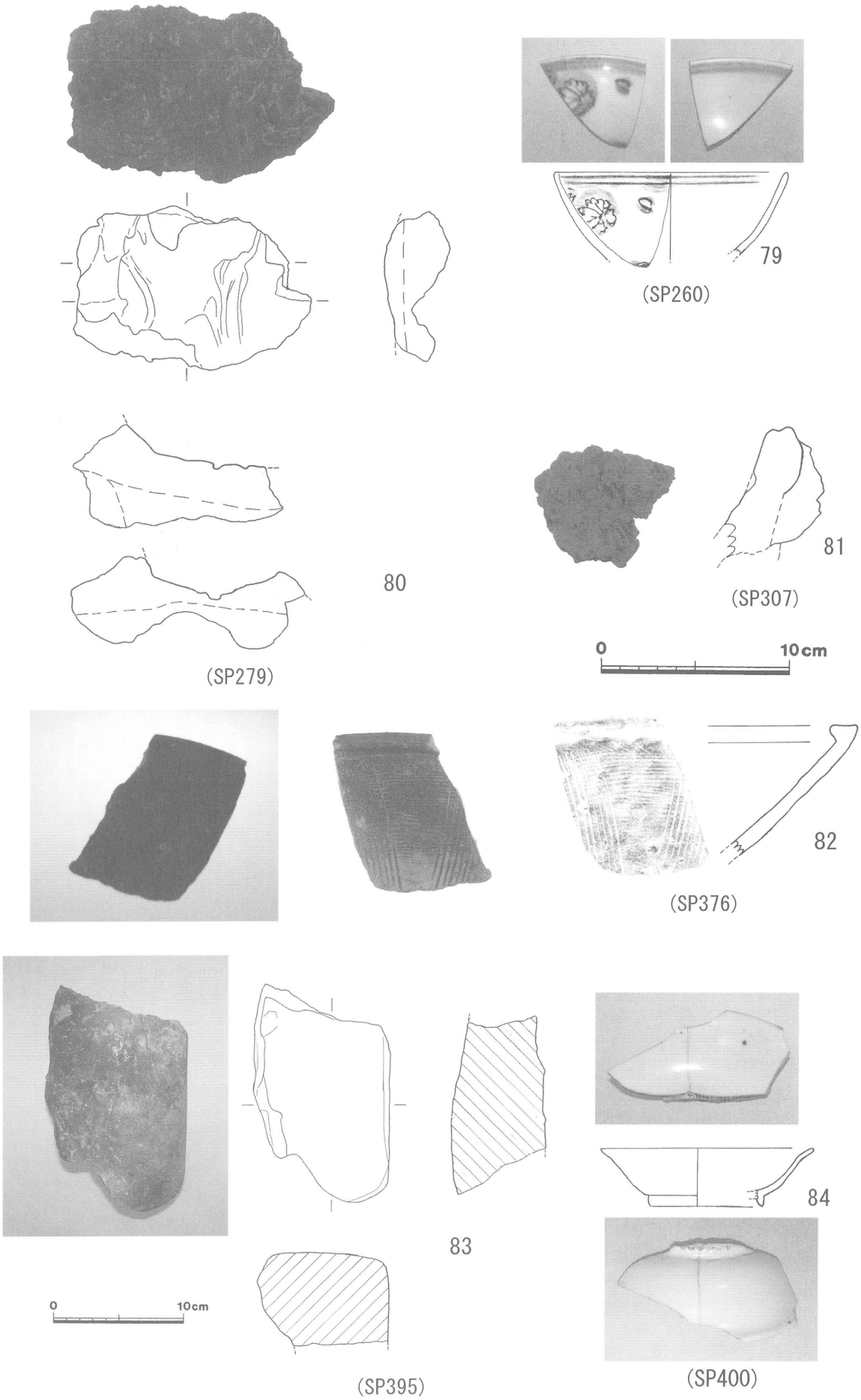
第45図　ＳＢ19出土遺物(1/10)



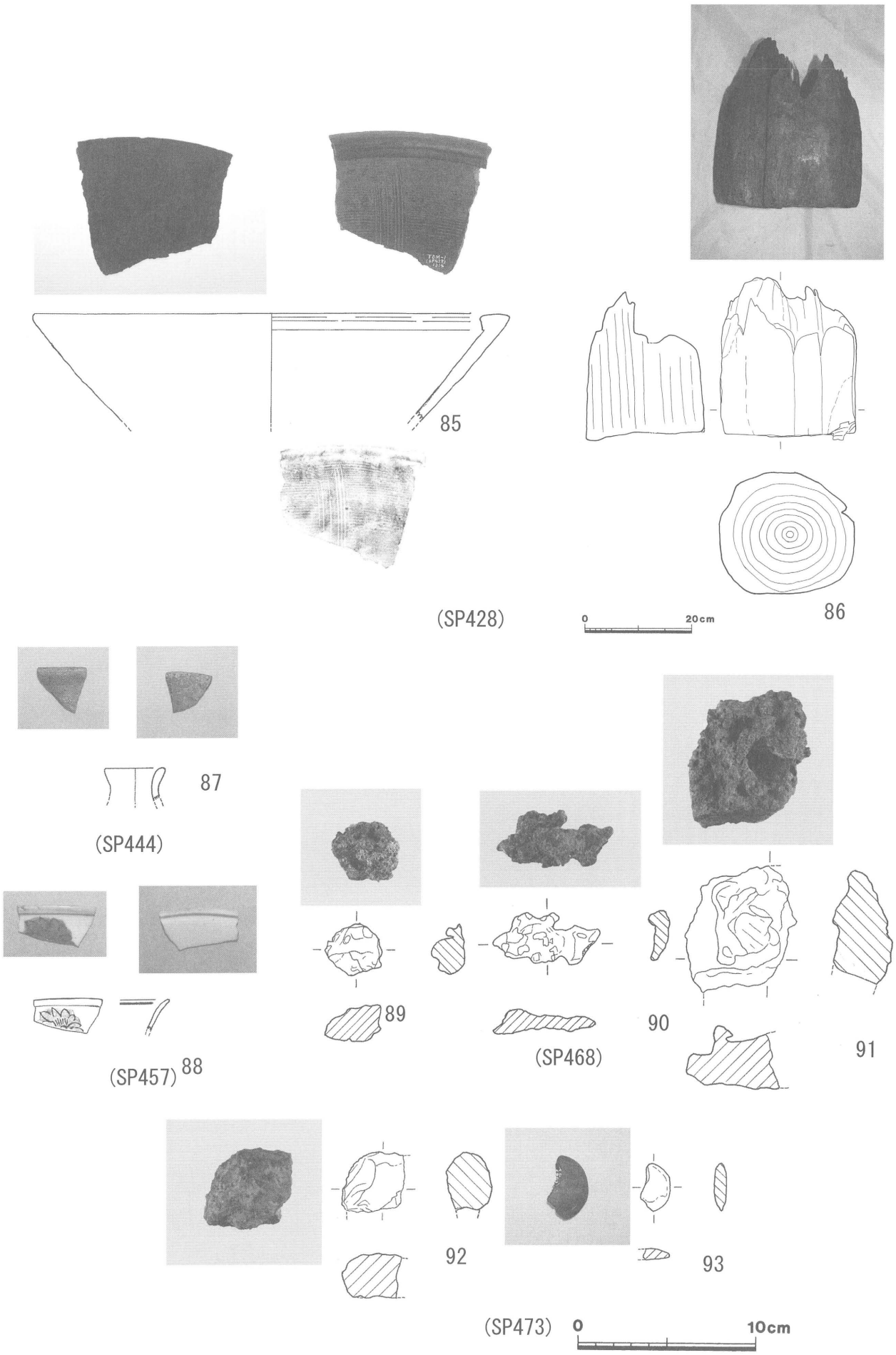
第46図　ＳＰ出土遺物（67～69・72・73：1/3、70：1/4、71:1/2）



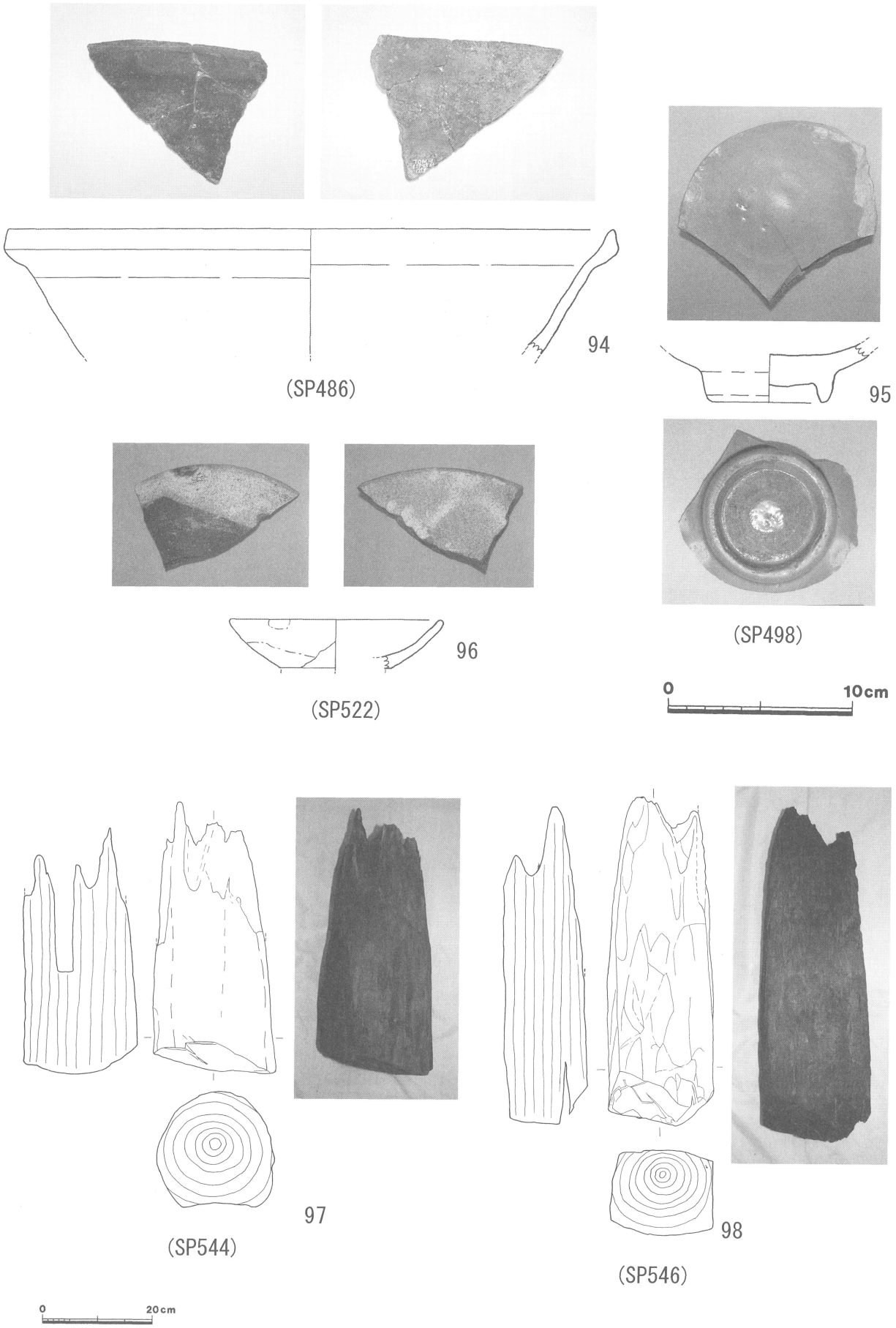
第47図　ＳＰ出土遺物（74～76・78:1/3、77:1/10）



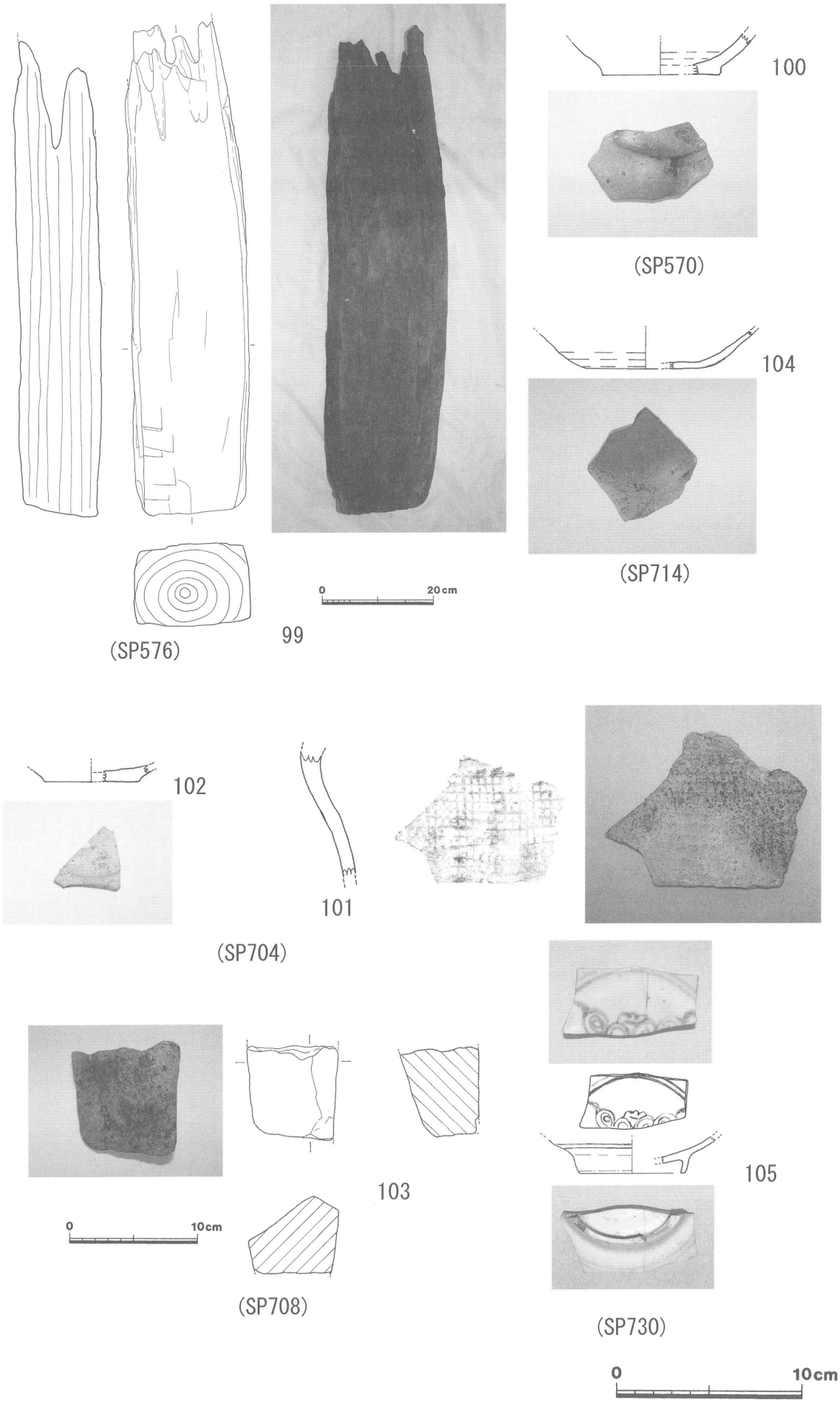
第48図　ＳＰ出土遺物（79～82・84：1/3、83:1/4）



第49図　ＳＰ出土遺物（85・87～93:1/3、86:1/10）



第50図　ＳＰ出土遺物（94～96:1/3、97・98：1/10）



第51図　ＳＰ出土遺物（99：1/10、100～102・104・105：1/3、103:1/4）

（２）遺構に伴わない遺物

中世～近世の遺物

106 ～ 110 は中国製の白磁である。106 は四耳壺の胴部と考えられ、中世初頭の遺跡の存在を示すものか、あるいは伝世品であった可能性もある。S53 グリッド 4 層出土。107・108 は白磁 D 群の口縁。107 は TR10 の 5 層出土。108 は S52 グリッドの TR7 の 6 層出土。109 は白磁 E1 群の底部。T53 グリッド 4 層出土。110 は白磁Ｅ 2 群。Ｑ 51 グリッドの 3 層出土。

111 ～ 118 は中国製の青磁である。111 は龍泉窯系の皿の底部で、内面見込に花文が刻まれている。出土層位不明。112 ～ 115 は青磁碗Ｄ類の端反りの口縁部。116 は同じ青磁碗Ｄ類の底部。117 ～ 118 は青磁の香炉。117 が口縁部で内面は口縁端部のみ釉薬がかかり以下は露胎となる。118 が底部で内面全体が露胎となり、ややにぶい褐色に変色する。

119 ～ 122 は中国製の青花。119 は染付碗Ｂ群の口縁部。120 は染付皿Ｂ 1 群の底部。121 は染付碗Ｆ群の口縁部。122 は染付碗Ｇ群の口縁部。123 ～ 124 は褐釉系の中国製陶器。123 は天目茶碗の口縁部。124 は褐釉陶器の瓶の頸部。

125 ～ 126 は中国以外の貿易陶磁器で、朝鮮陶磁と考えられるもの。125 は瓶の底部。内外面とも無釉の焼締陶器で灰色を呈する。126 は雑釉陶器の碗口縁部。

127 ～ 139 は国産の陶磁器。127 は中世須恵器の甕肩部と考えられる。外面には格子目タタキがある。焼成は不良の瓦質焼成である。128 ～ 131 は焼締陶器類である。128・129 は中世備前焼の擂鉢。128 は 129 と比較して小型品である。130 は産地不明の焼締陶器の甕口縁部で、中世遺物のひとつと推定される。131 は上半が失われている現状では台付の鉢に見える。近世後半以降の仏器のひとつである可能性がある。

132 ～ 134 は瀬戸美濃焼。132 は天目茶碗の口縁部。133 は輪花皿の口縁端部、134 は皿底部である。135 ～ 137 は唐津焼。135 は碗の口縁部。136 ～ 137 は皿の底部。138 はいわゆる初期伊万里系の染付磁器。139 は藁灰釉陶器の取手部である。

140 ～ 144 は中世土師質土器の皿。140 は厚い底部をしており、中世前半期にさかのぼると考えられる。141 ～ 144 はロクロ成形の薄手の土器で中世後半期のものと考えられる。141 ～ 143 は底部外面の稜が明確であるのに対して、144 は稜が不明瞭であり、手づくね成形の京都系土師器皿を模した可能性がある。

145 ～ 156 は中世以降の雑器類である。145 は中世前半期の羽釜の鍔部で、土師質焼成。146 ～ 149 は鍋である。146 は鍋口縁部で、まだ肥厚してない口縁端を有する土師質焼成のもの。147・148 は鍋口縁部で、肥厚する端部を有する瓦質焼成のもの。149 は防長型のいわゆる足鍋の脚部で、端部が獣足状にやや曲がるもの。150 ～ 155 は鉢でいずれも瓦質焼成。151 ～ 155 には卸目が付けられている。156 は瓦質土器の甕口縁部と考えられる。

157 ～ 158 は石製品類。157 は砥石で、両端以外の 4 面に擦痕があり、一部には並行する線刻が見られる。158 は白色の碁石の可能性がある玉石で、石材はチャート。

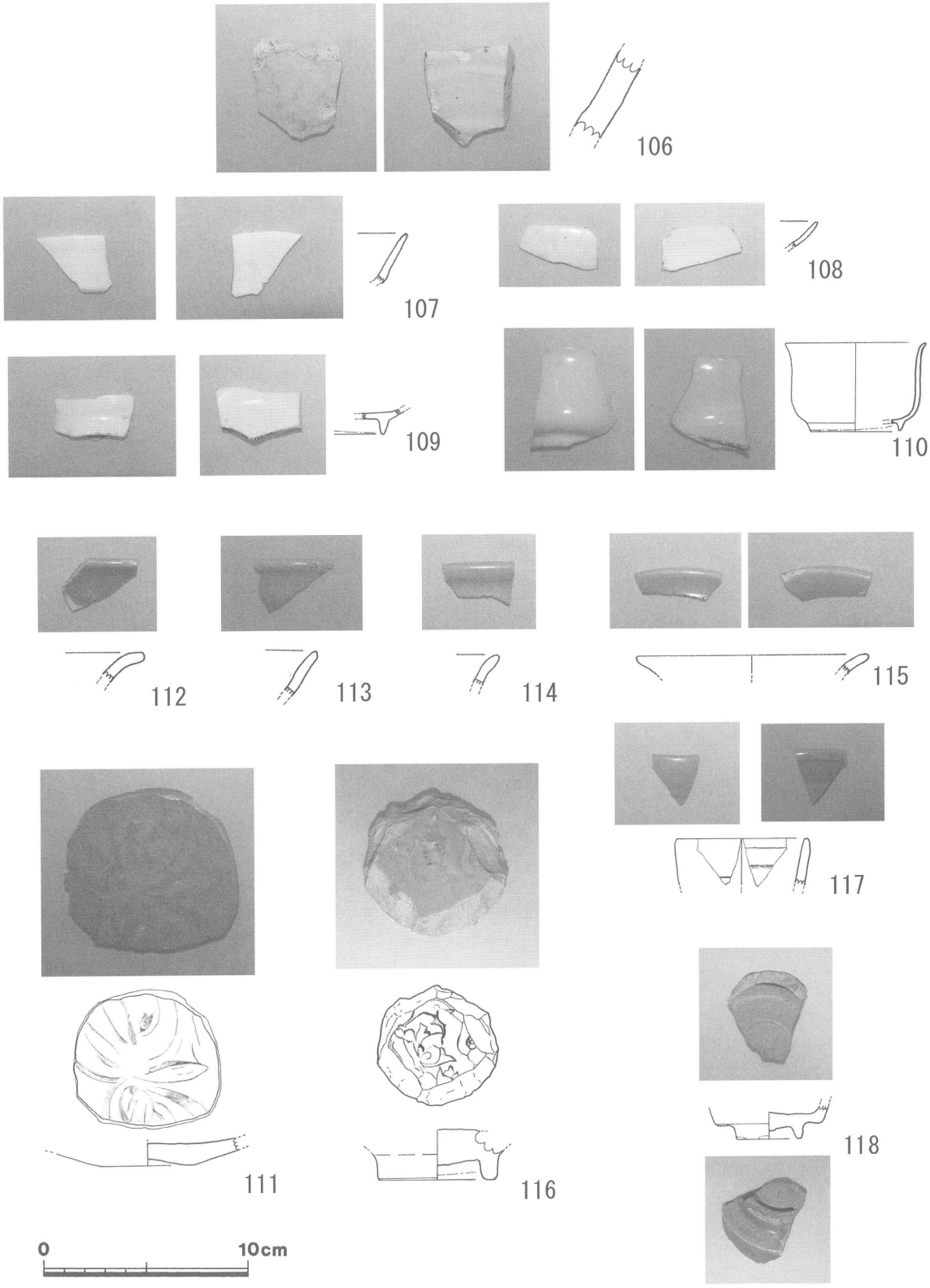
159 ～ 160 は銭貨。159 はさし銭状をして出土し、褐色系の錆が表面を厚く覆っている。銭種は直接確認できないが、錆の状況から寛永通宝の鉄銭である可能性が高いと考えられる。160 は青銅錆が著しく遺存状況不良のため、銭種確認不能。模鋳銭である可能性が高いと考えられる。

161 ～ 162 は板状の鉱滓である。一見すると頁岩状の自然石かと見間違うが、石に比べ重量感がある。161 には片面の縁に隆起帯が見られ、排滓の過程を示すと考えられる。162 の片面には気泡状の粒が数点残る。

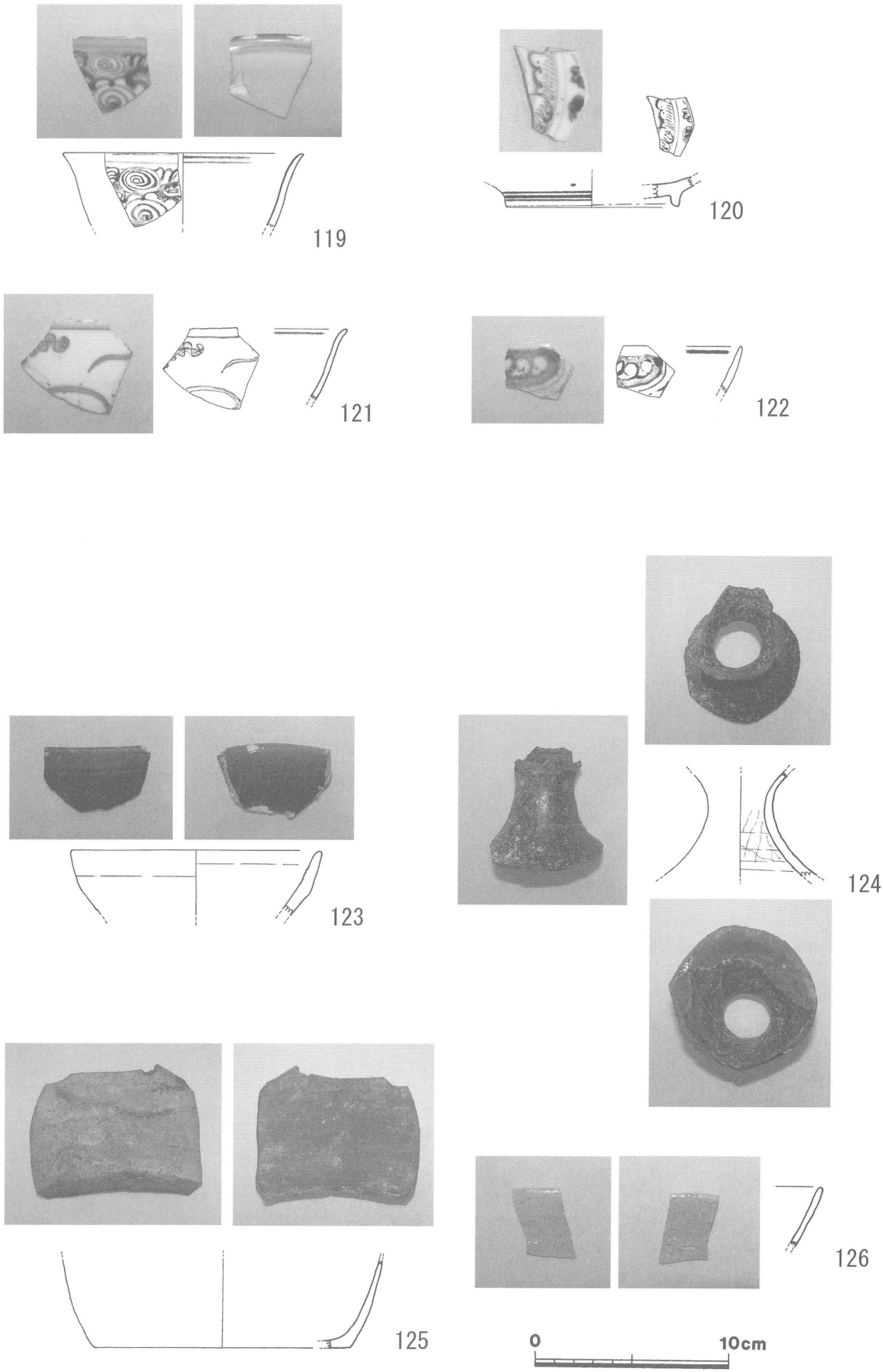
163 は土製品。スサ入りの壁土状を呈する破片であり、少なくとも３面を有する何かの隅部である。被熱痕跡が見られる。

縄文時代の遺物

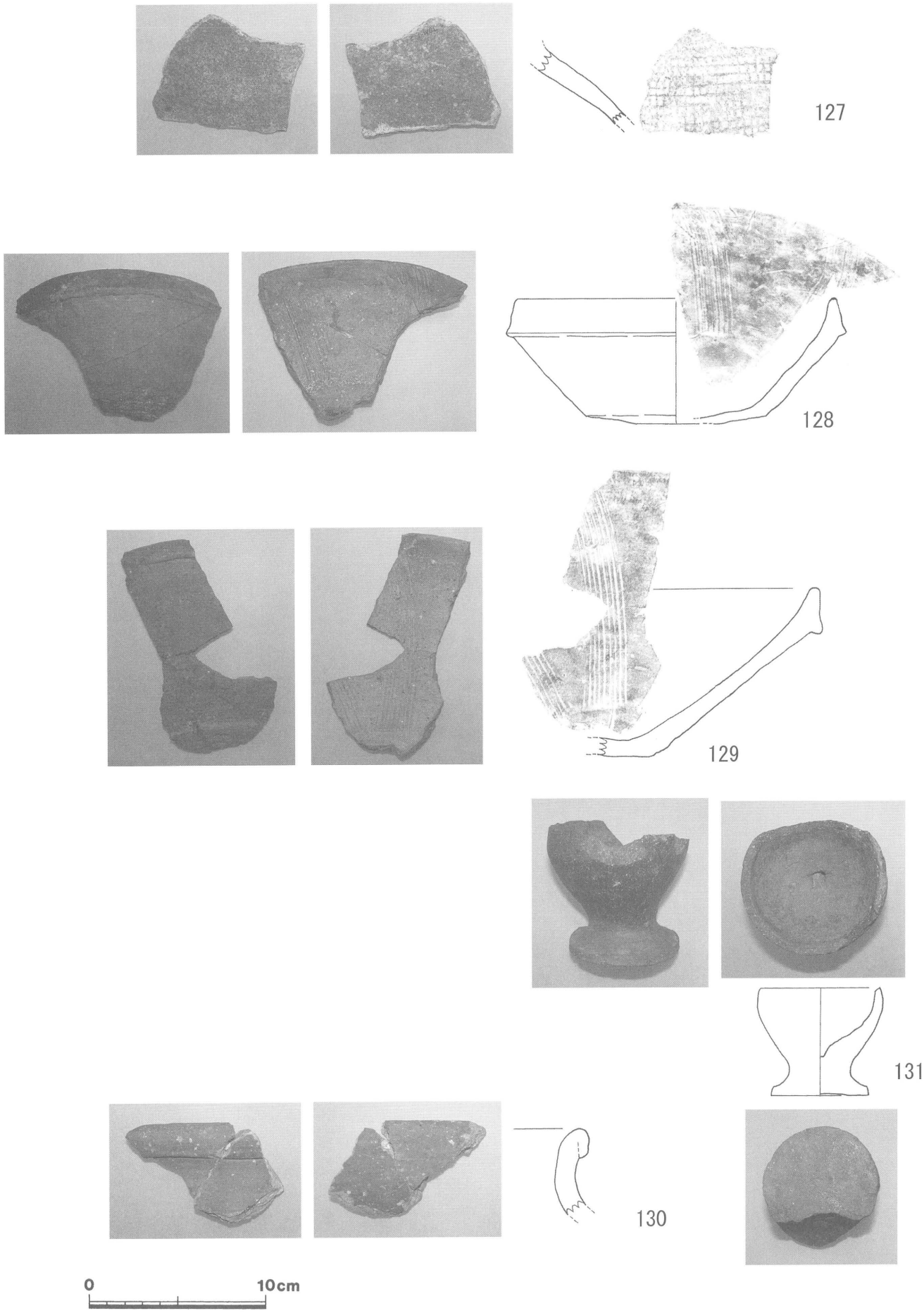
164 ～ 165 は縄文時代の石器類。164 は磨石で、石材は石英斑岩。165 は石斧で、石材は泥岩。



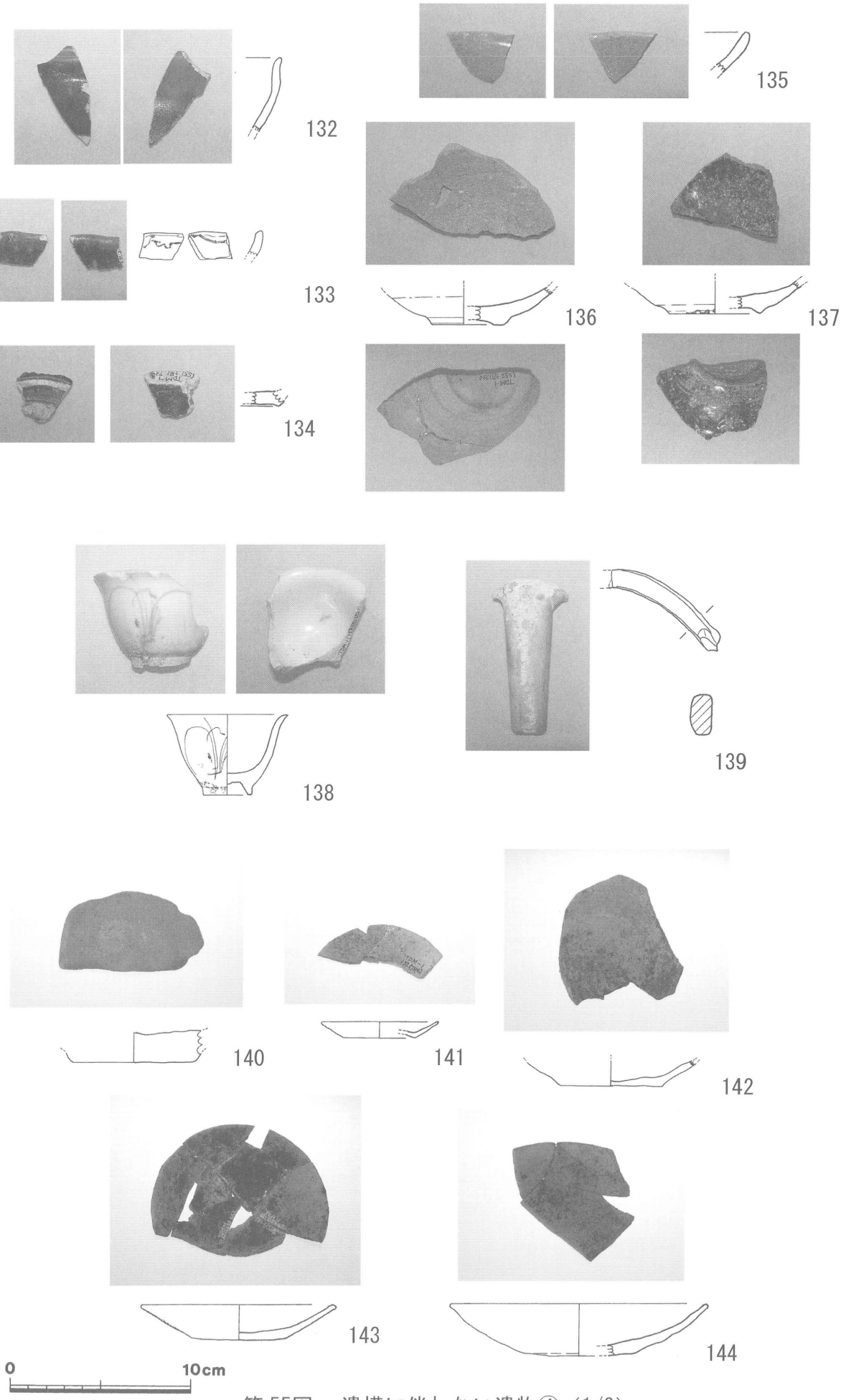
第 52 図　遺構に伴わない遺物①（1/3）



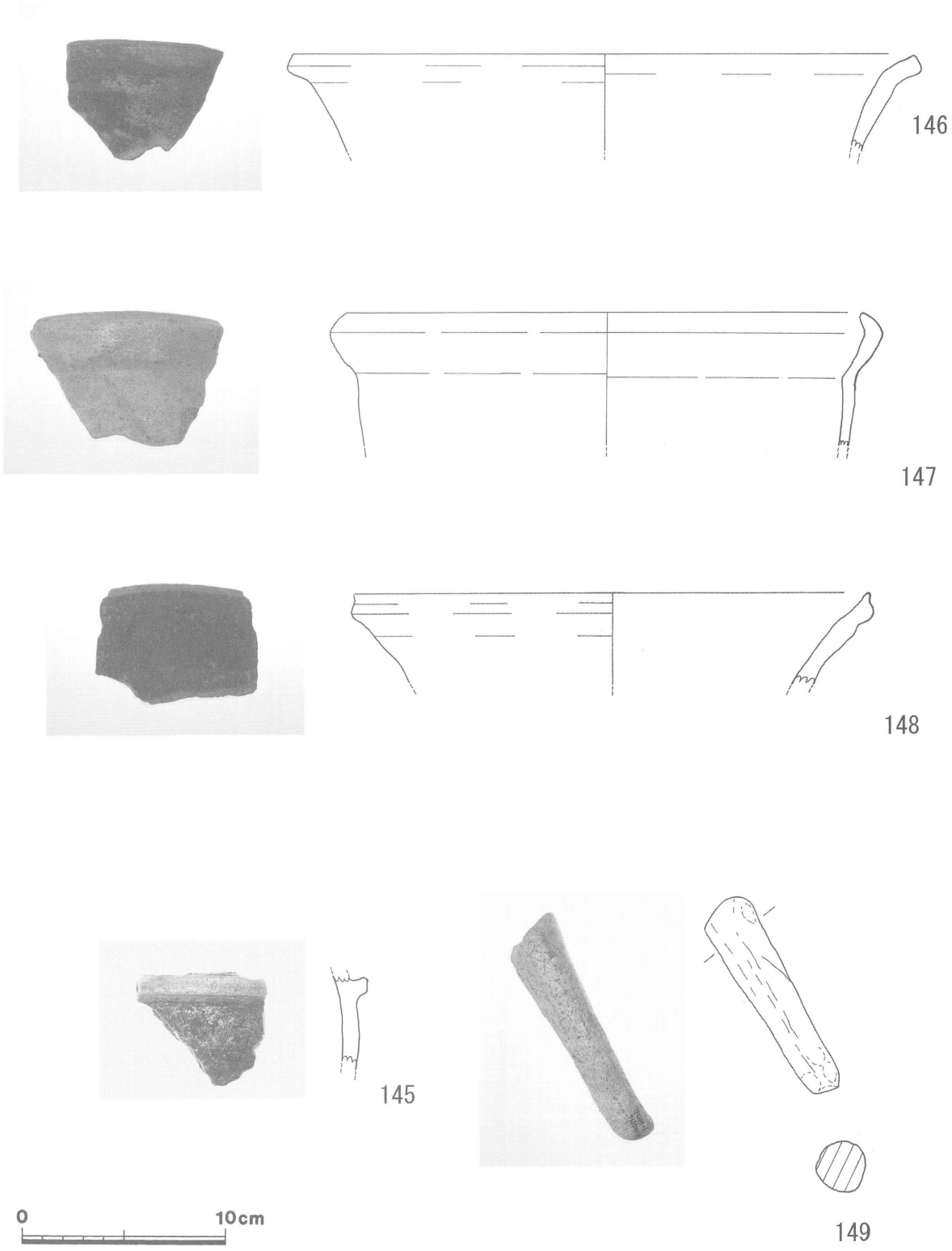
第 53 図　遺構に伴わない遺物②（1/3）



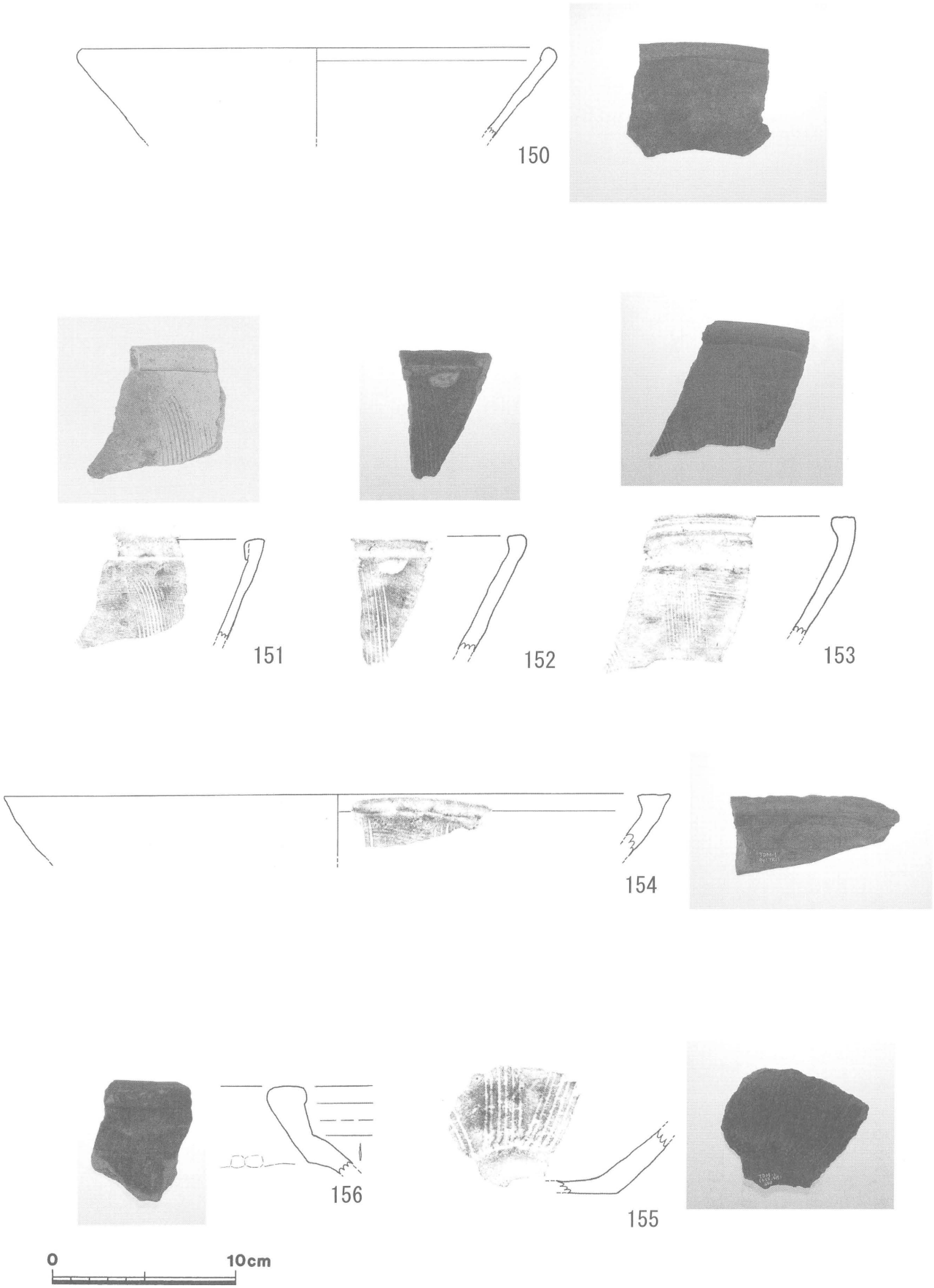
第 54 図　遺構に伴わない遺物③（1/3）



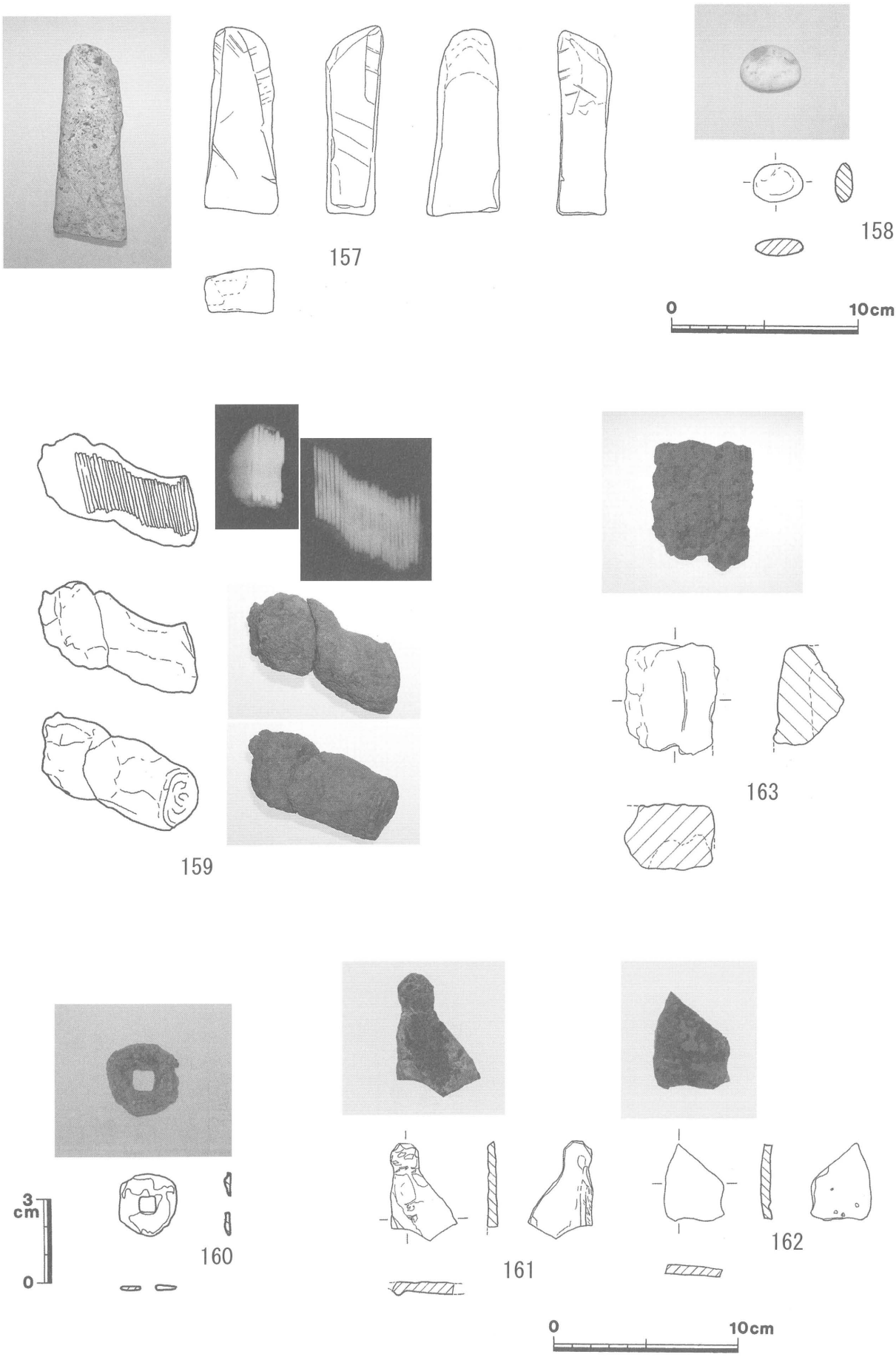
第 55図　遺構に伴わない遺物④（1/3）



第 56 図　遺構に伴わない遺物⑤（1/3）

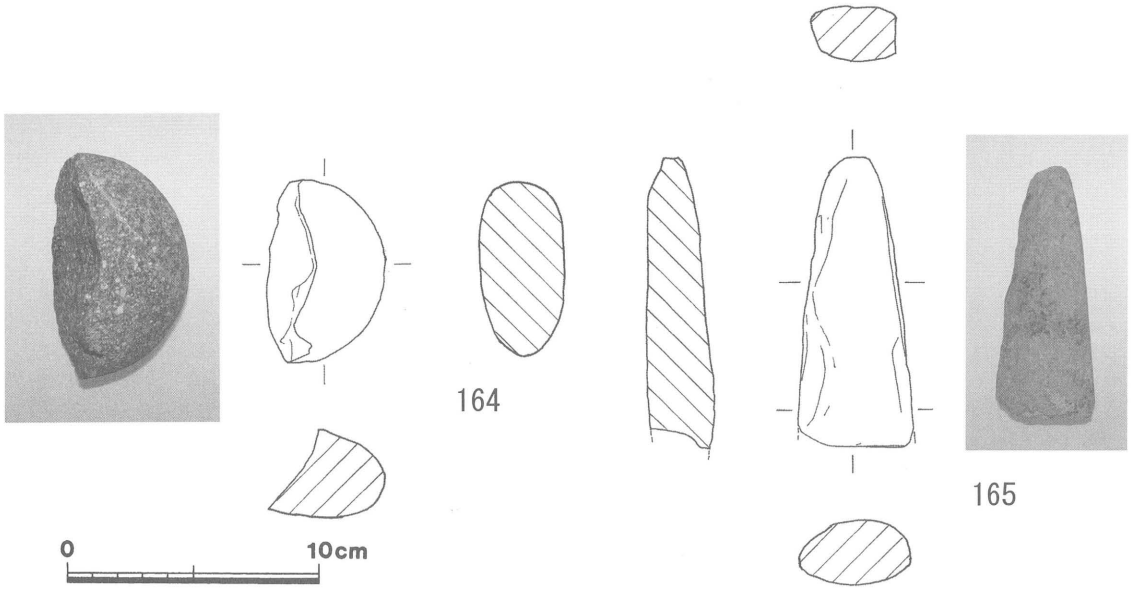


第 57 図　遺構に伴わない遺物⑥（1/3）



第 58 図　遺構に伴わない遺物⑦

(157 ～ 158, 161 ～ 163:1/3、159 ～ 160 : 1/2)



第 59 図　遺構に伴わない遺物⑧（1/3）

第４章　まとめ

これまで、『津和野町史』を執筆された沖本常吉氏が、文献史料の少ない中世以前の地域史を叙述するために、地名を手がかりに考察されてきた。西谷・出合地区においても、「的場」「殿河内」「寺ヶ台」「前田」などの字名が 、中世の景観を復元する上で注目されてきた。このことを、発掘調査を通じて検証し、さらに地域の歴史を明らかにすることが、今回の調査の大きな目的であった。発掘調査の結果、上記の字名の残る場所のいずれからも中世遺物が出土しており、地域史解明にとって地名がひとつの有効な手がかりとなることが確認できた。また、いずれの遺跡からも少量ではあるものの、縄文時代に遡る可能性のある遺物が出土しており、意外に古くから人々が住み始めていたことが分かる。以下、遺跡ごとに特徴をまとめる。

1　　出合的場遺跡

縄文および中世の遺物散布地である。縄文期かとみられる打製石斧が出土。出土遺物量は少量であり、中世以降のものが主体である。遺構は存在せず、遺物は水田造成土に含まれる状況で出土した。調査地は遺跡本体ではなく、小規模な遺跡が周辺に存在するとみられる。

2　　殿河内遺跡

縄文中期の散布地、中世の集落跡である。滑石混じりの縄文土器が２点出土した。中世遺物は少量であるが、２時期以上の掘立柱建物跡と焼土・炭層を確認しており、この場所に中世集落が存在していたことが裏付けられた。

3　　寺ヶ台前田遺跡

縄文の遺物散布地、中世～近世の集落跡である。縄文期かとみられる磨石が１点出土している。上記２遺跡に比較して遺物量が多く、今回の調査地点から西方にかけての範囲が、西谷地区の中世遺跡の主体であると考えられる。遺構面が伴うとみられる遺物包含層は４・６・８層である。出土遺物から、４層は16Ｃ代～近世、６層は15Ｃ代、８層はそれ以前である可能性が高い。遺構には焼土・炭の集中地点が多くあり、ピット内から焼石が出土することが多かった。

金属滓の出土は数点のみであったが、銅生産を直接示す板状鉱滓が２点出土した。板状鉱滓は遺物包含層３層および４層から出土しており、特に４層は16Ｃ代である可能性がある。遺跡周辺にある銅山としては笹ヶ谷銅山がある。近世～近代に主に稼動したが、砒素公害があり現在は閉山している。伝承によると中世の領主吉見氏入部と同時期の弘安年間（13C末）に開坑したといわれており、古くに開発された地点は寺ヶ台前田遺跡から約1km北の畑ヶ迫地区山内であるといわれている。今回出土した板状鉱滓は、旧畑ヶ迫村をはじめとした近世の天領でおこなわれていた銅生産にさかのぼる資料である可能性があり注目される。

他に特記する遺物としては、16Ｃ代の遺物を伴ったいぶし瓦がある。また、著しい湧水量のため調査は難渋したが、その反面、有機質遺物（柱材など）の保存状態が非常に良好であった。

今回の調査は、遺構の発掘および検討が十分であるとは言えないが、銅を含む金属生産をおこなっていた中世ー近世の集落が、この地に存在していたことは明らかとなったといえよう。

（参考文献）沖本常吉 1970『津和野町史』第１巻

津和野町寺ヶ台前田遺跡から出土した「鉱滓」について

奈良文化財研究所　村上　隆

1　はじめに

島根県津和野町寺ヶ台前田遺跡から、金属の製錬に伴い排出された「鉱滓」と思われる遺物が20数点出土した。これらの遺物は一括して出土したものではなく、また金属製錬の痕跡を特定できる遺構の検出もみていないため、体系的な調査にはならないが、それぞれの遺物の材質的な特徴をある程度把握しておくことは、この地域における今後の調査に対する基礎的知見を提供するものと考える。

2　調査に供した資料

島根県津和野町寺ヶ台前田遺跡から出土した、外見上金属の製錬に伴い排出された「鉱滓」と考えられる遺物、24点である。資料詳細を、表1に掲げる。

No.	取上番号	遺構・包含層層位	種別	法量（cm）			略測重量（g）	挿図番号
1	296	Q52、4層	滓	3.7	2.9	2.1	30	
2	683	T 53、4層	滓（板状）	4.1	3.3	0.5	16	第58図162
3	725	S53、3層	滓（板状）	5.3	3.2	0.5～0.7	22	第58図161
4	747	SP473	鉱石？	4.3	3.4	2.5	36	第49図 92
5	1287	SP467	滓	3.4	2.5	2.1	14	
6	1289	SP468	滓（流動状）	5.9	2.9	1.6	22	第49図 90
7	1290-A	SP468	滓	6.5	4.9	3.4	72	
8	1290-B	SP468	滓	2.7	2.3	1.4	10	
9	1292-A	SP468	滓（炉底滓？）	6.5	5.7	3.9	174	第49図 91
10	1292-B	SP468	滓（発泡質状）	3.0	2.8	2.1	10	第49図 89
11	1292-C	SP468	滓（発泡質状）	2.6	1.7	1.9	4	
12	1292-D	SP468	滓（発泡質状）	1.3	1.1	0.8	1	
13	1292-E	SP468	滓	4.5	3.6	3.0	46	
14	1292-F	SP468	滓	2.4	2.3	2.0	8	
15	1292-G	SP468	滓	2.6	2.2	1.4	10	
16	1292-H	SP468	滓	2.2	1.4	1.4	6	
17	1292-I	SP468	滓	2.2	1.4	1.3	4	
18	1292-J	SP468	滓	1.8	1.4	1.2	2	
19	1292-K	SP468	滓	1.6	1.2	1.0	2	
20	1292-L	SP468	滓	1.4	1.3	0.9	1	
21	1404-A	SP735	滓？	4.1	3.3	2.5	20	
22	1404-B	SP735	滓？	4.0	1.9	1.8	8	
23	1404-C	SP735	滓？	3.3	2.2	1.7	6	
24	542	SP249	材質不明の遺物（金属質？）	8.2	6.0	2.0	42	第47図 78
番外	－	遺跡周辺	結晶質石灰岩	－	－	－	－	

表1　寺ヶ台前田遺跡出土の金属生産関連遺物一覧

3　調査方法

調査は、主に非破壊的手法による蛍光X線分析による表面からの分析を行った。ただし、確実に鉱滓とみなせる資料No.2、No.3に対しては、断面の顕微鏡観察を行うとともに、走査型電子顕微鏡による観察と微小部分の元素分析を行った。また、No.4、No.9の2資料に対しては、資料断面の光学顕微鏡を用いた詳細な観察を実施した。なお、蛍光X線分析は、奈良文化財研究所において実施した。その他の分析は、㈱コベルコ科研において行った。

4　結果と考察

蛍光X線分析による非破壊的な分析では、ほとんどの資料において鉄を主成分とし、他の金属元素が微量に含まれる状況しか窺えない。その中で特に注目するのは、資料No.2、No.3である。どちらも薄い板状の形状を持ち、一見同種の鉱滓に見える。しかし、資料No. 2は、蛍光X線分析により、主成分の鉄（Fe）とともに、金属元素として亜鉛（Zn）、鉛（Pb）、などが、微量ながら観察された。一方資料No. 3からは、主成分が鉄であることは同様であるが、鉛とともに銅（Cu）がこれも微量ながら検出された。

資料No. 2とNo. 3を詳しく比較検討するために、資料断面の精査を行った。資料の一部を注意深く採取し、これを樹脂に包埋後、丁寧に研磨した。それぞれの断面を顕微鏡観察した結果を図1と図2に示す。外見では、同じように見えた両者の微妙な差異が読み取れる。資料No. 2では、微小に濃淡はあるものの比較的均一な基地組織に、大きいものでは200 μm程度の空隙が散見し、その中が金属質で詰まったものが随所に見受けられる。また、資料No. 3では、かなり大きな針状組織が全体を走り、その中に非常に微細な金属粒がランダムに存在することがわかる。

両者を構成する組織の材質を詳しく把握するために、走査型電子顕微鏡によってミクロな観察を行った（図3、4）。資料No. 2の基地組織は、主に鉄とｼﾘｺﾝ（Si）の酸化物からなるファイアライト（2FeO・SiO2）である。温度がある程度上がった（600℃以上か）ことで、本来ならムライト（Al2O3・SiO2系）化が進むと考えられるが、鉄がリッチなため、ｼﾘｺﾝがファイアライト化し、所々コランダム（Al2O3）が六角板状に析出していることがわかる。そして、その基地組織中に生じた空隙を埋めるようにパイライト（FeS 2）と鉛（Pb）が析出していることがわかる。石見銀山遺跡における科学調査において、銀製錬に伴って排出されたカラミの分析によって作成したフローチャート1）に基づくと、このような板状のカラミ（鉱滓）は、製錬の第2～3段階あたりで排出されたものと考えられるが、残念ながらパイライトと鉛の析出が、鉱石の種類と製錬される金属を短絡的に語ってくれるとは限らない。造滓剤として方鉛鉱（PbS）が添加されたことに起因する可能性もあり、ここでは、硫化鉱物を始原とした金属製錬工程において排出された鉱滓とするに留める。

一方、資料No. 3は、詳細な分析の結果、針状に走るファイアライトの間隙を埋めるように析出したムライトが織り成す基地組織中に、細かく分散していたのは硫化銅（CuS）に外周を包まれたほぼ純銅のコアを持つ銅粒であることがわかった。これらの結果から、資料No. 3は、硫化銅鉱石から銅を製錬する工程に伴い排出された鉱滓と考えてよかろう。なお、基地組織と銅粒の双方、特に銅粒中に地球化学的分類で親銅元素や親鉄元素に相当する金属元素、例えば、ヒ素（As）、アンチモン（Sb）、スズ（Sn）などが微量に残留しているようであれば、鉱石の地球化学的特徴を反映する指標として注目できるが、今回実施した分析では特にこれらの元素の検出をみなかった。

資料No. 4は、表面からの蛍光X線分析では、大半を鉄が占め、若干のマンガン（Mn）、鉛、亜鉛（Zn）などの元素を検出した。なお、試料断面の光学顕微鏡観察からは、鉱滓としての特徴も見えない。